般国道９号松江道路建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書XI

（才ノ峠遺跡）

1993年３月

道工事事務所
育 委 員 会

一般国道９号松江道路建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書XI

（才ノ峠遺跡）

1993年３月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所において，松江地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため，一般国道９号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては，埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが，避けることのできない文化財については，道路事業者の負担によって必要な調査を実施し，記録保存を行っています。

当松江道路においても，道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し，同委員会の御協力のもとに昭和50年以降現在まで５億円を越える費用を投じ発掘調査を実施してきております。

本報告は，平成３年度に実施した才ノ峠遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として，学術ならびに教育のために広く活用されることを期待すると共に，道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり，御指導御協力頂いた島根県教育委員会ならびに関係各位に対して深甚なる謝意を表するものであります。

平成５年３月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所長

神　長　耕　二

序

島根県教育委員会は，建設省中国地方建設局の委託を受け，平成３年度に一般国道９号松江道路建設予定地内に所在するオノ峠遺跡の発掘調査を実施しました。

松江道路建設に伴う調査は，昭和50年度から57年度にかけて，現在供用されている２車線の暫定部分について行い，昭和61年度からは車線拡幅に伴う部分について実施しております。

本年度の調査区は，昭和55年度調査区の隣接地にあたり，調査の結果，10ケ所で加工段を検出しました。この加工段からは，奈良時代から平安時代にかけての住居跡や土壙などの遺構を確認することができました。出土遺物は，須恵器・土師器・木製品・瓦などが発見され，当時の生活を知る上で貴重な資料になると思われます。特に瓦は出雲国分寺や国分尼寺と同じ文様のものであり，オノ峠遺跡と両寺の関係の深さをうかがわせます。

本報告書は，オノ峠遺跡発掘調査の結果をまとめたものです。広く各方面において，ご活用いただき，多くの方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を多少なりとも高めることに役立てば幸いです。

なお，調査にあたり御協力いただきました建設省松江国道工事事務所をはじめ，関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成５年３月

島根県教育委員会

教育長　坂本和男

例　　言

1．本書は，建設省中国地方建設局の委託を受けて，島根県教育委員会が平成３年度に実施した一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．平成３年度は，才ノ峠遺跡の発掘調査を実施した。発掘地は次の通りである。

　才ノ峠遺跡　　島根県松江市竹矢町字才ノ峠1554－14他

3．調査組織は次の通りである。

事　務　局　〔平成３年度〕

目次理雄（文化課長），藤原義光（同課長補佐），勝部　昭（同課長補佐），高橋研（文化係長），伊藤　宏（文化係主事），田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

〔平成４年度〕

目次理雄（文化課長），勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長），山根成二（文化課長補佐），久家儀夫（同課長補佐），高橋　研（文化係長），伊藤　宏（文化係主事），工藤直樹（企画調整係主事），田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　宮沢明久（主幹・埋蔵文化財第１係長），萩　雅人（文化課主事），木村直人（教諭兼主事），津森　敏（教諭兼主事）

調査指導者　山本　清（島根県文化財保護審議会委員）

田中義昭（島根大学法文学部教授）

山本信夫（太宰府市教育委員会）

近澤豊明（綾部市教育委員会）

遺物整理　三島千富美，菅井国江，安達裕子，馬庭志津子，板垣見知子，岡本智寿，野中佳子，深田　浩，金津まり子

4．本書で使用した遺構略号は，次の通りである。

　SD－溝，SB－掘立柱建物跡，SK－土壙，SP－ピット，SX－性格不明遺構

5．本書で使用した方位は真北を示す。

6．本書に掲載した「遺跡位置図」は，建設省国土地理院発行のものを使用し，「調査区配置図」は，建設省松江国道工事事務所作成のものを浄写して使用した。

7．本遺跡の出土遺物及び実測図，写真は島根県教育委員会で保管している。

8．本書の執筆・編集は萩と津森が協議して行った。

9．本文中の須恵器の年代を決定するにあたっては，『出雲国庁発掘調査概報』松江市教育委員会1970年，山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』1960年，田辺昭三『陶邑古窯祉群Ⅰ』平安考古学クラブ　1960年の各編年を参考にした。

目　　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査に至る経緯 …… 3

Ⅲ　調査の経過 …… 3

Ⅳ　調査の概要 …… 4

Ⅴ　自然科学分析 …… 81

Ⅵ　ま　と　め …… 82

挿　図　目　次

第１図　オノ峠遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　オノ峠遺跡調査区位置図 …… 4
第３図　第Ⅰ調査区土層断面図 …… 5
第４図　第Ⅱ調査区土層断面図 …… 8
第５図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土須恵器実測図１ …… 9
第６図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土須恵器実測図２ …… 11
第７図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土須恵器実測図３ …… 12
第８図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土土師器実測図 …… 14
第９図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土遺物実測図 …… 15
第10図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦実測図１ …… 17
第11図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦実測図２ …… 18
第12図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦実測図３ …… 19
第13図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦実測図４ …… 20
第14図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦実測図５ …… 21
第15図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土木製品実測図 …… 23
第16図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土遺物実測図 …… 24
第17図　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土石器実測図 …… 25
第18図　第Ⅲ調査区遺構配置図 …… 28
第19図　第Ⅲ調査区土壙実測図１ …… 30
第20図　第Ⅲ調査区SK03出土遺物実測図 …… 31
第21図　第Ⅲ調査区土壙実測図２ …… 33
第22図　第Ⅲ調査区土壙実測図３ …… 34
第23図　第Ⅲ調査区土壙実測図４ …… 36
第24図　第Ⅲ調査区SK07，10，14，19出土遺物実測図 …… 37
第25図　第Ⅲ調査区土壙実測図５ …… 38
第26図　第Ⅲ調査区土壙実測図６ …… 39
第27図　第Ⅲ調査区SX01土器溜り実測図 …… 40
第28図　第Ⅲ調査区SX01出土遺物実測図 …… 42

第29図　第Ⅲ調査区SB01実測図 …… 43
第30図　第Ⅲ調査区SB02，SB03実測図 …… 44
第31図　第Ⅲ調査区SB04実測図 …… 46
第32図　第Ⅲ調査区SB05実測図 …… 47
第33図　第Ⅲ調査区第1，第2加工段出土遺物実測図 …… 48
第34図　第Ⅲ調査区SB06実測図 …… 49
第35図　第Ⅲ調査区SB07実測図 …… 50
第36図　第Ⅲ調査区SB08実測図 …… 51
第37図　第Ⅲ調査区SB09実測図 …… 52
第38図　第Ⅲ調査区SB25実測図 …… 53
第39図　第Ⅲ調査区第3加工段出土遺物実測図 …… 54
第40図　第Ⅲ調査区SB10実測図 …… 56
第41図　第Ⅲ調査区SB12実測図 …… 57
第42図　第Ⅲ調査区SB13，SB14実測図 …… 58
第43図　第Ⅲ調査区SB15実測図 …… 59
第44図　第Ⅲ調査区第4，第5，第6加工段出土遺物実測図 …… 59
第45図　第Ⅲ調査区SB16実測図 …… 60
第46図　第Ⅲ調査区SB17実測図 …… 61
第47図　第Ⅲ調査区SB18実測図 …… 62
第48図　第Ⅲ調査区SB19実測図 …… 63
第49図　第Ⅲ調査区SB26実測図 …… 64
第50図　第Ⅲ調査区SB27実測図 …… 65
第51図　第Ⅲ調査区第7加工段出土遺物実測図1 …… 66
第52図　第Ⅲ調査区第7加工段出土遺物実測図2 …… 67
第53図　第Ⅲ調査区SB24実測図 …… 68
第54図　第Ⅲ調査区第8加工段出土遺物実測図1 …… 69
第55図　第Ⅲ調査区第8加工段出土遺物実測図2 …… 70
第56図　第Ⅲ調査区第8加工段出土遺物実測図3 …… 71
第57図　第Ⅲ調査区第8加工段出土遺物実測図4 …… 73
第58図　第Ⅲ調査区SB11実測図 …… 75
第59図　第Ⅲ調査区SB20実測図 …… 76

第60図　第Ⅲ調査区SB21実測図 …… 77
第61図　第Ⅲ調査区SB22実測図 …… 78
第62図　第Ⅲ調査区SB23実測図 …… 79
第63図　第Ⅲ調査区第９，第10加工段出土遺物実測図 …… 80
第64図　加工段，掘立柱建物跡遺構合成図 …… 82

図　版　目　次

図版１　遺構写真
図版２　遺構写真
図版３　遺構写真
図版４　遺構写真
図版５　遺構写真
図版６　遺構写真
図版７　遺構写真
図版８　遺構写真
図版９　遺構写真
図版10　遺構写真
図版11　遺構写真
図版12　遺構写真
図版13　遺構写真
図版14　遺構写真
図版15　遺構写真
図版16　遺構写真
図版17　遺構写真
図版18　遺構写真
図版19　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土須恵器写真
図版20　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土須恵器写真
図版21　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土須恵器写真
図版22　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土須恵器写真
図版23　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土土師器写真
図版24　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土土師器，土製品写真
図版25　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土土製品，瓦写真
図版26　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦写真
図版27　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦写真
図版28　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦写真
図版29　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦写真
図版30　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土瓦写真
図版31　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土木製品，鉄製品，古銭写真
図版32　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土石器写真
図版33　第Ⅰ，第Ⅱ調査区出土磁器写真
図版34　第Ⅲ調査区SK03出土遺物写真
図版35　第Ⅲ調査区SK07，10，14，19出土遺物写真
図版36　第Ⅲ調査区第１，第２加工段出土遺物写真
図版37　第Ⅲ調査区第３加工段出土遺物写真
図版38　第Ⅲ調査区第３加工段出土遺物写真
図版39　第Ⅲ調査区第４～第７加工段出土遺物写真
図版40　第Ⅲ調査区第７加工段出土遺物写真
図版41　第Ⅲ調査区第８加工段出土須恵器写真
図版42　第Ⅲ調査区第８加工段出土須恵器写真
図版43　第Ⅲ調査区第８加工段出土土師器写真
図版44　第Ⅲ調査区第８加工段出土土師器写真
図版45　第Ⅲ調査区第９，第10加工段出土須恵器写真
図版46　第Ⅲ調査区第９，第10加工段出土遺物写真

Ⅰ　位置と環境

才ノ峠遺跡は，松江市の南東，松江市竹矢町字才ノ峠に所在する遺跡で，水田部と丘陵部からなっている。遺跡周辺には縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡が数多く見られ，古代史を探求する上での重要地域として注目されている。昭和55・56年度の才ノ峠遺跡の調査では，奈良・平安時代の掘立柱建物跡，住居跡状遺構が検出され，遺物としては，須恵器・土師器・土製支脚・祭祀に使われたと思われる小形手捏土器及び土馬などが出土した。

周辺の縄文時代の遺跡は，意宇平野の縁辺や馬橋川流域付近の低湿地に点在しており，竹ノ花遺跡・さっぺい遺跡等が知られている。また，才塚遺跡からは，石斧が発見されている。

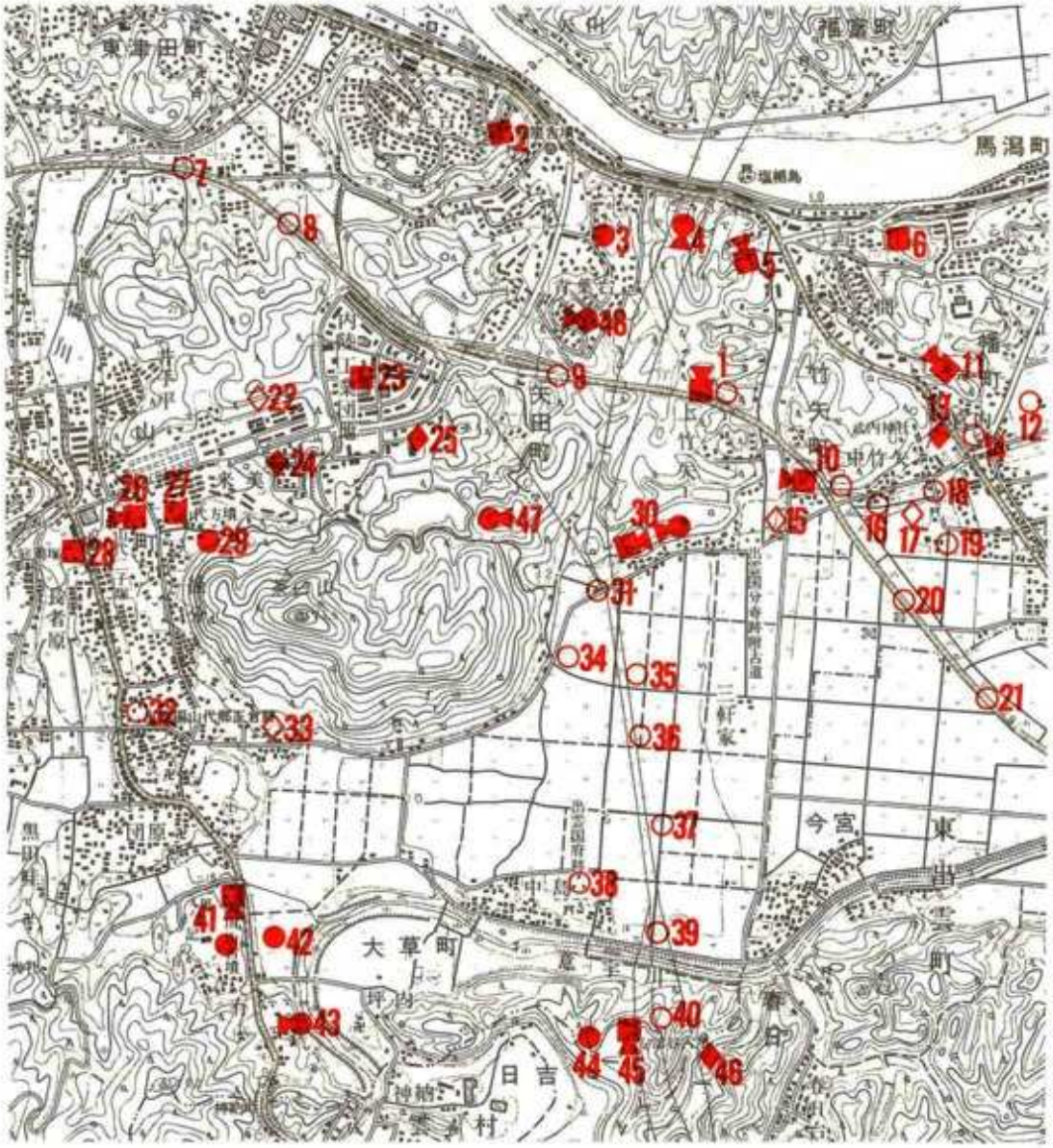
弥生時代の遺跡も，この周辺に多く見られる。中竹矢遺跡，布田遺跡，大敷遺跡，上小紋・向小紋遺跡などである。中でも上小紋・向小紋遺跡では弥生時代後期の水田跡が検出され，当時の稲作の様子を知る上で貴重な発見となった。また，布田遺跡でも前期から中期の溝状遺構を中心とする土壙や住居跡が発見され，才ノ峠遺跡に隣接する中竹矢遺跡では弥生時代の土壙の他，古墳，横穴墓，奈良・平安時代の建物跡などが検出された。

古墳時代中期から後期にかけて，この地域に数多くの古墳が築造された。中期のものは比較的規模の大きなものが多く，前方後円墳では井ノ奥４号墳，手間古墳等があり，方墳には大庭鶏塚，石屋古墳などがある。また，同時期に西百塚，東百塚，後谷古墳群などの群集墳も造られている。後期に入ると「額田部臣」銘文入り大刀が発見された岡田山１号墳や，御崎山古墳のような横穴式石室を持つ古墳，また岩屋後古墳，山代方墳のような石棺式石室を持つ古墳など，多様な古墳が築造され，さらに意宇平野周辺の丘陵斜面には安部谷・十王免・狐谷横穴群など石棺式石室の形態をまねた横穴墓群も造られた。

律令時代に入ると，意宇平野南側中央付近に出雲国庁が置かれ，出雲国の政治の中心となった。また，出雲国分寺・国分尼寺もこの地域に造営され，文化の中心地としても栄えた。これらの寺院で使用した瓦を焼いたと思われる窯跡も発見されている。

参考文献

『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』　島根県教育委員会　1976年
『　　同　　上　　Ⅳ』　同　1983年
『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ』　島根県教育委員会　1990年
『　　同　　上　　Ⅸ』　同　1990年



1.オノ峠遺跡、オノ峠1号墳　2.石屋古墳　3.井ノ奥古墳群　4.手間古墳　5.竹矢岩舟古墳
6.灘山古墳　7.石台遺跡　8.勝負遺跡　9.平所遺跡　10. 中竹矢遺跡、中竹矢1号墳　11.迎接寺古墳群
12.さっぺい遺跡　13.代宮家後横穴群　14.的場土壙墓　15.出雲国分寺跡　16.出雲国分寺瓦窯跡
17.出雲国分尼寺跡　18.平浜八幡宮前遺跡　19.宮内遺跡　20.布田遺跡　21.夫敷遺跡　22.来美廃寺
23.来美古墳　24.狐谷横穴群　25.十王免横穴群　26.山代二子塚　27.山代方墳　28.大庭鶏塚
29.山代円墳　30.上竹矢古墳群　31.間内遺跡　32.山代郷正倉跡　33.四王寺跡　34.才塚遺跡
35.上小紋遺跡　36.四配田遺跡　37.神田遺跡　38.出雲国庁跡　39.大屋敷遺跡　40.天満谷遺跡
41.岡田山古墳群　42.岩尾後古墳　43.御崎山古墳　44.百塚山古墳群　45.古天神古墳
46.安部谷横穴群　47.廻田古墳　48.井ノ奥4号墳

第1図　オノ峠遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ　調査に至る経緯

今回の才ノ峠遺跡の調査は，昭和50年度に行った才ノ峠古墳群の調査区域及び昭和55年度の暫定道路部分の調査区域に隣接する４車線の本道工部分について実施した。

一般国道９号松江道路は，６車線が計画され，昭和50年度には才ノ峠古墳群の調査が行われた。さらに，昭和57年に行われた島根国体の主要関連道路として供用するために，暫定２車線分の発掘調査を昭和55・56年の２カ年にわたって，計７遺跡（春日遺跡・夫敷遺跡・布田遺跡・中竹矢遺跡・才ノ峠遺跡・勝負遺跡・石台遺跡）で行った。

その後，昭和60年度に建設省から一般国道９号松江道路の残り４車線の本道工部分の調査依頼があり，協議の結果，昭和61年度に春日遺跡から発掘調査を再開した。本年度は，本道工部分調査の６年目であり，一般国道９号松江道路ルート内の才ノ峠遺跡の調査を行った。

Ⅲ　調　査　の　経　過

本年度の調査区は，昭和50年度及び昭和55年度調査区域の北側に位置し，東から第Ⅰ～第Ⅲ調査区を設定した。調査面積は，5785m²であった。

第Ⅱ調査区は，４月19日から表土除去を開始した。遺物包含層から須恵器・土師器・瓦などの遺物が出土したが，遺構は検出されなかった。５月20日に全景写真を撮影し調査を終了した。

第Ⅰ調査区は，４月24日から表土除去を行い，調査の都合上，東半分について５月２日から遺構の精査を開始した。西半分については，７月15日より精査を行った。遺物は陶磁器，古銭を始めとして，石器・土器・木製品などが出土したが，遺構は検出されなかった。６月27日と８月２日に空中写真撮影を行い，調査を終了した。

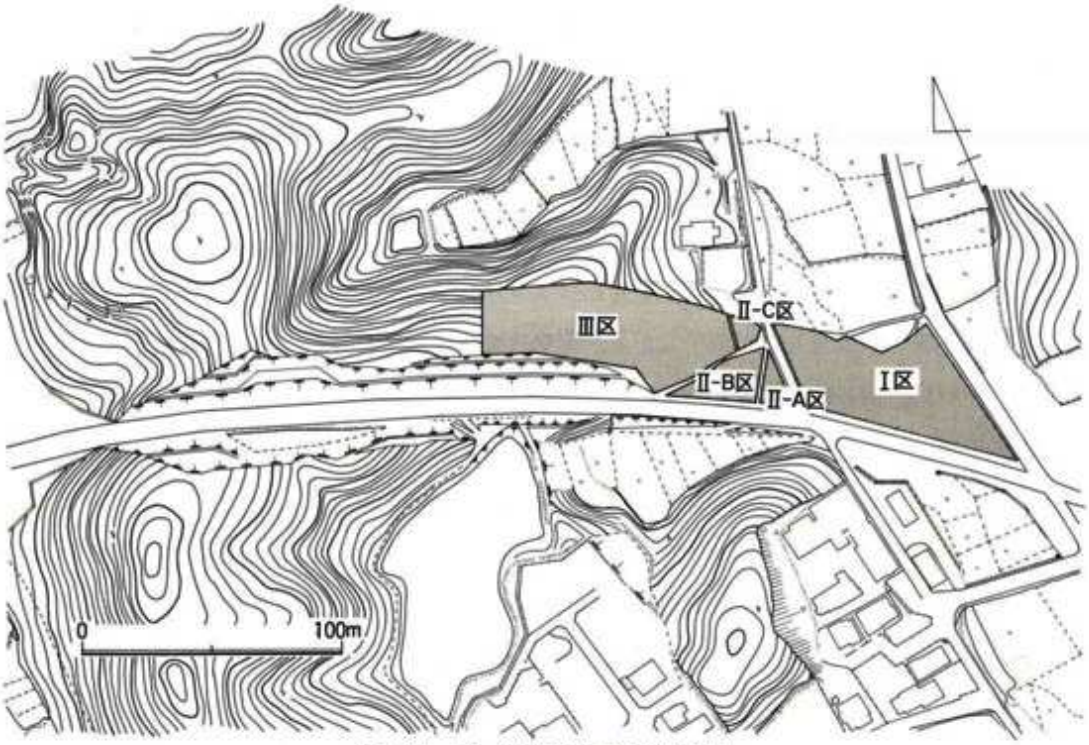
第Ⅲ調査区は，７月８日から地山確認のためのトレンチを入れ，７月15日より表土除去を行った。９月９日に地山を検出し，以後遺構の精査を行った結果，10の加工段を検出し，これに伴う柱穴494，土壙22を確認した。12月17日空中写真撮影を行い，調査を終了した。調査区内遺構・遺物実測の便宜上，調査区を東西方向に結んだラインに１m方眼を設定し，その基点を東南端に設け，この基点から西に向かってW0，1，2，3……とし，これに直交するラインを同じく基点から北に向かって，N0，1，2，3……とした。これにより座標を設定し，遺物の出土地点を，N－・W－と表示した。

Ⅳ　調　査　の　概　要

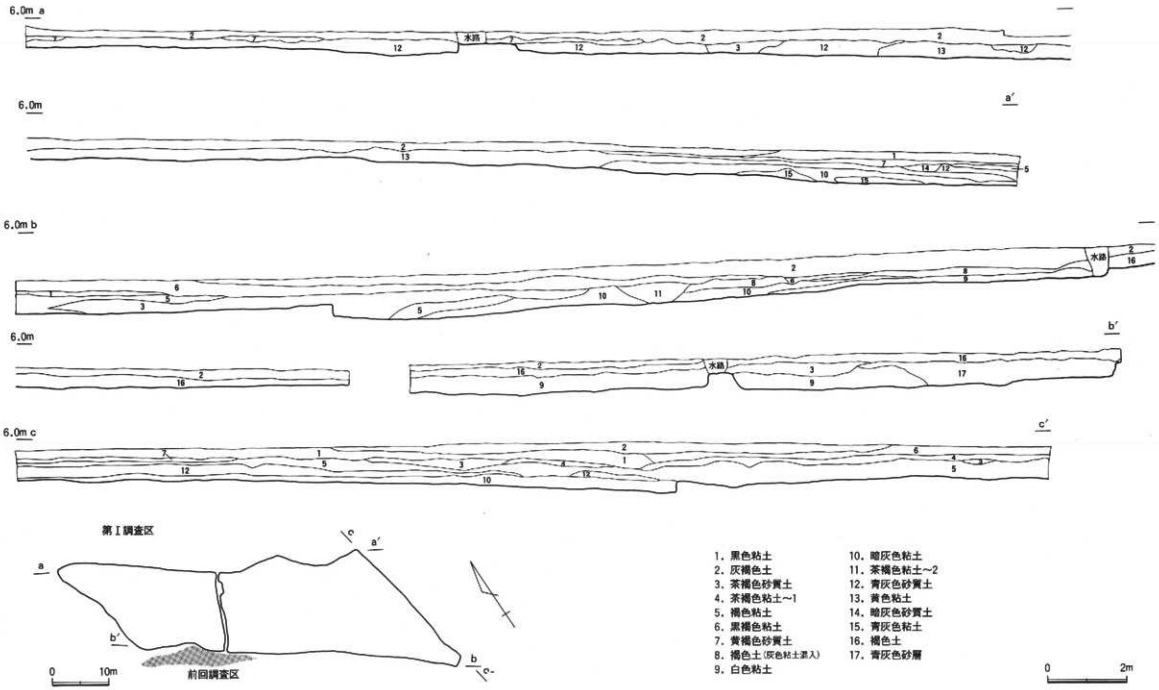
今回の調査では，一般国道９号松江道路に沿って，北側に第Ⅰ～第Ⅲ調査区を設定した（第２図）。第Ⅰ調査区は，調査区域の最も東に位置し，かつては水田であった地域で，東側から西側にかけて，ゆるやかに傾斜している。第Ⅱ調査区は，第Ⅰ調査区の平坦面から第Ⅲ調査区の丘陵斜面へ続く谷部分に位置する。この調査区は，農業用水路などによって三つの部分に分断されているため，東南部をⅡ－Ａ区，西南部をⅡ－Ｂ区とし，北部をⅡ－Ｃ区とした。第Ⅲ調査区は，遺跡の最も西側に位置し，第Ⅱ調査区から続く丘陵部を主とする。

１．第Ⅰ調査区（第３図）

第Ⅰ調査区からは，遺構は検出されなかったが，遺物包含層の堆積が認められた。土層の基本的な層序は，上層から灰褐色土，褐色土，黒褐色粘土，黒色粘土，茶褐色砂質土，褐色粘土，青灰色砂質土，暗灰色粘土，白色粘土と続く。灰褐色土と褐色土の厚さは西側で36cmを測るが，東側に行くにしたがって薄くなり黒褐色粘土，黒色粘土に変化する。黒褐色粘土及び黒色粘土の厚さは，最大で，それぞれ40cm，14cmを測る。青灰色砂質土は，調査区北西部を中心に堆積し，中央部の南側には茶褐色砂質土が堆積していた。これらの砂質土層及び褐色粘土層からは，多数の流木や植物が



第２図　才ノ峠遺跡調査区位置図



第３図　第Ⅰ調査区土層断面図

検出されたことから，この地域が河川もしくは湖沼であった可能性が高いと考えられる。

遺物が最も多く出土したのは，灰褐色土層下の黒褐色粘土及び黒色粘土からであり，この層は調査区東側を中心に堆積していた。したがって，遺物も調査区東部を中心に出土しており，奈良時代から平安時代にかけての須恵器，土師器，瓦が多かった。その他にも木製品，石器，土製支脚，手捏土器なども出土したが，遺物の量は比較的少なめで，遺存状況もあまり良くなく細片が中心であった。また，少数ではあるが，種子などの自然遺物も検出されている。

褐色土及び茶褐色土層は，調査区南西部を中心に堆積し，厚さは最大で30cmを測る。この層からは，上記の須恵器，土師器類の他，中世から近世にかけての陶磁器の破片，寛永通宝や元祐通宝などの古銭及び鉄製品などが出土した。

本調査区は，先述のように，もとは沼地もしくは池であったと思われる。そこに粘質土が堆積していく過程で，投棄など，何らかの理由によって遺物が混入したと考えられる。

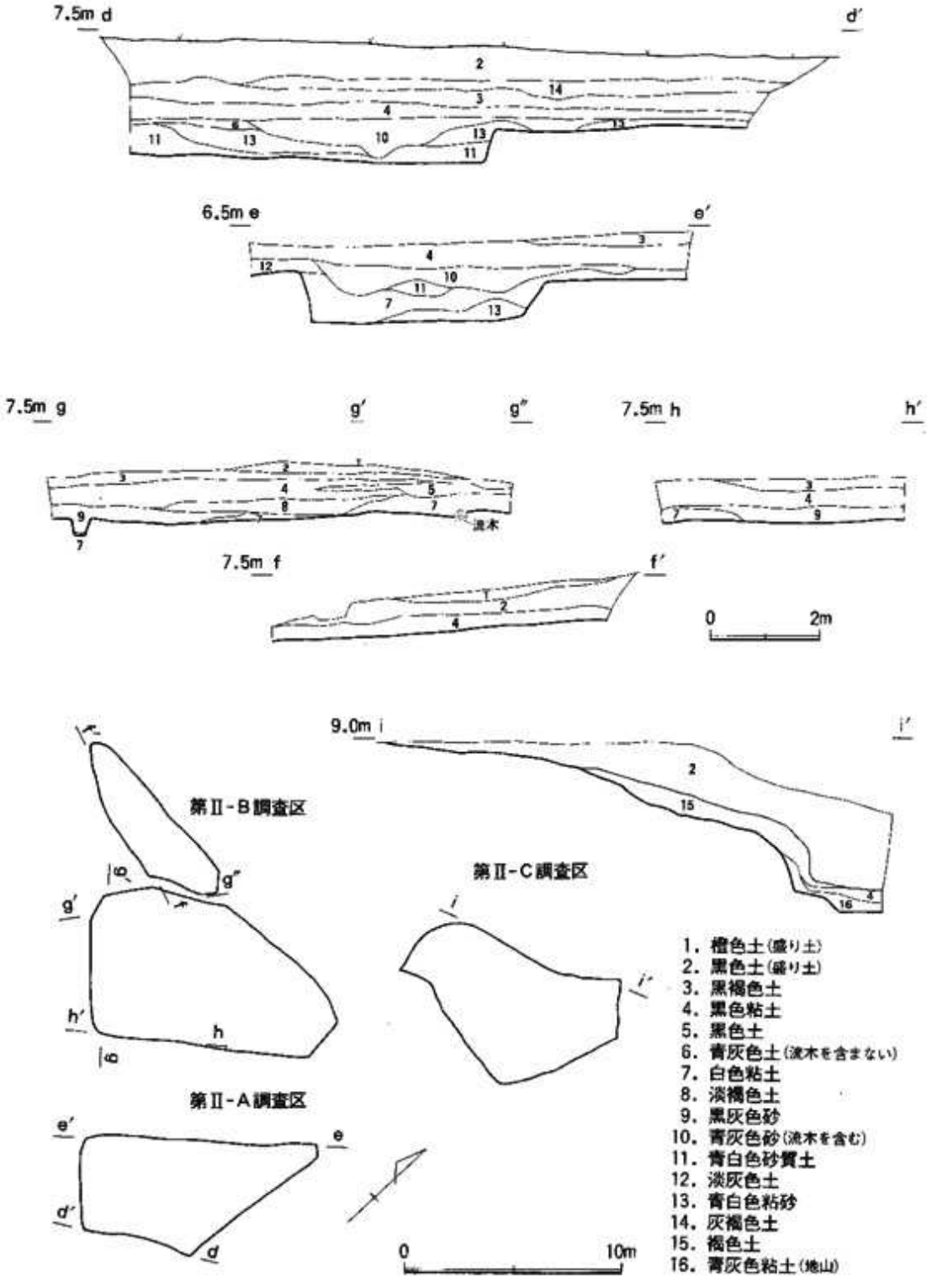
2．第Ⅱ調査区（第4図）

第Ⅱ調査区は，第Ⅲ調査区の丘陵部へ続く平坦面である。遺構は検出されなかったが，第Ⅰ調査区と同様遺物包含層が堆積していた。土層は，上層から，黒褐色土，黒色粘土，青灰色砂，白色粘土，青白色粘質砂である。

調査区東南部に位置するⅡ－A区は，砂層が比較的厚く，これらの層には流木などが多数見られた。西南部に位置し丘陵斜面に直接続くⅡ－B区は，全体に砂層が薄く，黒色粘土のすぐ下層に白色粘土層が堆積する部分もあった。また，調査区北部に位置しⅡ－B区と同様に直接丘陵斜面へ続くⅡ－C区には，砂層はほとんど見られず黒色粘土の下層に青灰色粘土層が堆積していた。第Ⅰ調査区の土層堆積状況と考え合わせると，第Ⅱ調査区は第Ⅲ調査区の丘陵部へ近づくほど砂層が薄くなっており，第Ⅰ調査区と同様，湖沼であったと考えられ，第Ⅲ調査区の丘陵東斜面に汀線があったと思われる。

遺物包含層は，黒褐色土層と下層の黒色粘土層であり，層の厚さはそれぞれ最大で50cm，45cmを測る。遺物は，須恵器，土師器，瓦，石器，土製品，手捏土器，木製品などが出土した。上層の黒褐色土層からは木簡，陶磁器も出土したが，木簡から文字を検出することはできなかった。細片がほとんどであった第Ⅰ調査区の土器と比較すると，遺物の遺存状況は良く，出土数も多かった。出土した瓦の中から，出雲国分寺跡や出雲国分尼寺跡で多く出土している軒平瓦と同文のものが数点認められた。また，土師器の破片には，竈や土製支脚，甑の一部と思われるものも含まれていた。これらの遺物も，第Ⅰ調査区と同様，本調査区が湖沼であった時期に，投棄などにより混入したものであろう。

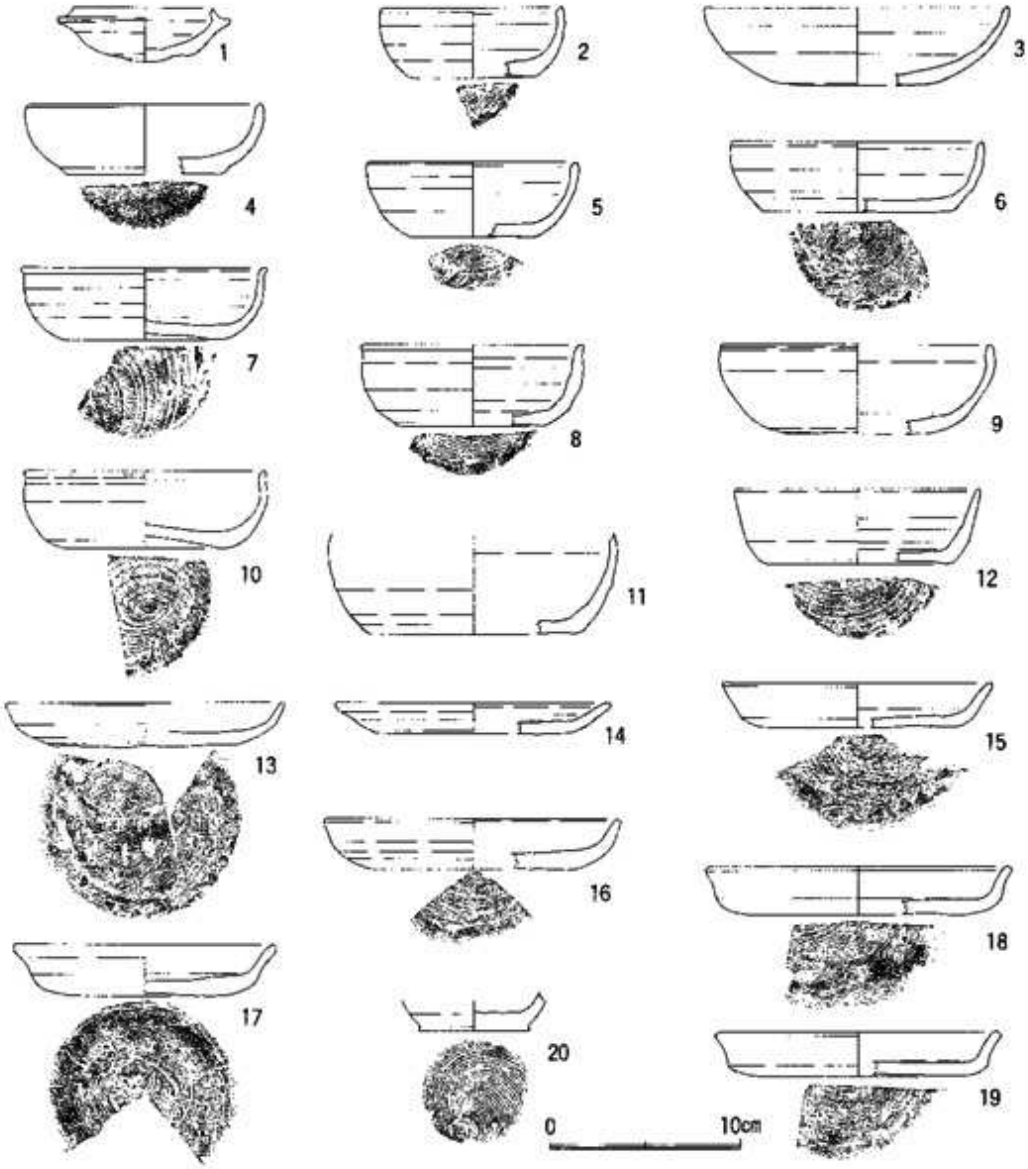
第Ⅰ・第Ⅱ調査区出土遺物（第5図～第17図，図版19～33）



第4図　第Ⅱ調査区土層断面図

1　**須恵器**　須恵器は調査区全域にわたって出土したが，第Ⅰ調査区の東側に行くに従い細片化していた。層位的には遺物包含層全てに含まれていたが，特に黒色粘土層から多く出土した。

坏　坏は高台の付かないもの（第５図１～12，20）と高台の付くもの（第６図１～９）がある。高台が付かないもののうち，第５図１は口縁部が内傾して立ち上がり，底部外面はヘラ切り後ナデを施している。第５図２～12は，坏体部が内湾気味に立ち上がり，第５図７，８，11は口唇部が「く」の字状に短く外反する。いずれも底部外面は回転糸切り未調整である。第５図11は他に比べ



第５図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土須恵器実測図(1)

器高が高く，5.2cm以上になると思われる。第５図20は，底径が5.8cmを測る小形品である。高台の付く坏では，体部が斜め上方へ直線的に立ち上がるもの（第６図１，２）と，斜め上方へやや内湾しながら立ち上がるもの（第６図３～６）とがある。第６図９も体部の立ち上がりの状態や高台の形態からみて，後者に属するものと考えられる。底部外面は第６図３と９が底部全体にナデ調整を施す以外は，回転糸切り痕が残る。第６図８は高台径が12.4cmを測り，高台や体部の厚みが１～1.5cmと他に比べ厚いことから，長頸壺の底部である可能性が強い。

皿　皿は，高台の付かないもの（第５図13～19）と，高台の付くもの（第６図13～19，25）とがある。高台の付かない皿は口径13.4～15.4cm，器高1.6～2.7cmを測り，第５図13～16は体部が斜め上方へ直線的ないし内湾気味に短く立ち上がる。また第５図17～19は体部が外反しながら短く伸びており，口縁端部を平坦に仕上げるもの（第５図18，19）もある。底部外面は，摩耗のため調整不明な第５図14を除いて回転糸切り未調整である。高台の付く皿は口径17.6～20.0cm，器高2.8～3.95cmを測り，高台の付かない皿と比較するとやや大形品である。形態はいずれも斜め上方へ向けて外反気味に開くが，第６図15，17は他に比べ体部の開き具合が大きい。底部外面は，第６図13，16がナデ調整で，その他は回転糸切り痕を残す。

蓋　天井部につまみを付けないもの（第６図10，11）と付けるもの（第６図20～24）がある。第６図10は口径7.8cm，器高2.9cmを測る小形品で，形態は半球状を呈し口縁端部が短く内傾する。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整を行う。第６図11は天井部が平坦で沈線により肩の稜を設けている。口縁端部内面にはわずかに沈線が認められる。天井部外面に回転ヘラ削り調整を施す。第6図20,21には宝珠状つまみが付き，第６図22，23には上面のくぼんだ偏平なつまみが付く。いずれも器高が低く，21，24は口縁端部が下方へ短く屈曲する。天井部外面には荒い回転ヘラ削りを施している。

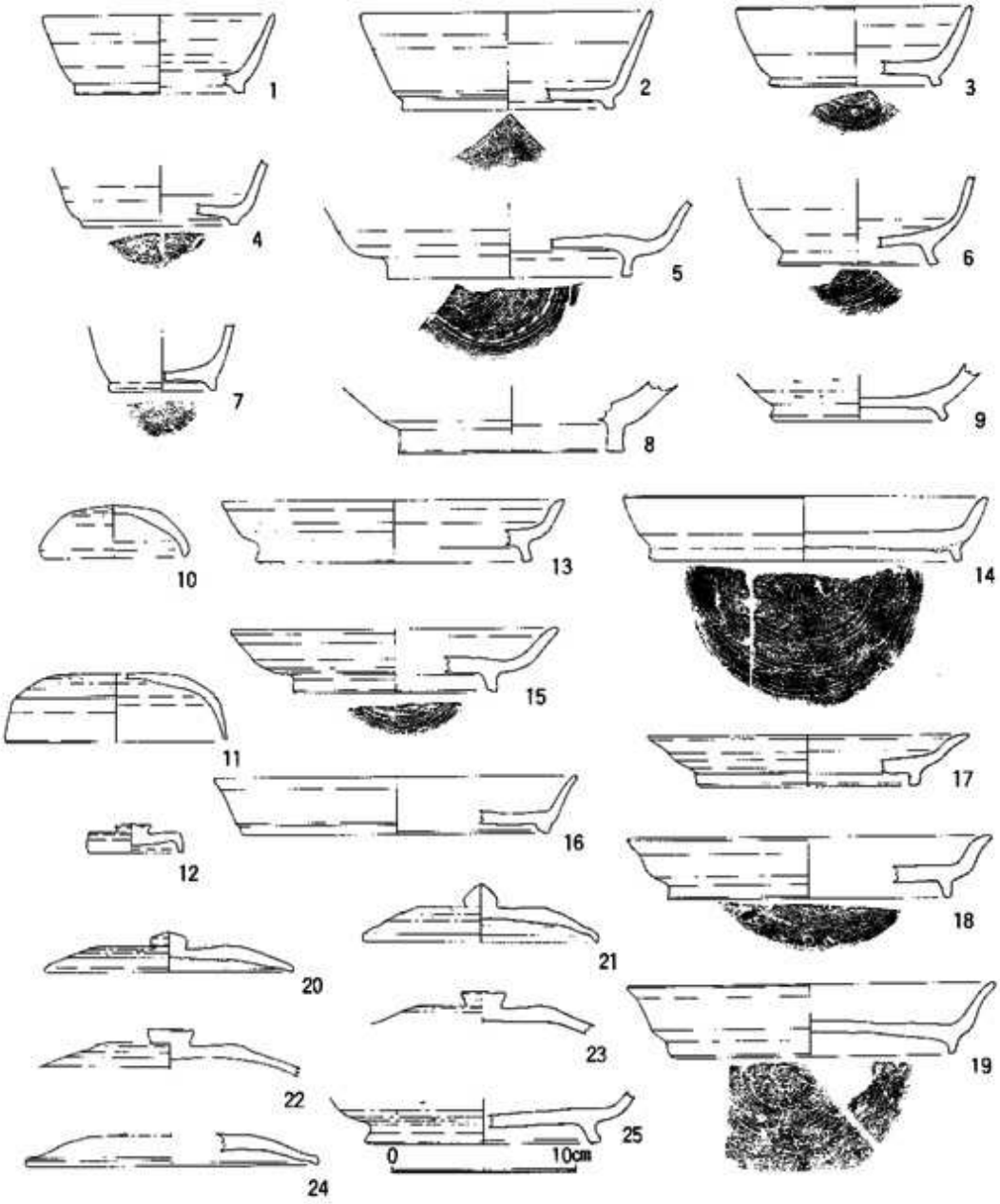
甕・壺　第７図１，２は口縁部が「く」の字状に屈曲し，やや外反する。２の口縁部内外面には自然釉が付着する。第７図４は口径10.6cm程の壺口縁部で，「く」の字状に短く外反する。第７図５は口径32.2cmを測り，口縁端部を上方へ短くつまみ出し，外面に平坦面を作り出す。第７図６は底径27.4cmを測る甕または壺の平底である。第７図８は長頸壺の頸部で，頸部中ほどに１条の沈線を入れている。今回図示していないが，甕の胴部は外面に平行叩き，内面に同心円叩きを行った後ナデ調整を施すものが多かった。

鉢　第７図３は体部が内湾気味に立ち上がり，口縁部が「く」に字状に短く曲がる。口縁端部は丸くおさめる。同様の口縁を有する鉢は出雲国庁編年第４形式の中にみられ，本品も平底を呈する鉢になると思われる。

高坏　第７図７は「ハ」の字状に広がる脚部で，透かしはみられない。第７図９，10は，太く短い脚部に切り込みの透かしを入れており，９は脚内面まで，10は上部のみ貫通している。10には盤

状の坏が付くものと思われる。第７図11は坏部の底である。

第Ⅰ・Ⅱ調査区で出土した須恵器のうち，蓋（第６図11）は陶邑TK43型式併行期の山陰須恵器編年Ⅲ期とされるもので，今回の調査で出土した遺物の中では最も古い。また，坏（第５図１），蓋（第６図10）は，陶邑TK217（古）型式併行期の山陰須恵器編年Ⅳ期のもので，高坏（第７図９，10）もこれに近い時期のものではないだろうか。その他の須恵器は，出雲国庁編年第４形式～５形



第６図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土須恵器実測図(2)

式の範疇にはいると考えられ，８世紀中葉～９世紀前半頃のものである。

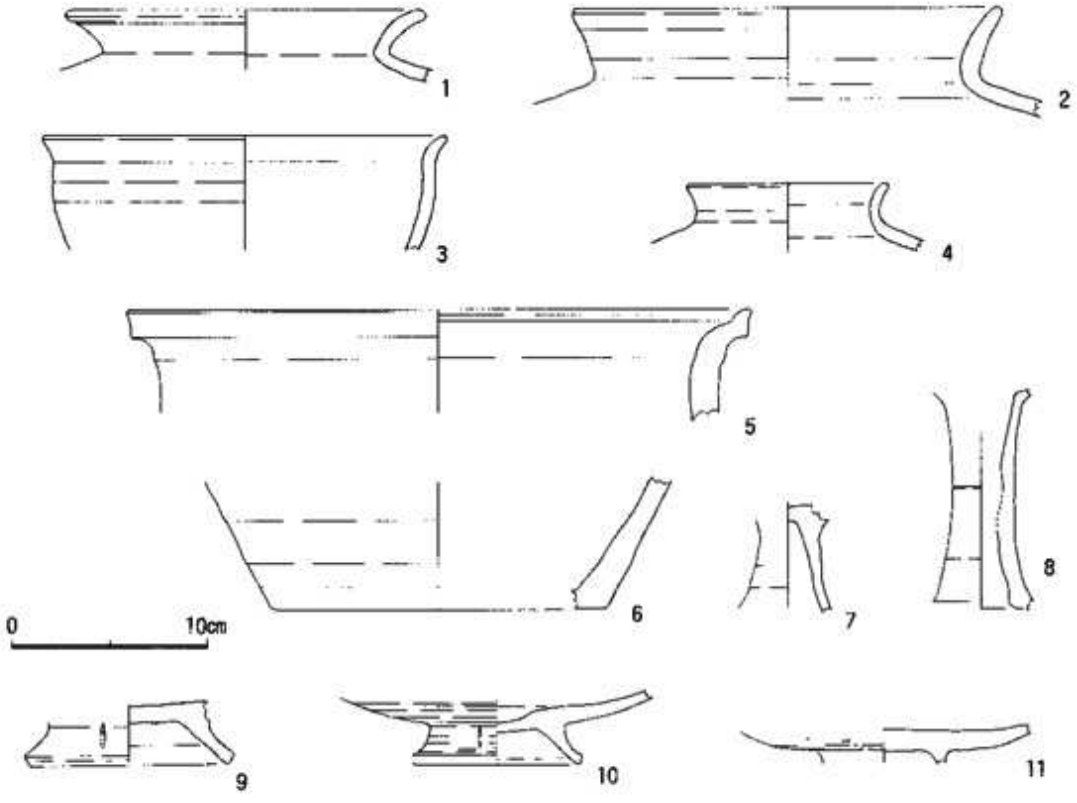
２　**土師器**　調査区全域からコンテナ約40箱分の土師器が出土した。須恵器と同様に黒色粘土層からの出土点数が最も多く，そのほとんどは細片であった。

甕　数量的には多く出土しているが，いずれも細片で図示できたものは１点のみであった。第８図１は口縁が「く」字状を呈し，内面頸部以下にヘラ削りを施している。

竈　甕と同様に破片のみで，全形を復元することは不可能である。第８図２は，炊口下部の破片で，底幅は5.2cmを測り，指頭によるナデの痕が残る。

土製支脚　比較的大形のもの（第８図３～５）と小形のもの（第８図６，７）に分けられる。上部が残存するもののうち，４～６は三又突起，７は二又突起である。三又突起の２本は大きく，その反対方向の突起一本は小形で短いものである。胴部断面は円形状をを呈し，脚部は裾広がりである。底部は３が平底，その他は上げ底で，表面を強いナデ調整もしくはヘラ削りで成形する。

把手　第８図８～14は竈・甑などの把手である。把手長3.8～8.7cm，断面径1.8～４cmを測り，形態，大きさにバラエティがあり，どの形態の甑に付くものかは不明である。指頭によるナデもしくは，ヘラ状工具である程度形を整えた後ナデて成形する。



第７図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土須恵器実測図(3)

手捏土器　第８図17は，口径3.5cm，器高1.7cmを測る小形品で，内法は浅い。第８図18，19は，器高が３cm前後あるやや大形品で，内法は深い。

土玉・土錘　土玉・土錘はⅠ・Ⅱ区から60個出土し，図化したものはその一部である。その形態から円筒形（第９図１～６），球形（第９図７から13），砲弾形（第９図14～26）に分類でき，砲弾形はさらに小形品（14～21）と大形品（22～26）に分けられる。円筒形，球形，砲弾形の大形品は黒色粘土層からの出土数が多かったが，砲弾形の小形品は全て上層の灰褐色土層及び褐色土層から出土しており，Ⅰ・Ⅱ区出土数の約半数を占める。円筒形の土錘は，大きさが長さ４～５cm，径３cm前後である。孔は直線的に整っているものが多く，指頭によるナデ痕跡が残る。やや不整な球状のものはいわゆる土玉と呼ばれるもので，径は３～４cmを測る。孔は円筒形と同様に直線的に整ったものが多い。表面にはナデ調整を行う。砲弾形の土錘は，小形品が長さ2.1～3.3cm，径１cm前後，大形品が長さ4.2～６cm，径1.8cm前後を測り，表面にナデ調整を施す。

分銅状土製品　底径4.9cm，高さ2.3cmを測る土製品で，その形態から分銅状と名づけたが用途は不明である。表面はかなり摩滅しているが，ナデ痕跡が認められる。

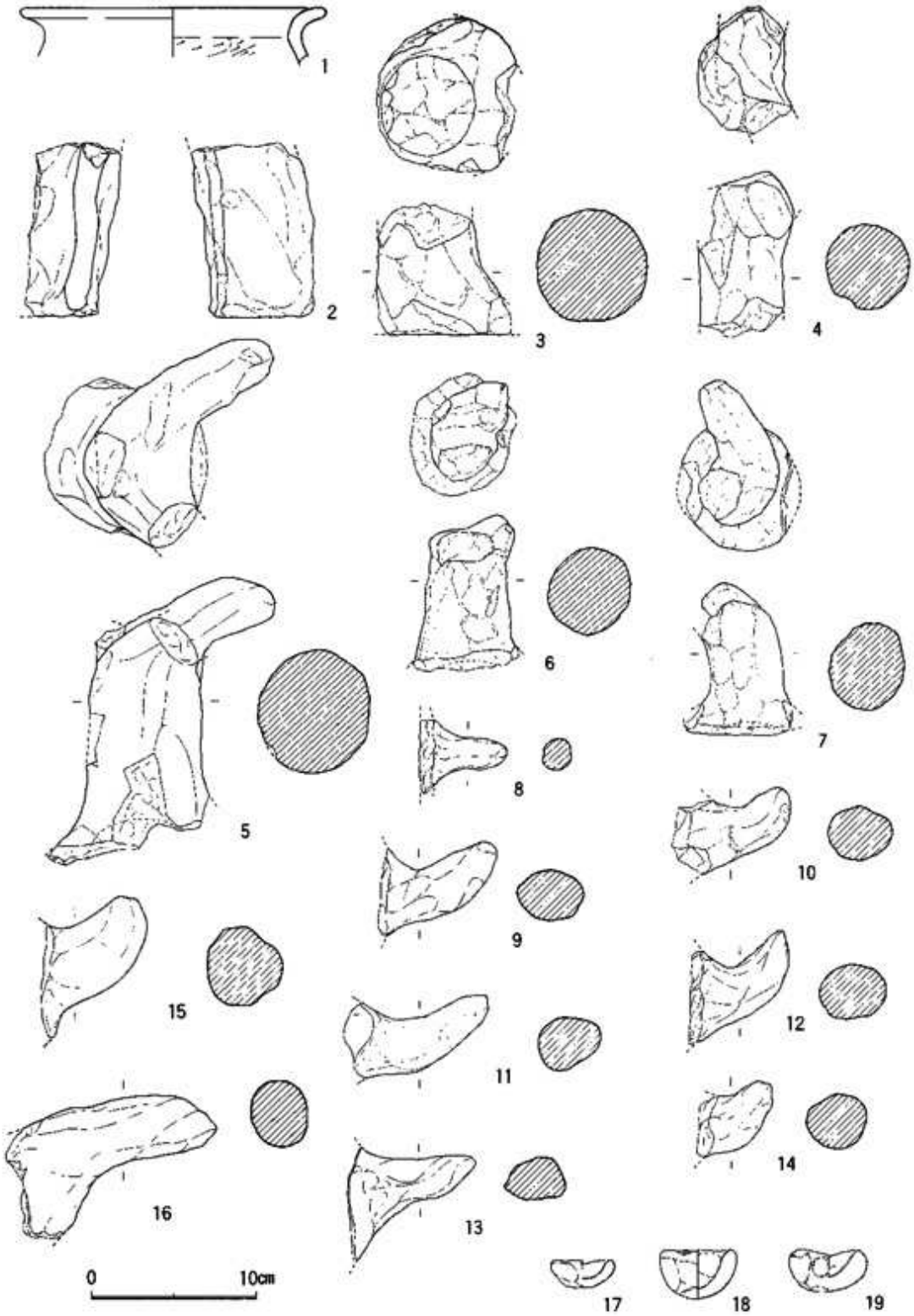
土師器の時期は，黒色粘土層中においては６世紀後半～９世紀前半にかけての須恵器と供伴しており，およその時期幅を知ることはできるが，土師器個々の形態から明確な時期の判断はしがたい。

３　**瓦**　調査区全域からコンテナ約30箱分の瓦片が出土しており，そのほとんどは黒色粘土層から出土した。丸瓦と平瓦の出土割合を比較すると平瓦の方がかなり多い。また，軒丸瓦の瓦当文様がわかるものは認められなかった。

軒平瓦　３点出土した軒平瓦のうち第10図１は，出雲国分尼寺の分類よると第四類である。[1] 瓦当の文様は目の細かい不整方向の格子状叩きにより表現されており，凸面も瓦当と同じ叩き具を使用して細かい格子状叩きを施す。顎はなく広端面から瓦当部へかけて徐々に厚くなっている。焼成は須恵質の良好なものである。第10図２，３は出雲国分寺，国分尼寺分類の第１類で，[2] 両寺の創建時のものとされている。３個の花文に４単位の唐草文を配し，内外を突線で囲んだ珠文帯で囲み，狭い平縁をもつものである。焼成は２が良好，３がやや軟質である。

丸瓦　行基式（第10図５）と，玉縁部を有するもの（第11図３）があり，その他は破片のため特徴が不明である。いずれも凸面にはナデ調整を行い，凹面には布目痕が残る。

平瓦　凸面の調整から格子叩き，縄目叩き，平行叩き，無調整の４種に分かれる。11－５，６，13－１，３～８，14－３は格子叩き調整を施しており，11－５は鋸歯状の叩き，11－６，13－１，３は目の大きい斜格子叩き，13－４は正格子叩き，13－５～８は深い平行叩きを直角方向に交互に施した目の細かい格子叩きである。12－１～４，13－２，14－３は縄目叩き調整を施すもので，13－２は凸面に太い縄目叩きを施し，離れ砂が多く付着している。それ以外のものは通常の縄目叩きで，



第8図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土土師器実測図

12－2，4，14－3は凹面に糸切り痕を残す。14－6～8は斜め方向に幅8㎜程度の平行叩きをつけるもので，14－8は凹面に布目痕と共に糸切り痕を残す。11－7，14－1，2，5，9は凸面に叩きが認められず，1，2，5には離れ砂が多く付着し，5と9の凹面には糸切り痕が残る。11－7は一枚造りの平瓦である。

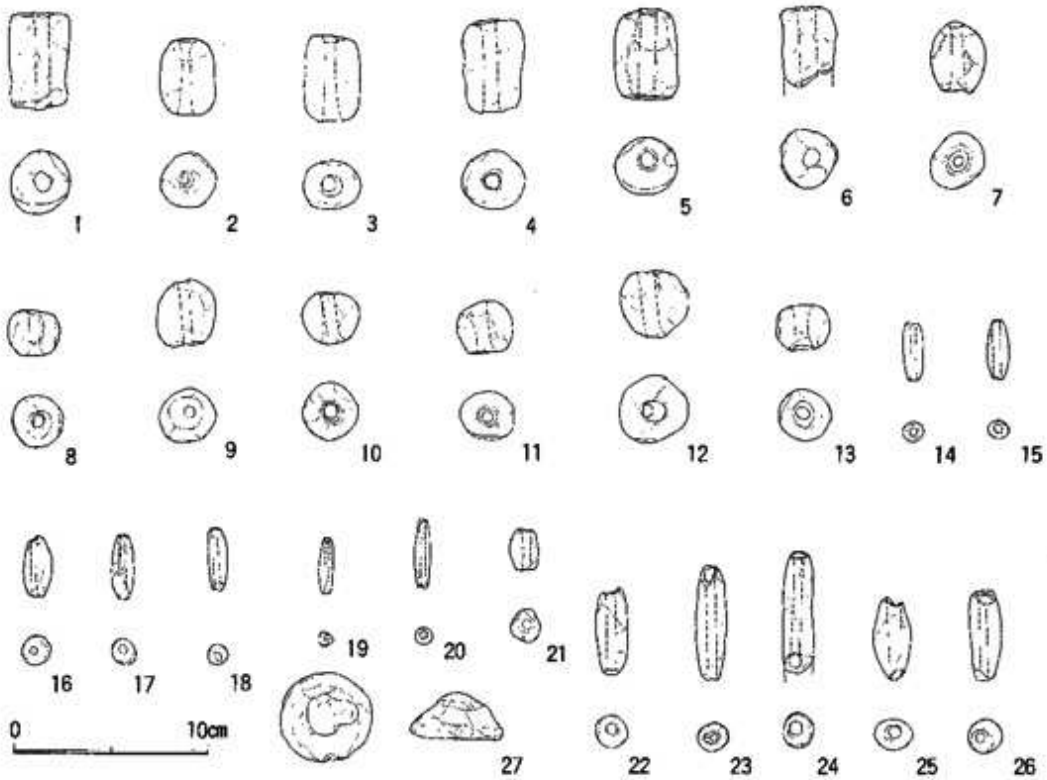
隅切り瓦　13－2は焼成前に隅を切り落としている。破片のため全形は不明であるが，凸面に縄目叩きを施し，離れ砂も付着している。

塼　14－4は厚さ3.4cmを測り，凹・凸両面に糸切り痕を残す。側部，端部共ヘラ状工具により平坦に仕上げる。焼成はやや軟質である。

3　**木製品**　木製品は，褐色土層及び黒色粘土層から出土した。

木簡　第15図1は長さ13.8cm，厚さ0.4cmで杉材の柾目板を使用している。上端の両側面には上下から切り込みをいれ，下端は側面を両方から削って先端を尖らす。付札に使用されたものと考えられるが，表面に墨痕は認められない。

丸木弓　第15図2は長さ74.5，径1.5cmを測る。丸木の灌木材を用い，先端の両側を上下から削り込んで長さ4cmほどの弭を造り出す。全体的に樹皮を剝ぎ取り整形している。



第9図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土遺物実測図

箸　長さ22.4cm，幅0.8cmを測り，木片を小割にした後，６方向から面取りを行い棒状に整形する。削りはきわめて荒く，本と末の区別がない。

支脚　第15図４は机などを支える支脚に比定しうるものと考えられ，長さ9.6cm，上幅3.2cm，下幅2.2cmを測る。上端に本体へ取り付けるためのほぞを削り出し，それに続く部分を四方から削る。下半分は６方向から面取りを行い脚状に整える。

用途不明品　第15図５は，板目材の端を丸く削っている。

４　**鉄製品**　鉄製品は第Ⅰ調査区の西端と第Ⅱ調査区Ａ区・Ｂ区から出土した。層位的には褐色土の表面に近い位置からの出土が多かった。

煙管　第16図１・２は煙管で１は雁首，２は吸い口である。いずれも銅製の板を加工したものと考えられる。１の煙導部は断面円形，２は断面半円形を呈す。

刀子　第16図３は，全長19.1cm，刀身12.6cm，刀幅1.3cm，茎長6.7cmを測る。茎には木質が付着している。

第16図４～６は角釘である。いずれも完形品で，長さはそれぞれ7.9cm，6.5cm，15.4cm，幅0.5～1.0cmを測る。断面は正方形（４，５）と長方形（６）のものがあり，頭部を「Ｌ」字状に折り曲げている。

鉄鏃　第16図７は方頭系の有茎鏃である。鏃身頭部は鋒が横一文字になっており，残存幅1.8cmを測る。関部は撫角を呈する。

古銭　第16図８～10は，いずれも「寛永通宝」（初鋳，寛永13年（1636年））で背文を持つかどうかは判読できない。

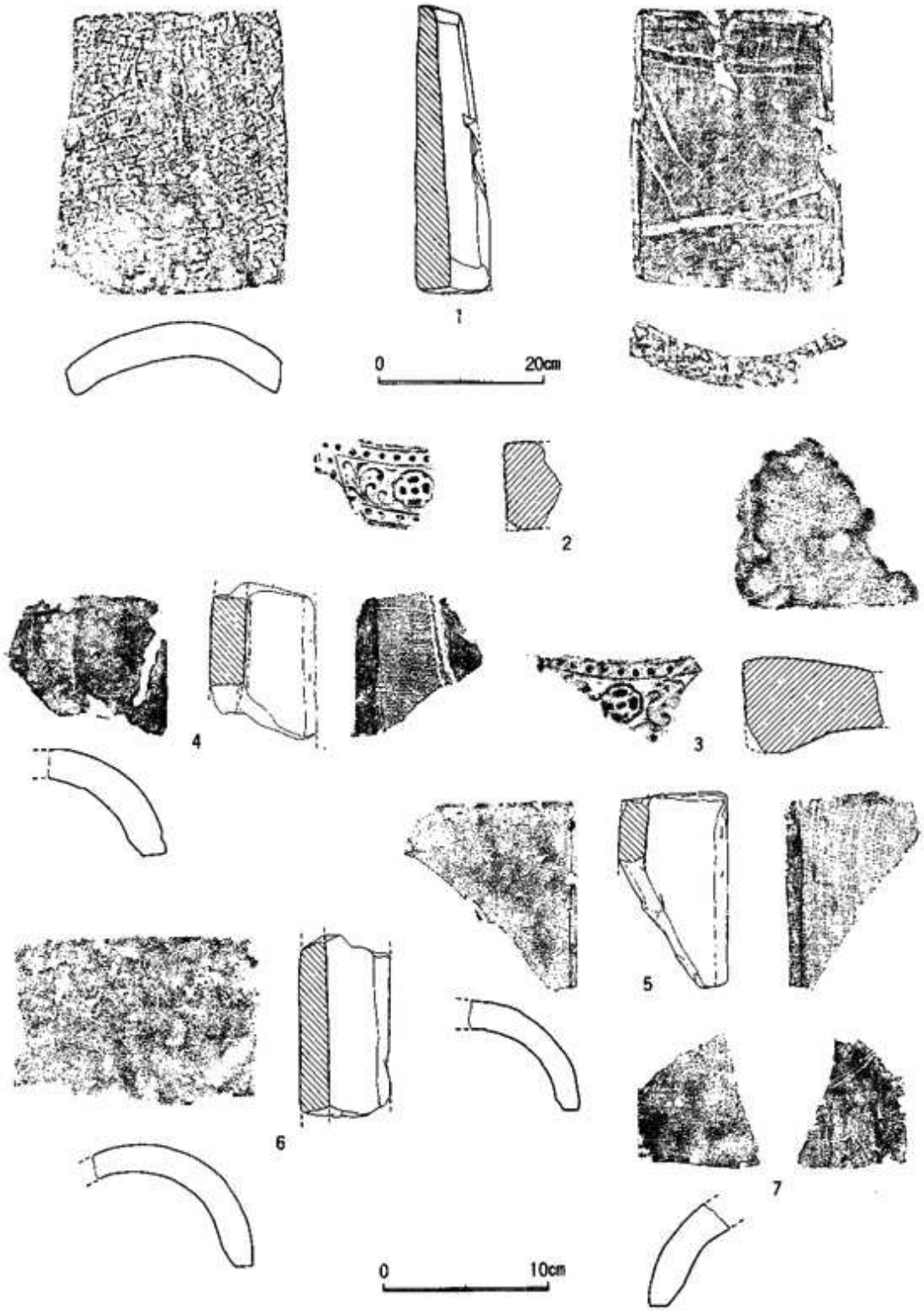
５　**石器**　石器は褐色土層及び黒色粘土層から出土した。

石斧　第17図１，２は蛤刃石斧で，１が残存長11.6cm，幅5.2cm，２が長さ15.4cm，幅3.9cmを測る。１は断面楕円形を呈しており，刃部周辺に研磨を施すがその他の部分には敲打痕が残る。２は，厚さ1.4cmの偏平な断面形を呈し，両側面に打抉痕が多く残る。刃部は先端のみ荒い研磨を施し，中央部には敲打痕が残る。４は刃部の幅が2.4cmを測る両刃の小形の偏平石斧である。基端部に打抉痕が残る他は全体に比較的丁寧な研磨を施している。

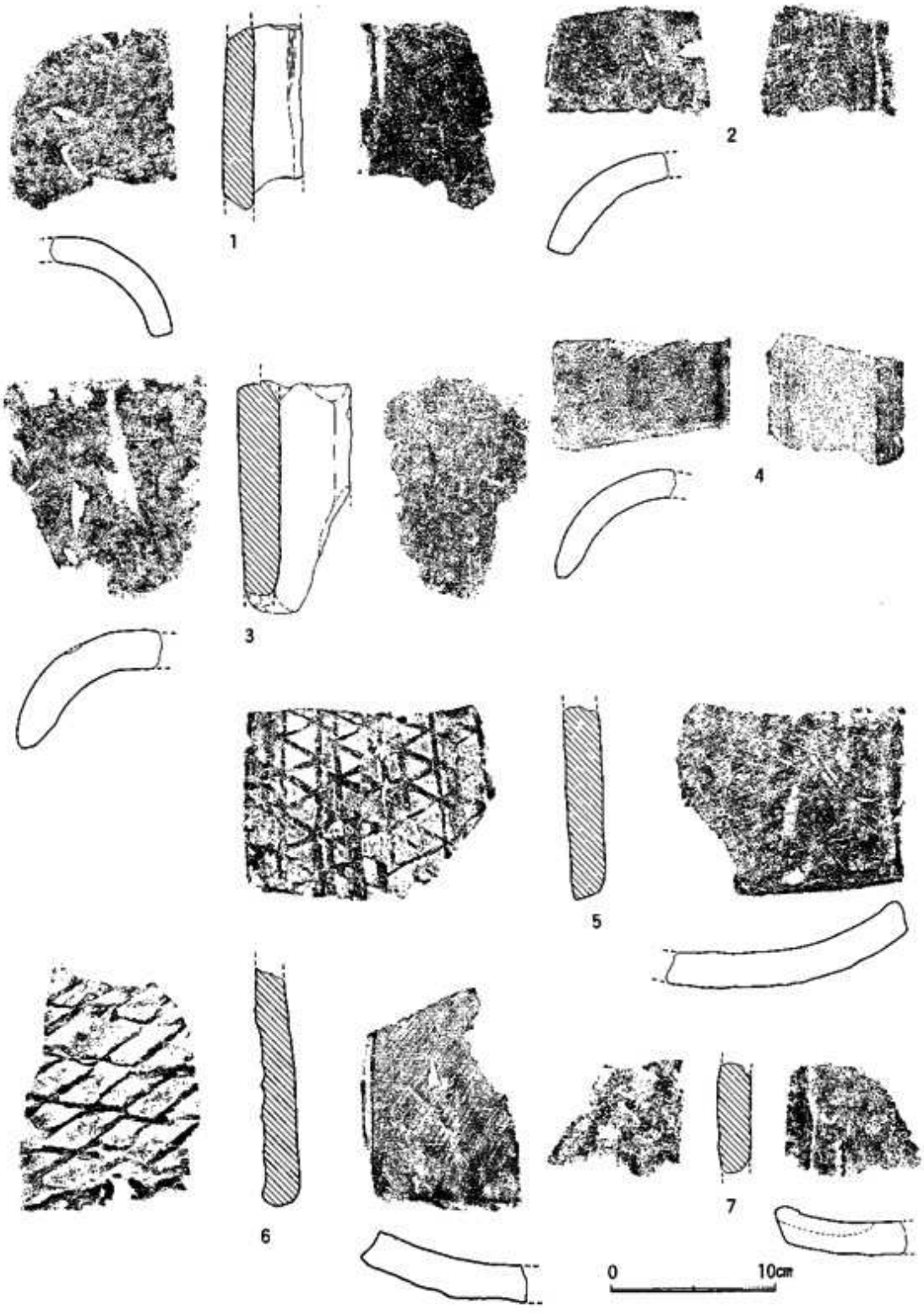
砥石　第17図３は長さ6.3cm，幅6.8cmを測り，両面・側面ともに使用痕が認められる。表面が滑らかな点から，仕上げ用の砥石と考えられる。

石錘　第17図５，６は偏平な自然石の側縁を打ち抉いた石錘で，長さ６cm前後，厚さ１cm前後を測る。５に２カ所，６に１カ所の打抉痕が認められる。

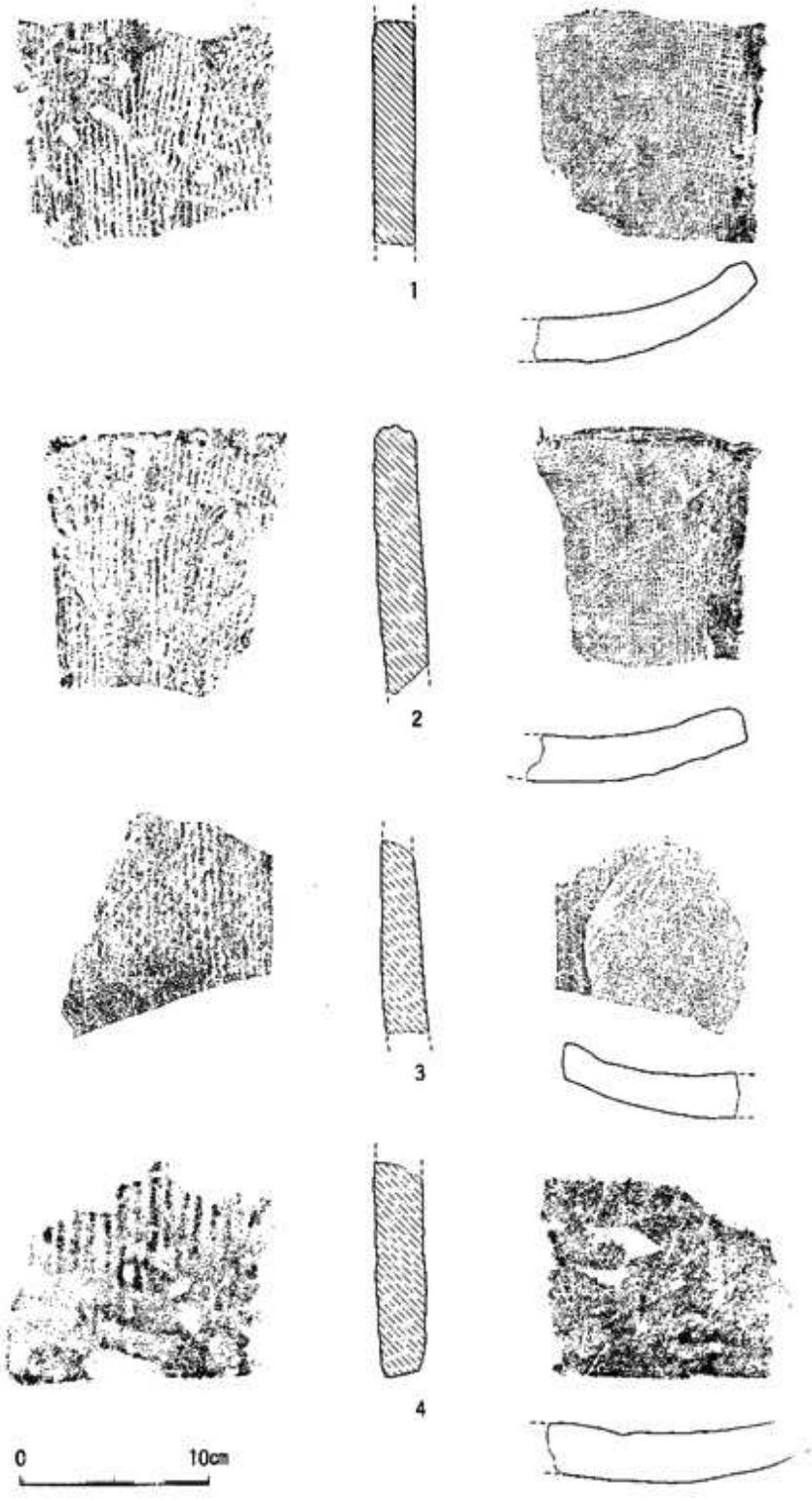
石鏃　第17図７～10は黒曜石製の石鏃で，７，８，10は凹基式，９は平基式である。大きさは７～９が復元長２cm前後，最大幅1.3～1.5cmを測るのに対し，10は長さ３cm，最大幅1.9cmと他の３点



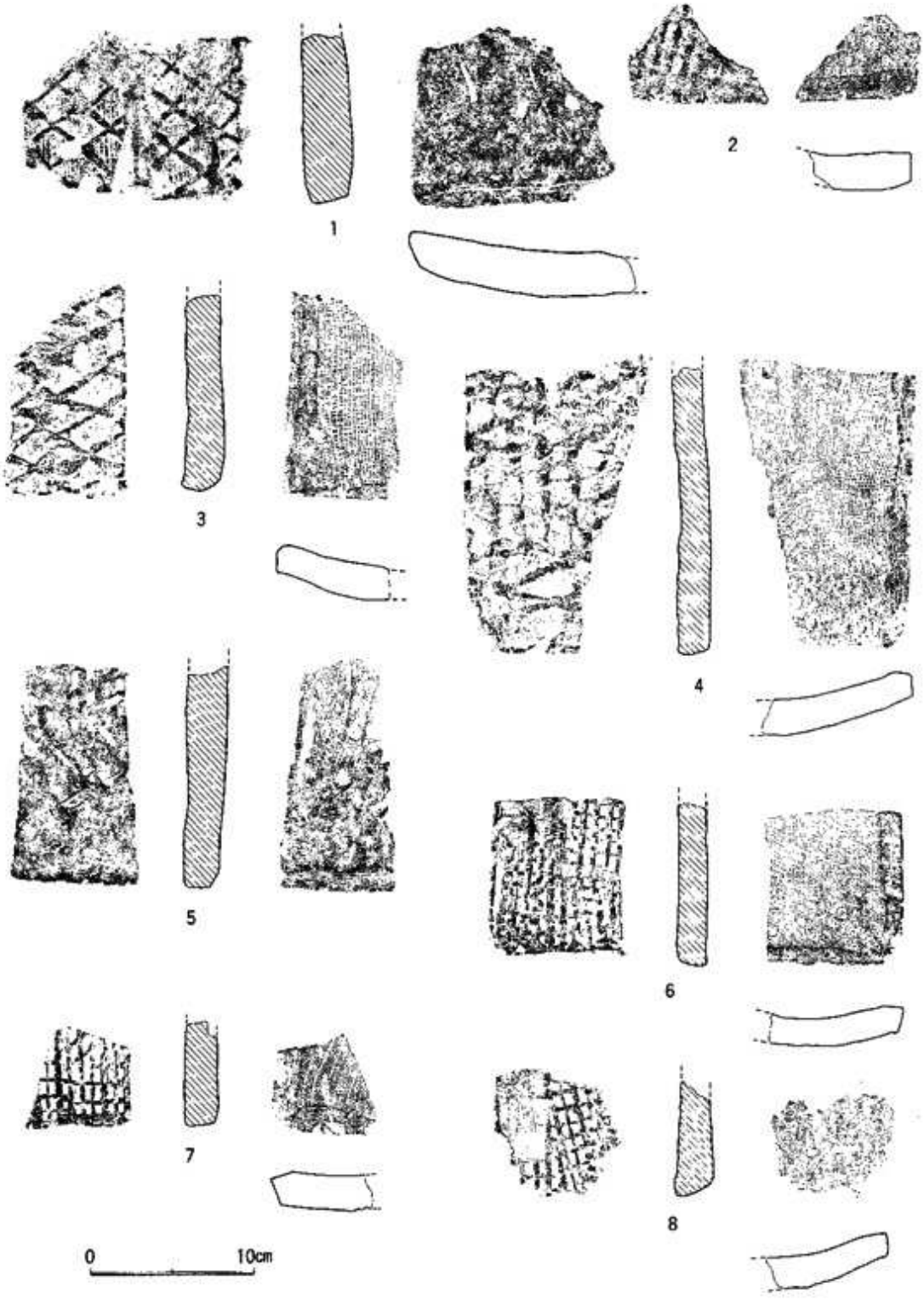
第10図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土瓦実測図(1)



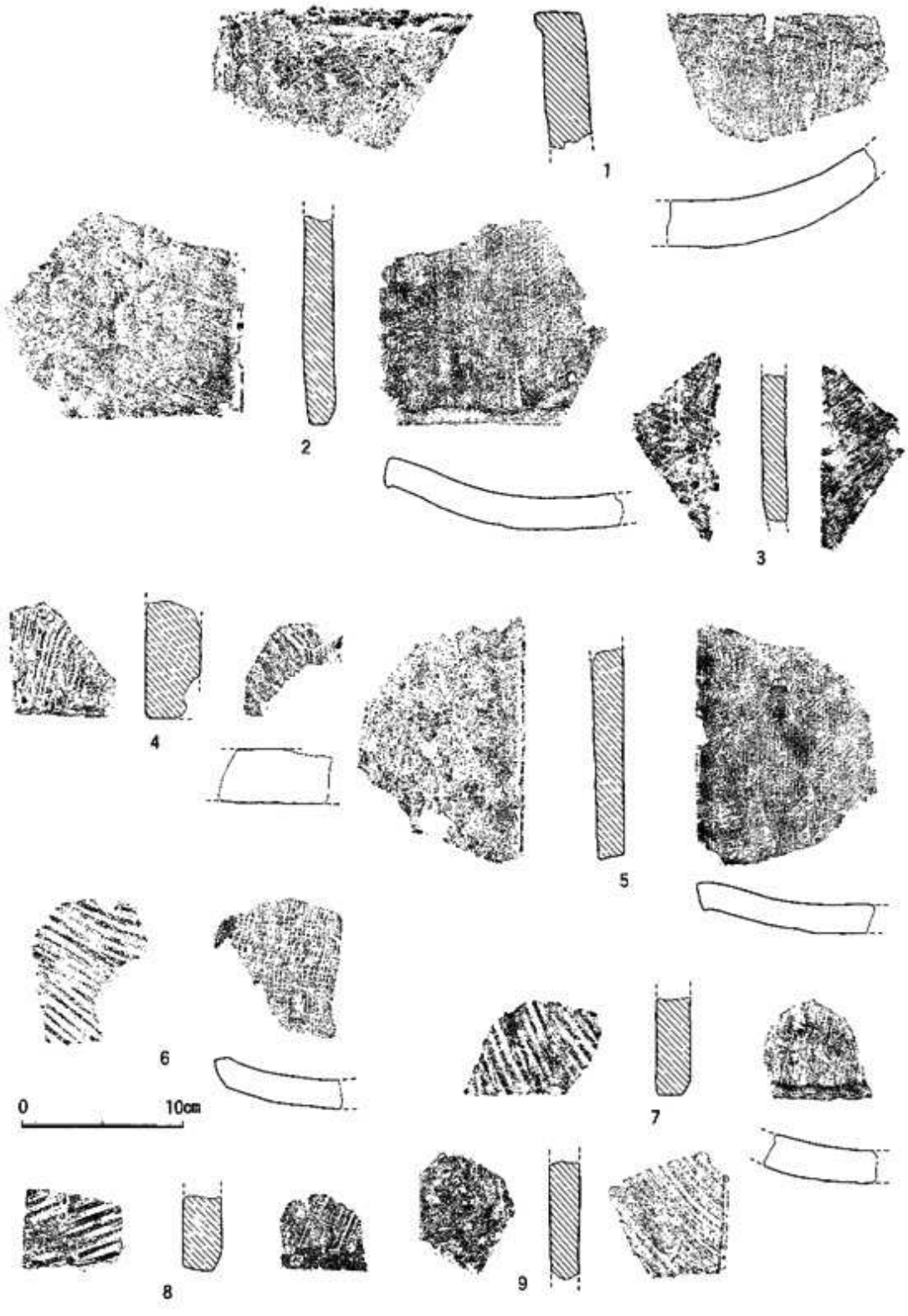
第11図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土瓦実測図(2)



第12図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土瓦実測図(3)



第13図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土瓦実測図(4)



第14図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土瓦実測図(5)

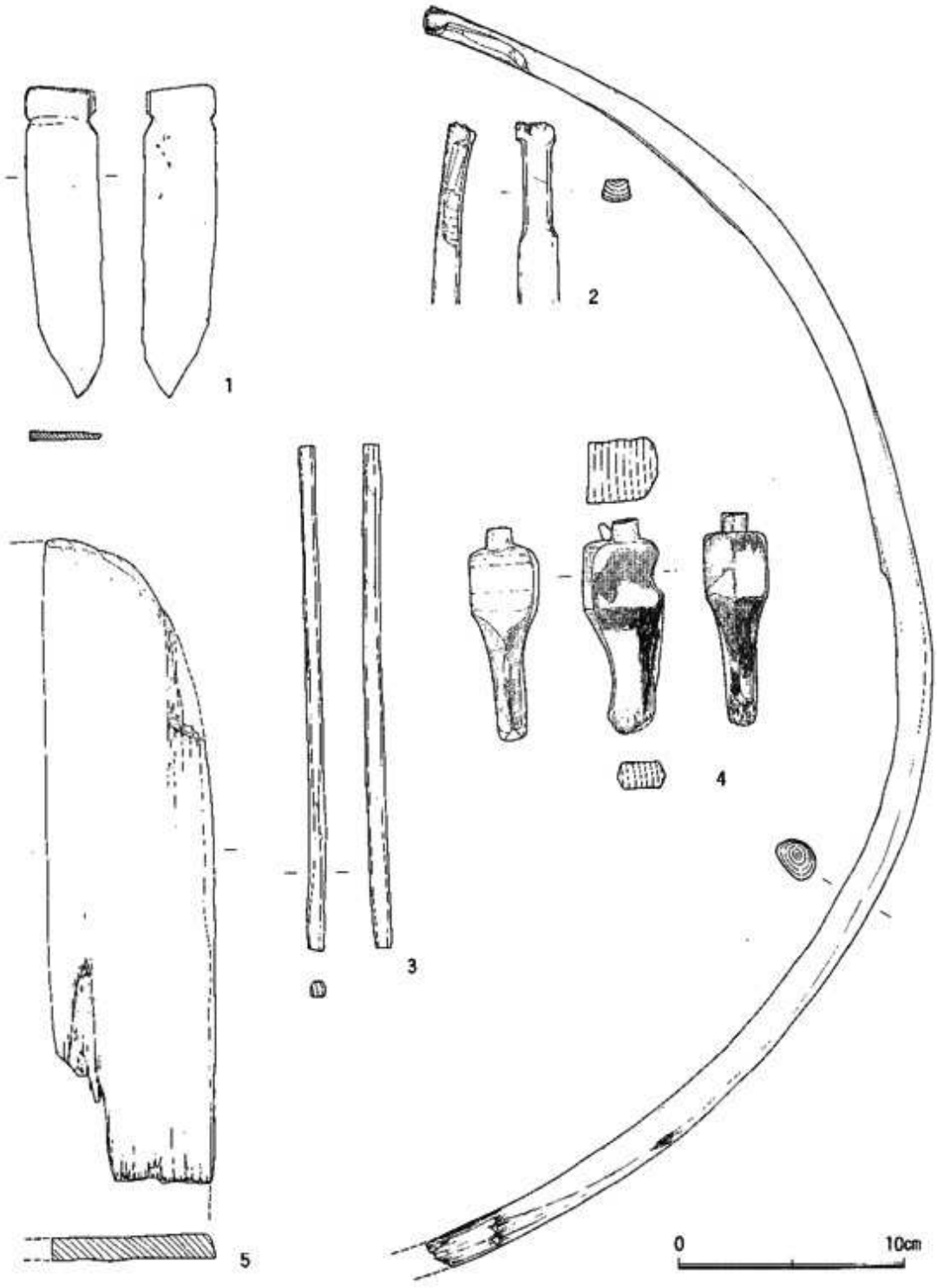
よりもやや大形品である。

6　**輸入磁器**（図版33－1～17）　陶磁器類は第Ⅰ調査区・第Ⅱ調査区の褐色土層から主に出土したが，細片が多かった。輸入磁器の他，国産陶磁器類や染め付けなども認められたが，いずれも破片のため詳細な時期は不明である。34点出土した輸入陶磁器のうち，時期の判明したものは白磁10点（1～8，10，12），青磁7点（9，11，13～17）であった。1，5，6，8は白磁碗の底部で，8は削り出しの高い高台を有しており，1は高台部が欠落する。5は化粧土の上に釉を施しており，1と6の内面には櫛目紋が認められる。2，4は碗の口縁部で，口縁端部が2は直線的，4は偏平な玉縁状を呈する。7は皿底部で削り出しの低い高台をつける。3は碗または皿の破片である。これらを太宰府の白磁分類にあてはめると[3]，碗では1がⅤ類，2がⅣ－1b類，4がⅣ類，5がⅩⅡ－1b類，6がⅣかⅤかⅦ類，皿では3がⅥかⅦ類，7がⅡ－1類と考えられ，いずれも11世紀後半から12世紀前半の時期に比定できる。9は龍泉窯系青磁の小碗底部で，底部の器肉が厚く，断面が四角形に近い高台を有する。太宰府の龍泉窯系青磁分類のⅠ－1または4類で12世紀中葉頃のものである。10は白磁の口禿の皿で，口縁端部が短く外反する。11は龍泉窯系青磁の破片である。10は太宰府の白磁分類Ⅸ類，11は龍泉窯系青磁分類のⅢ類で13世紀中葉頃のものである。

12は高台が付く碗で，内面に花紋のスタンプがある。詳細な年代は不明であるが，中国・元以降の14世紀代のものである可能性が高い。13～17はいずれも青磁碗の破片である。14，16は口縁部で，外面に14は蓮弁文，16は雷文帯を持つ。15は外面に線描蓮弁文をもつ。17は内面にヘラ描きの細線が残る。これらのうち特徴のわかるものを上田分類にあてはめると[4]，14がB－ⅢまたはⅣ類，15がのB－ⅣまたはⅣ'類，16がC－Ⅱ類となり，14世紀後半から16世紀代のものと考えられる。13，17は細片のため詳細は不明であるが，施釉の状態などからほぼ同時期のものと推察される。なお，輸入磁器の年代については福岡県太宰府市教育委員会・山本信夫氏の御教示を得た。

以上各遺物の特徴について述べたが，これらの出土遺物から各包含層の堆積年代を考えてみたい。まず上層である第Ⅰ調査区の灰褐色土層（第3図2層），褐色土層（第3図16層），第Ⅱ調査区の黒褐色土層（第4図3層）の出土状況をみると，須恵器，土師器，瓦の他，鉄製品，石器，輸入磁器などが出土している。須恵器の時期は7世紀末～8世紀後半頃に比定され，土師器と瓦もおよそ同時期のものと考えられる。これに続く時期のものでは，11世紀後半～16世紀にかけての輸入磁器と，17世紀前半以降の寛永通宝があり，奈良時代から江戸時代にかけての遺物が混在する。このうち，須恵器や土師器は細片が多く表面も摩滅しているため，下層からの混入品である可能性が高い。

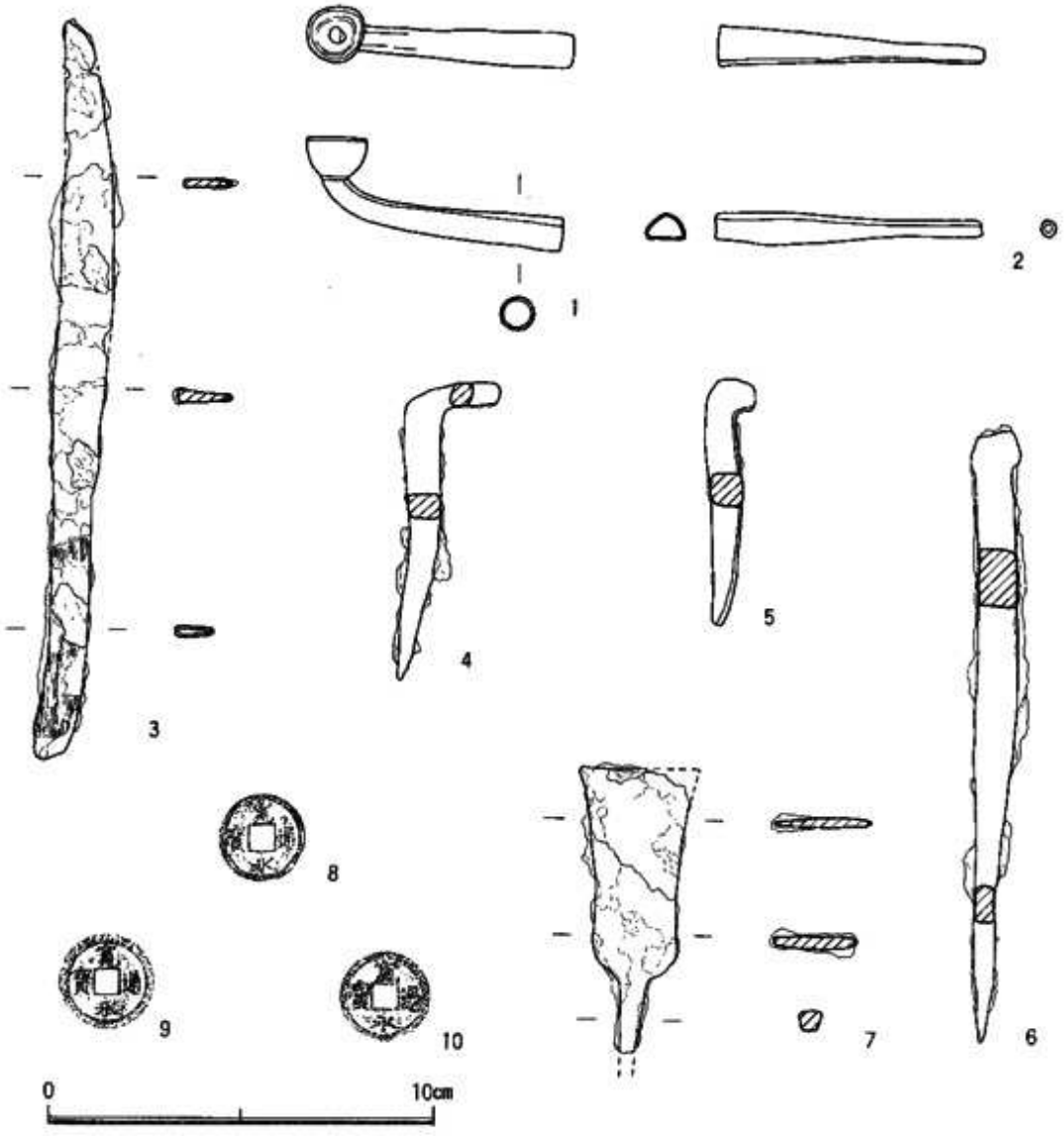
下層である黒色粘土（第3図1層・第4図4層），黒褐色粘土（第3図6層）からは須恵器，土師器，瓦，木製品，石器などが出土している。須恵器の時期を見ると，6世紀後半～9世紀前半にかけてものが混在しており，8世紀中葉～後半のものが多かった。また，瓦では出雲国分寺創建時



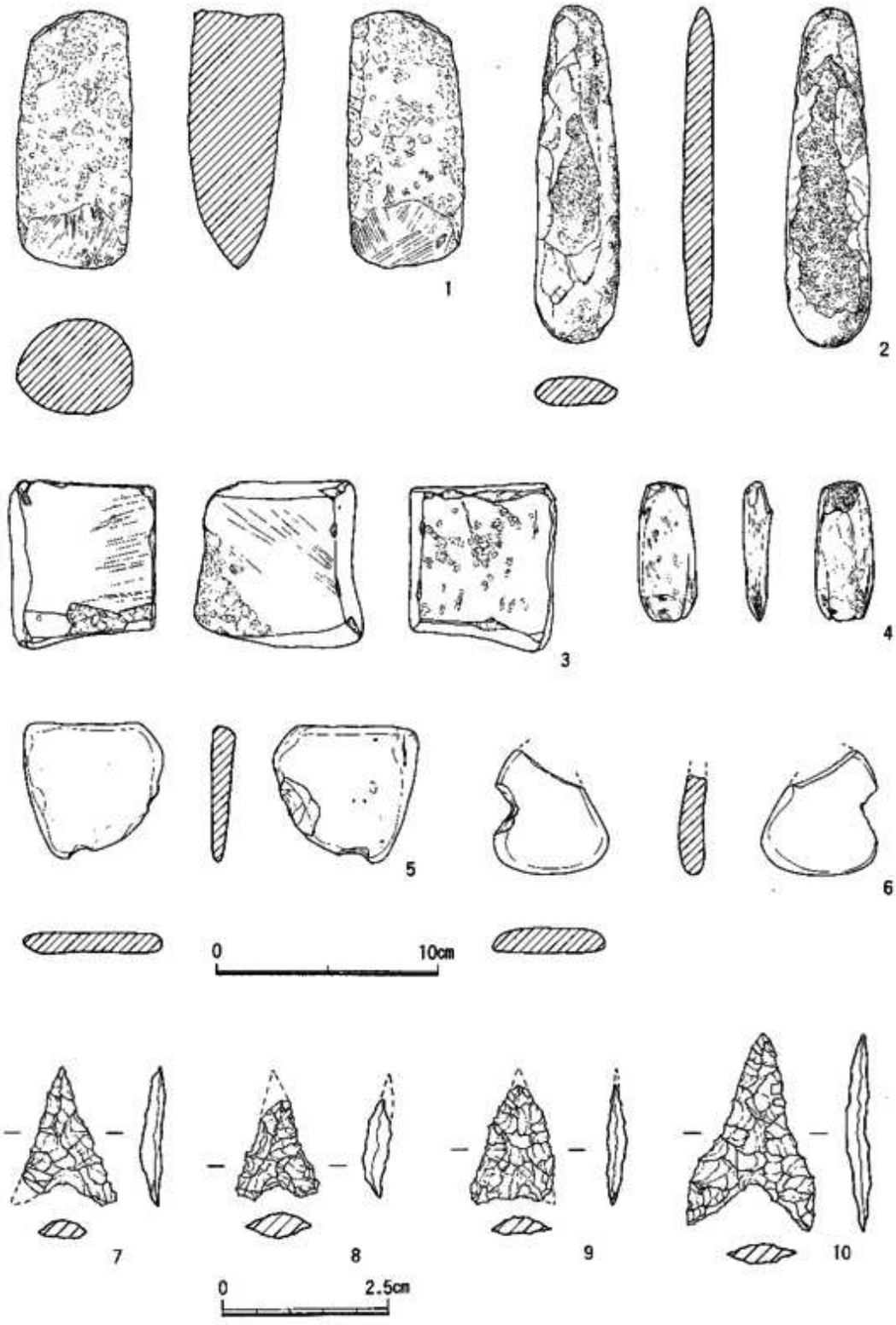
第15図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土木製品実測図

のものとされる軒平瓦（第10図３）と，出雲国分尼寺の第４類とされる軒平瓦（第10図１）が出土している。[5]

３は出雲国分寺・国分尼寺創建時の瓦とされていることから，８世紀中頃～末のものと考えられる。１は出雲国分尼寺分類第４類の軒平瓦であり，[6] この軒平瓦の年代についてはこれまで明確な答えを得ていない。しかし，今回出土した細かい格子状叩きを施す３については，供伴する須恵器の時期と出雲国分尼寺創建の年代から考えて，８世紀中頃～９世紀前半の間に置くことができるのではないかと考えられる。



第16図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土遺物実測図



第17図　第Ⅰ・Ⅱ調査区出土石器実測図

先述の調査区概要でも述べた通り，第Ⅰ，第Ⅱ調査区はもとは沼地または池であったと考えられることから，奈良時代中頃～平安時代初めにかけて堆積していった下層に，投棄などの行為により遺物が混入していった様子が窺える。

註

（1） 山本　清 「出雲」『新修国分寺の研究』第四巻　1991年
（2） 註1に同じ
（3） 財団法人 古都大宰府を守る会 『大宰府条坊跡Ⅱ・Ⅲ』 1983・84年
（4） 上田秀夫 「14～16世紀の青磁椀の文様」『貿易陶磁研究第2号』 日本貿易陶磁研究会　1982年
（5） 註1に同じ
（6） 註1に同じ

3．第Ⅲ調査区

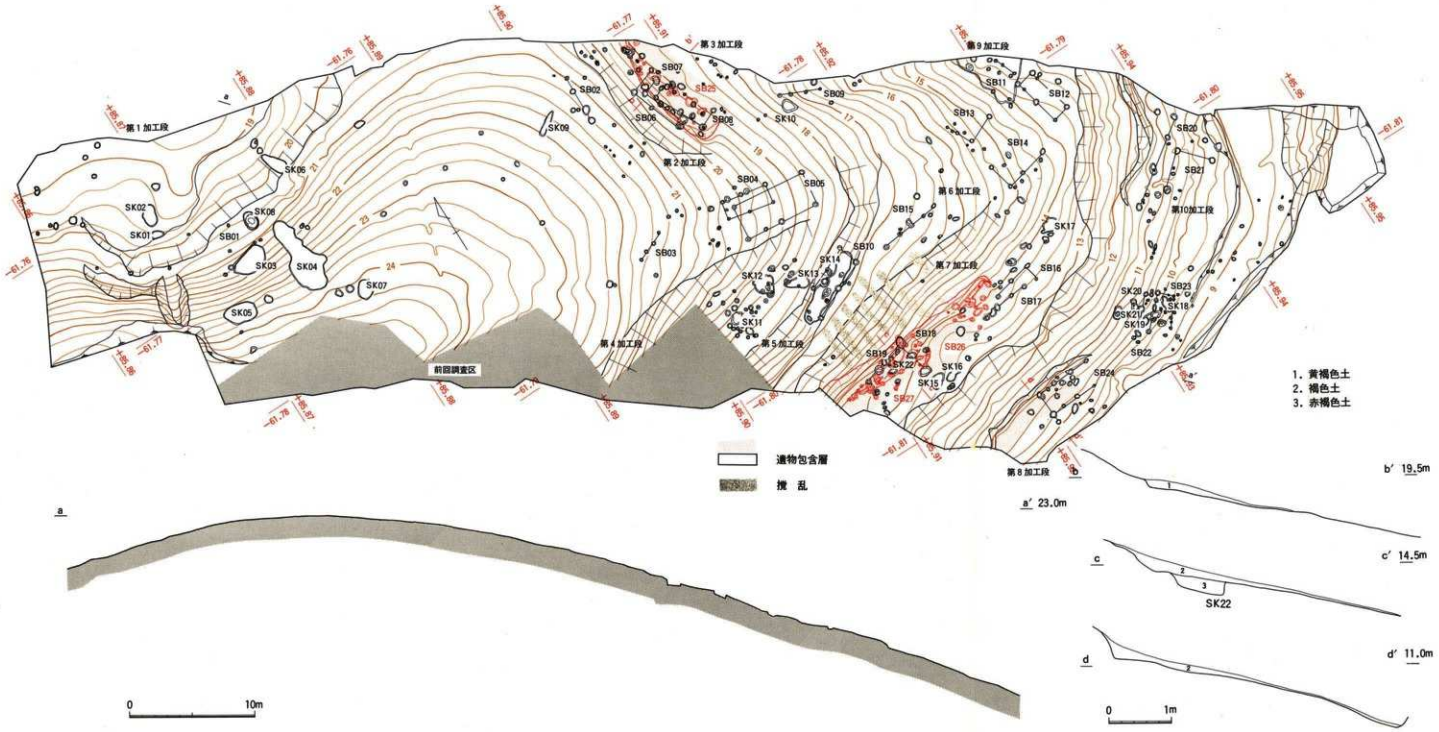
第Ⅲ調査区は第Ⅱ調査区から西へ続く丘陵部に位置する。第Ⅱ調査区の丘陵頂上部の比高差は約20mである。丘陵頂上部は比較的なだらかで，調査区東側と西北側に傾斜している。丘陵南部分は前回調査区に接し，現在は松江道路建設に伴って開削されている。

第Ⅲ調査区の土層は，地山面上に褐色土層が堆積しており，この層から土師器・須恵器などの遺物が出土した。また，丘陵西北側斜面と東側斜面において，第1加工段～第10加工段までの，10の加工段を検出し，加工段は丘陵西北側斜面のものを第1加工段とし，順次東へ番号を与えた。これらの加工段から，柱穴494，土壙22，性格不明の落ち込み1など多くの遺構を検出し（第18図），特に第3加工段と第7加工段では遺構面が重複していた。また，検出した多数の柱穴から，SB01～SB27の27棟の掘立柱建物を復元することができた。しかし，これらの建物跡の多くは，谷側にあたる部分が消失しており，建物の全容が窺えるものは僅かしかなかった。

1．土壙（第19，21，22，23，25，26図）

第Ⅲ調査区から検出された22の土壙は，平面形が楕円形・円形・方形・長方形などを呈しており，規格性は認められなかった。土壙の規模は，最大で655×290cm，最小で99×35cmであるが，長軸100～150cm，短軸50～100cmのものが中心となっている。深さは，最大87.5cm，最小7.5cmを測るが，20cm前後の比較的浅いものが多い（第1表）。

第1加工段北部に位置するSK01，SK02には，焼土の混入した赤褐色土が堆積していた。また，この付近からも焼土が検出されており，土壙及びその周辺で火が焚かれていた様子が窺える。本調査区からは竈片や土製支脚などが多く出土しており，炉として使われていた可能性も考えられる。ただ，SK01，SK02が位置する平坦面において建物跡を復元はすることはできなかった。SK06は第1加工段の北東部分に位置する浅い土壙である。他の土壙と異なり，赤褐色土が堆積していたが，遺物は出土しなかった。



第18図 第Ⅲ調査区遺構配置図

第１加工段南部の斜面上に位置するSK04，SK05，SK07，SK08には，黄褐色土が，SK04の西側に隣接するSK03には，黒色土及び炭化物の混入した褐色土がそれぞれ堆積していた。SK03の黒色土層からは，８世紀代の須恵器・土師器などの遺物が比較的まとまったかたちで出土した。また，SK07の黄褐色土層からも，８世紀代のものと思われる須恵器の坏片が出土している。これらの土壙は，いずれも斜面に位置するため，１～３ｍの比高差をもつ。

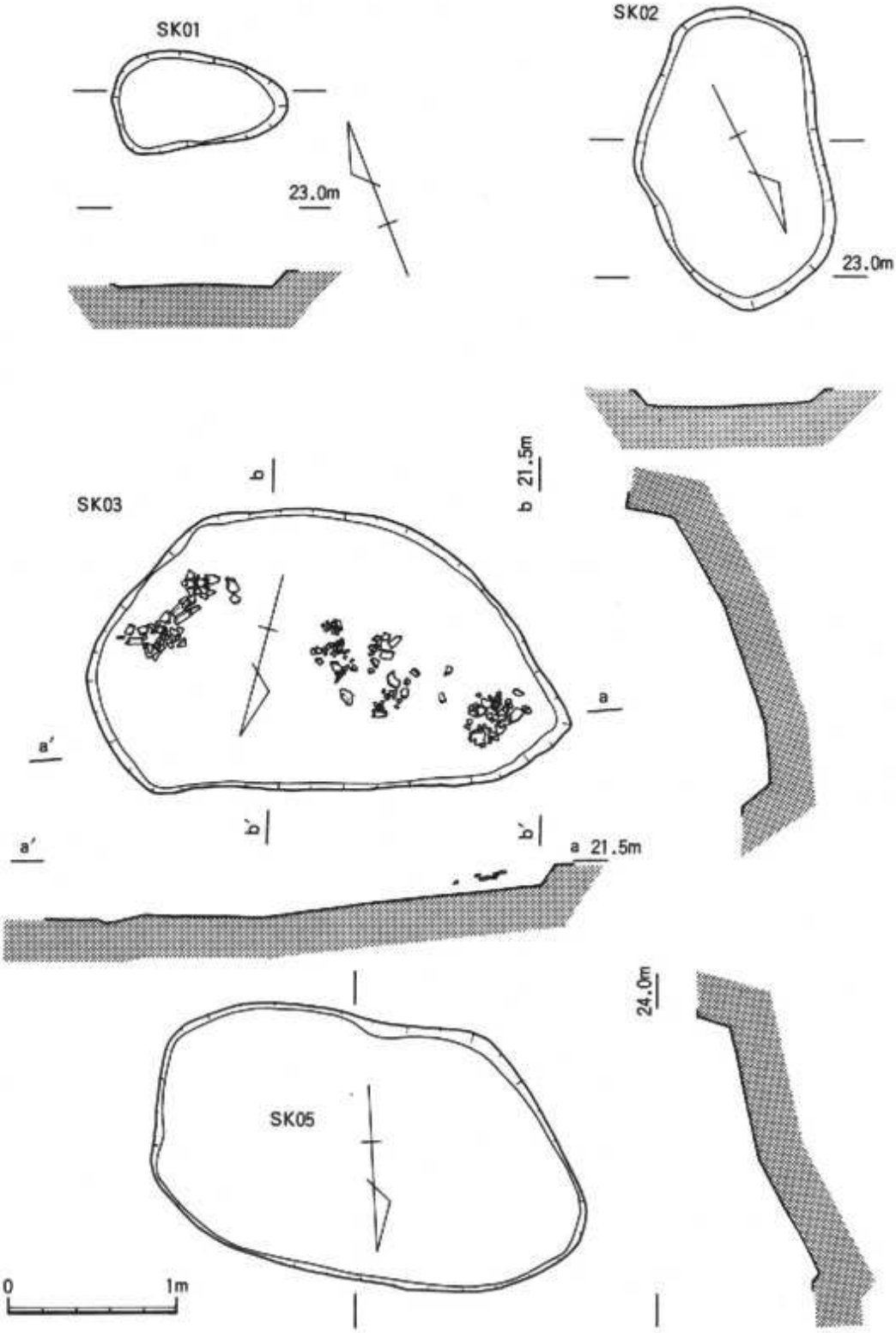
第２加工段中央付近に位置するSK09には黄褐色土層が堆積していたが，遺物は出土しなかった。また，第３加工段東のSK10に堆積していた黄褐色土層からは，７世紀末から８世紀前葉のものと思われる須恵器坏と竈片が出土した。SK10は，深さ87.5cmを測り，本調査区で最も深い土壙である。第３加工段には，建物跡が集中しており，上層の遺構面からSB06～SB09の４棟，下層の遺構面からSB25の１棟，合計５棟の建物跡が検出された。このうち，SB09は，SK10のすぐ北側に位置し，他の建物跡も近接している。SK10は，これらの建物群に関連した施設であったものと思われる。

第４加工段に位置するSK11には，赤褐色土の混入した褐色土が，SK12には炭化物の混入した褐色土が堆積していた。SK12からは土壙に伴うと思われる柱穴４個が検出され，このうちP_1からは土師器の甕が出土した。SK13にも褐色土が堆積しており，多数の拳大程の自然石が出土した。

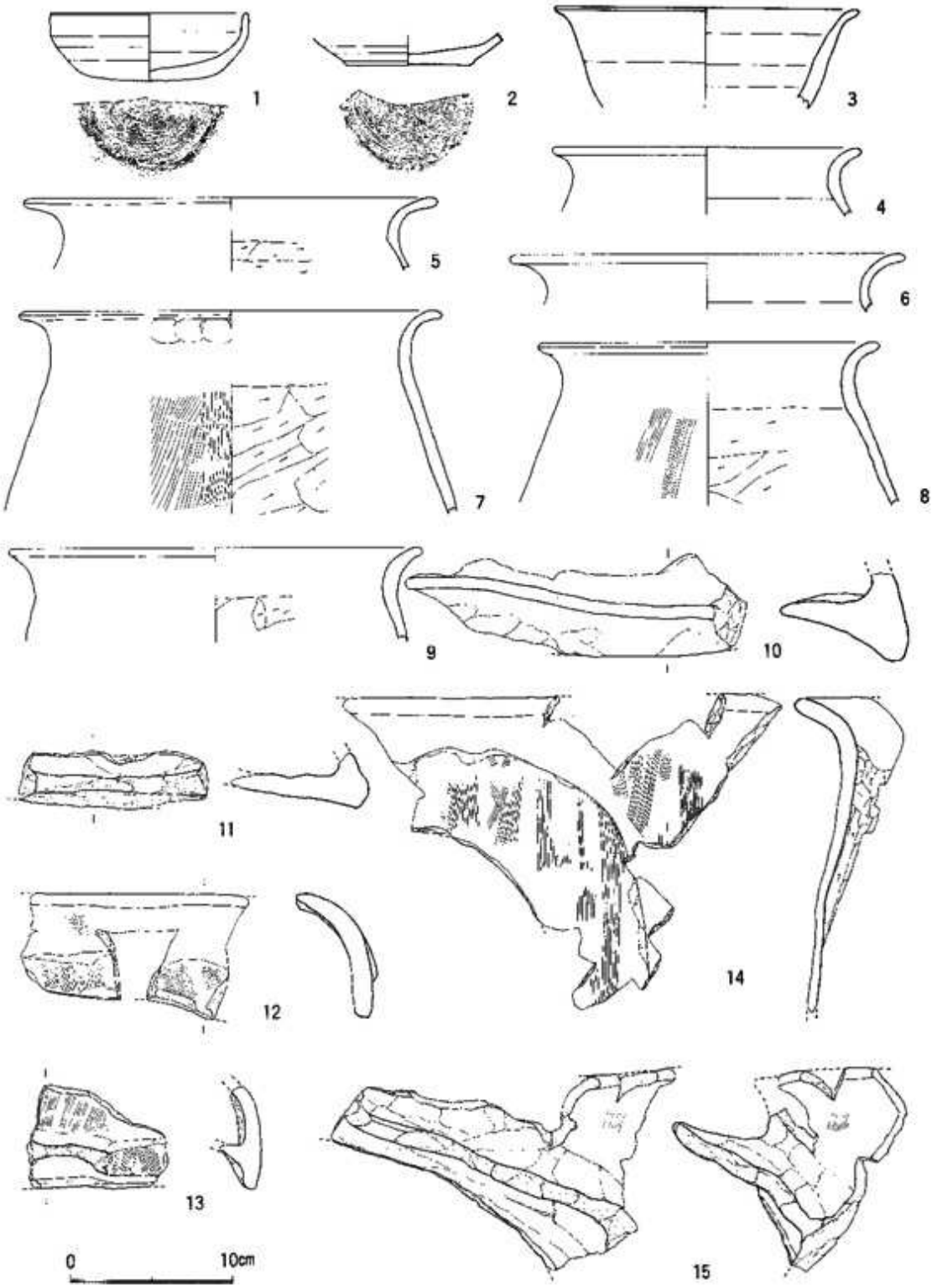
第５加工段に位置するSK14は，長軸と短軸の比がほぼ４対１の細長い不整楕円形を呈する。斜面に位置するために，東西で50cmの比高差がある。土壙内の堆積土は上層から褐色土層，灰褐色土層，赤褐色土層で，土壙内のピットには，赤色ブロック及び炭化物が混入した褐色土が堆積してい

第１表　第Ⅲ調査区土壙一覧表

土壙番号	加工段	平面形	長軸	短軸	深さ	挿図番号	時期
ＳＫ０１	第１加工段	不整楕円形	105	60	7.5	１９	
ＳＫ０２	第１加工段	不整楕円形	180	113	8	１９	
ＳＫ０３	第１加工段	不整楕円形	295	170	20	１９	８世紀中葉～後半
ＳＫ０４	第１加工段	不整楕円形	655	290	10	２１	
ＳＫ０５	第１加工段	不整方形	270	155	20	１９	
ＳＫ０６	第１加工段	不整楕円形	225	110	11	２２	
ＳＫ０７	第１加工段	不整円形	160	125	9	２２	８世紀中頃
ＳＫ０８	第１加工段	楕円形	155	110	50	２２	
ＳＫ０９	第２加工段	不整長方形	220	50	21	２２	
ＳＫ１０	第３加工段	不整方形	135	95	87.5	２３	７世紀末～８世紀前葉
ＳＫ１１	第４加工段	不整長方形	115	70	19	２３	
ＳＫ１２	第４加工段	不整方形	180	150	18	２３	
ＳＫ１３	第４加工段	不整楕円形	205	100	17.5	２３	
ＳＫ１４	第５加工段	不整楕円形	655	150	21.5	２５	８世紀中葉～後半
ＳＫ１５	第７加工段	不整方形	130	95	38	２５	
ＳＫ１６	第１０加工段	不整長方形	126	40	13	２５	
ＳＫ１７	第１０加工段	不整円形	129	115	27.5	２５	
ＳＫ１８	第１０加工段	不整長方形	136	65	20	２６	
ＳＫ１９	第１０加工段	不整長方形	194	47	41.5	２６	
ＳＫ２０	第１０加工段	不整楕円形	99	35	33.5	２６	
ＳＫ２１	第１０加工段	不整楕円形	111	68	61.5	２６	
ＳＫ２２	第７加工段	不整方形	151	79	19.5	２６	



第19図　第Ⅲ調査区土壙実測図



第20図　第Ⅲ調査区SK03出土遺物実測図

た。土壙内の赤褐色土層からは，８世紀中葉～後半のものと思われる須恵器坏や土師器の甕，大鉢，土錘，土製支脚などの遺物が出土した。このSK14全体を囲むように，SB10が検出されたことから，この土壙は建物の内部に掘られていた可能性も考えられる。

第７加工段東南部に位置するSK15には，上層から炭化物の混入した褐色土，赤褐色土が堆積し，SK15に隣接するSK16の堆積土は上層から，炭化物の混入した灰色土，焼土を含んだ赤褐色土である。これらの土壙内から遺物は出土しなかった。

また，第７加工段からは，遺構面が２面にわたって検出されており，下層の遺構面から，SK22が検出された。覆土は炭化物を含んだ褐色土とその下層に赤褐色土が堆積していた。この他，遺構としては，上層面からSB16～SB19，下層面からSB26，SB27の６棟の建物跡が確認されており，第３加工段と同じく掘立柱建物の集中していた地域である。

第10加工段南部に位置するSK18～SK20には，褐色土が堆積していた。このうち，SK19の褐色土層からは，８世紀末ごろのものと思われる須恵器の坏が出土した。また，SK20の西側に位置するSK21には，炭化物の混入した赤褐色土が堆積していた。上記の土壙のうちSK18は，位置関係からみてSB23に関連した土壙である可能性も考えられる。

土壙の出土遺物（第20，24図，図版34～35）

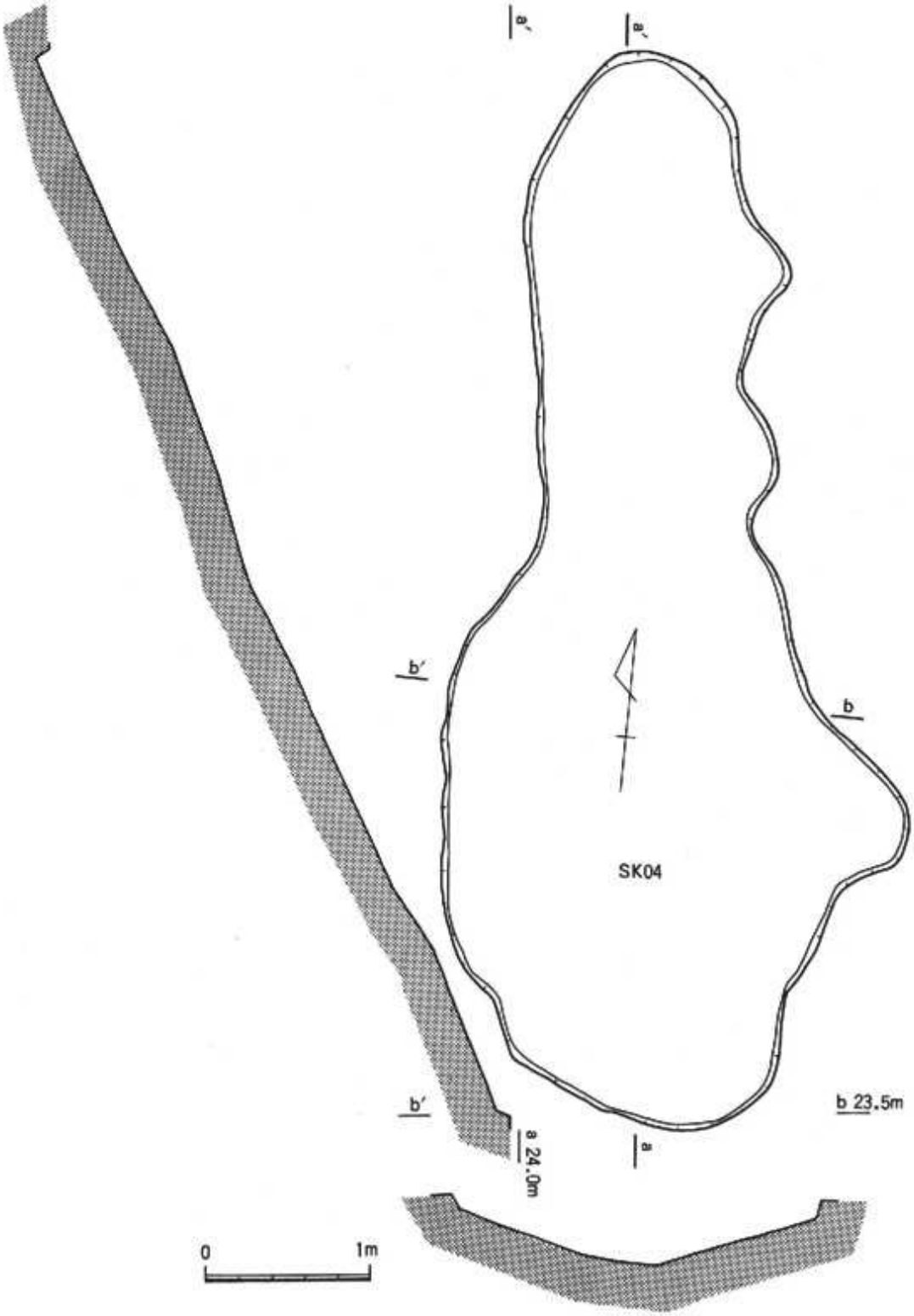
SK03出土遺物（第20図）　SK03からは，原位置のまま土圧で潰れた状態の須恵器の坏や，土師器の竈，甕片などが出土した。各個体は比較的まとまった状態で出土しているが，完形品は全く認められず，最初から破損した状態で置かれていたと考えざるを得ない。[1]

１～３は須恵器の坏である。１，２は高台の付かないもので，坏体部が内湾気味に立ち上がり，１は口径12.3cmを測る。いずれも底部に回転糸切り痕が残り，２の底部外面にはヘラ記号が認められる。３は口径が18.8cmを測る大形品で，体部がわずかに内湾してのびたあと，口縁端部が外へ開く。形態の特徴から，底部に高台の付くものと思われる。

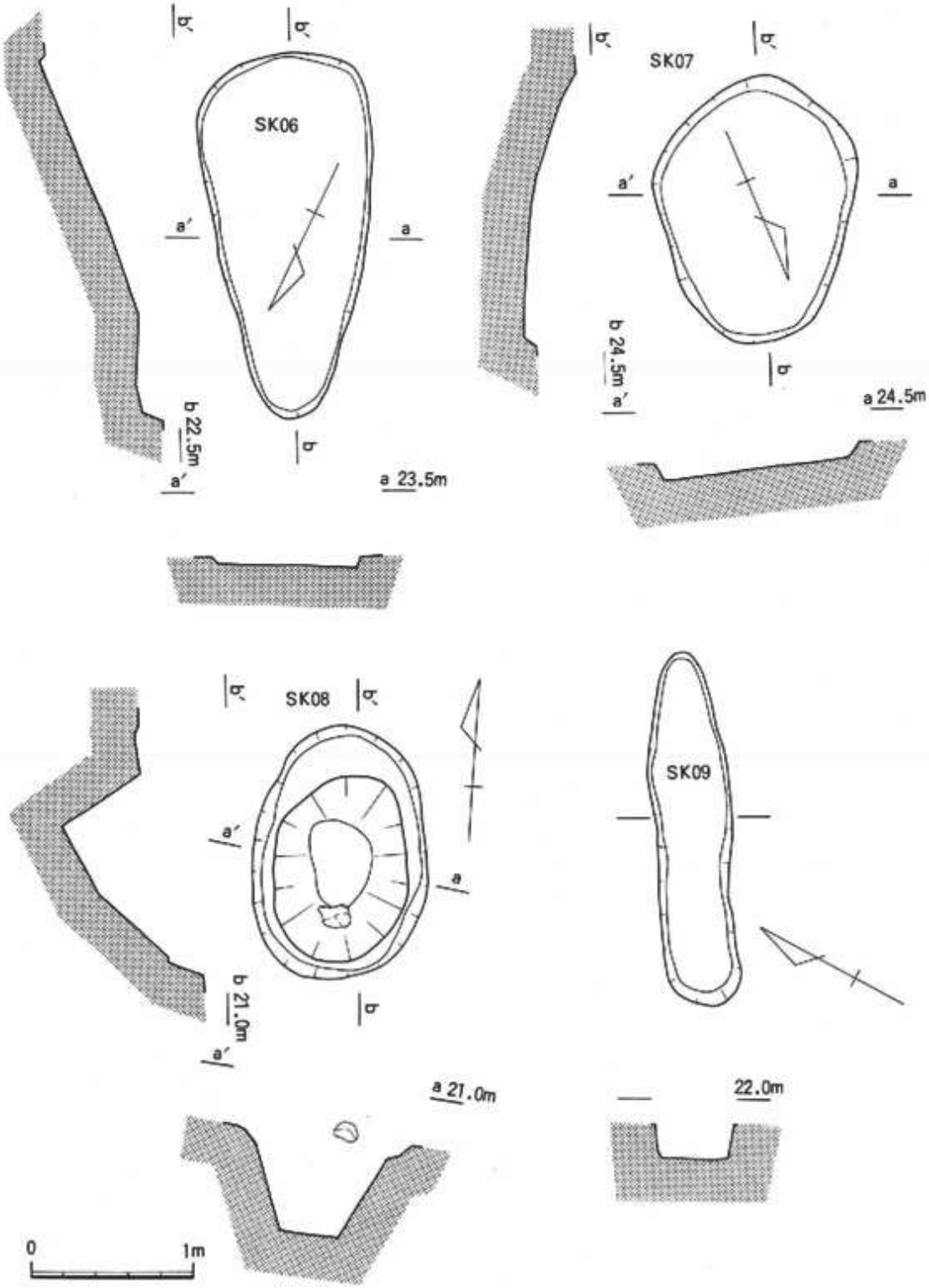
４～９は土師器の甕で，いずれも口縁部が「く」の字状に外反し，口径は19.3～25.6cmを測る。４，６以外は頸部以下に横あるいは斜め方向のヘラ削りを施しており，５は胴部の器壁が非常に薄く，厚さ４mm程度に仕上げる。７，８は口縁外面に指頭によるナデ調整，胴部には幅の広いハケ目調整を施す。10～15は竈である。12，14，15は掛口部から炊口上部にかけて残存しており，掛口は短く外反する。

12，14は庇が欠損しており，外面の庇接合部分にはハケ目が残る。15は掛口高が庇高を上回るもので，他の竈片も同様の形態を示すと思われる。15の庇幅は5.8cmを測り，外面にナデ及びハケ目調整が残る。

10，11，13は庇の一部で，最も厚いところで10は２cm，11は1.6cm，13は0.6cmをそれぞれ測る。



第21図　第Ⅲ調査区土壙実測図



第22図　第Ⅲ調査区土壙実測図

ナデ，ハケ目調整が認められる。

竈は掛口部だけでも３個体以上出土しており，庇部の別の破片も入れると６個体以上の竈があったものと思われる。ただ，SK03周辺に焼土などの火を使用した形跡はなく，竈にもあまり煤が付着していないことから，土壙が日常の炊飯に使われていたとは考え難く，むしろ祭祀的用途に用いられた可能性が高い。

SK03は，出土須恵器が出雲国庁編年第４形式であることから，およそ８世紀中葉～後半頃のものと思われる。

SK07出土遺物（第24図１）　１は須恵器の高台付き坏底部である。底部外面はナデ調整が施されており，高台部は「ハ」の字状に大きく開く。時期は小片のため断定できないが，外面底部の調整や高台部の形態から出雲国庁編年第４形式よりも若干古いものと思われ，SK07の時期も概ねそのころであろう。

SK10出土遺物（第24図２，10）　SK10の出土遺物はいずれも土壙の上端より10～30cmの深さで出土している。上端から下端までの深さは60cm以上あるため，流れ込みの遺物である可能性も考えられる。２は須恵器の高台付き坏で，体部は内湾気味に立ち上がるものと思われる。底部外面は静止糸切りの後ナデ調整を施す。

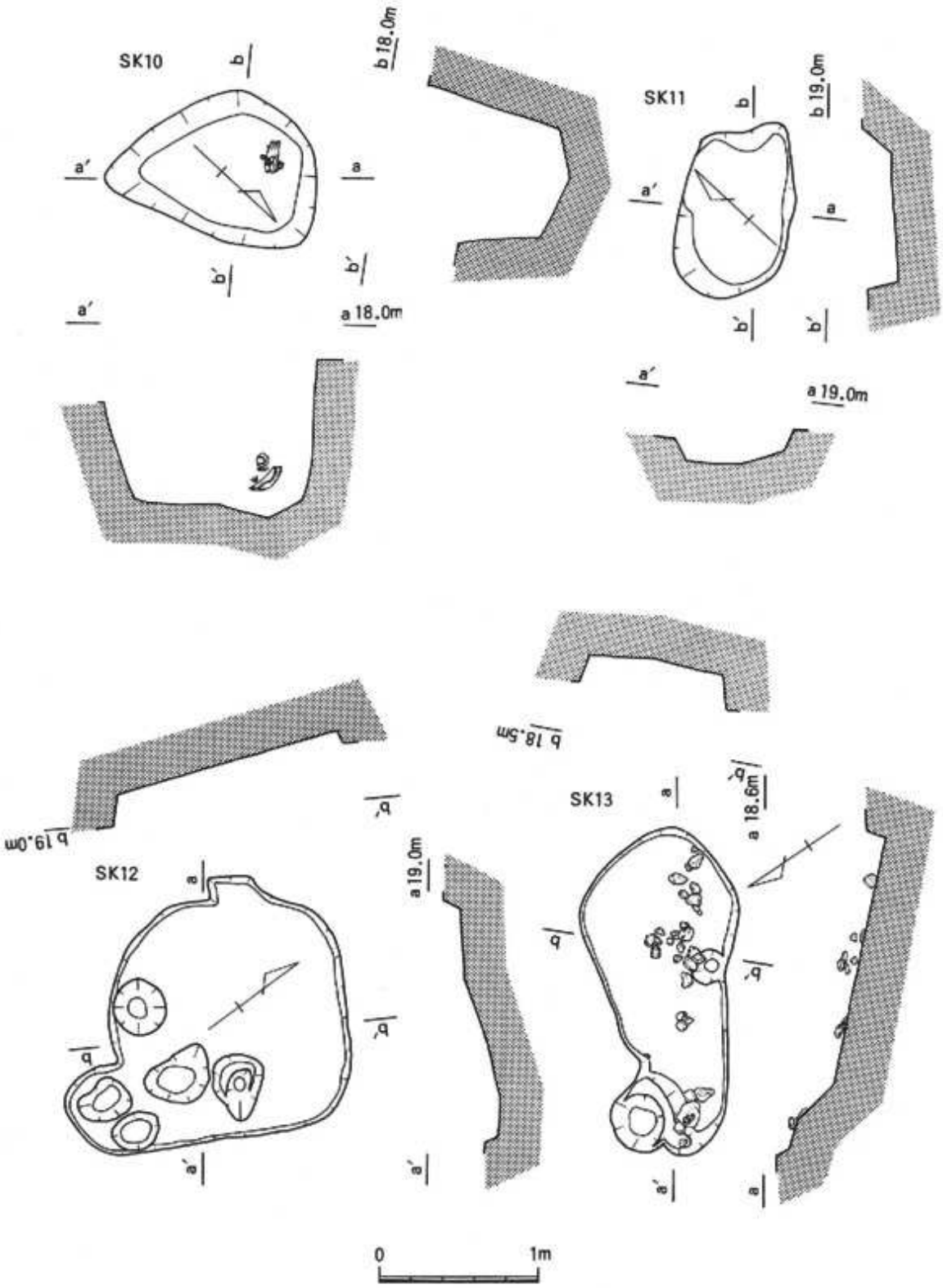
10は土師器の竈で，掛口部から炊口上部にかけて残存しする。掛口はゆるやかに外反し，「く」の字状を呈する。掛口部の推定径は34.2cmを測り，炊口には庇の接合痕が残る。内面はヘラ削り及び指頭によるナデ調整を施している。

２は出雲国庁編年第３形式であり，７世紀末から８世紀前葉頃のものと思われる。10もほぼ同時期のものであろう。

SK12出土遺物（第24図11）　11は土壙内のP_1から出土した土師器の甕で，口縁部が「く」の字状に外反する。口径は19.6cmを測り，口縁部内・外面はヨコナデ，内面頸部以下にはヘラ削りを施す。11の土師器甕の形態から明確な時期は判断できず，概ね７世紀末～８世紀後半という幅が考えられる。

SK14出土遺物（第24図３，５～９，12，13）　３は須恵器の皿で，体部が外反気味に立ち上がるものである。外面には回転ヘラ削りを施し，底部には回転糸切り痕を残す。焼成はやや不良で，色調は暗灰色を呈する。

12は土師器の甕口縁で，口縁部が「く」の字状に大きく外反し，体部は余り張らない。復元口径30.2cmを測る大形品，全体的に摩滅している。14は土師器の大鉢で，底部付近から体部が直線的に立ち上り口縁端部に至る。復元口径は54cmを測り，外面にナデ及びハケ目，内面にナデ及びヘラ削り調整を施す。９は，甑あるいは竈の把手で，把手長４cm，断面形3.3cmを測る。指頭によるナデ調整を施す。５～８は砲弾形の土錘で，いずれも全長5.7～6.9cm，幅1.7～2.2cmを測る大形品であ

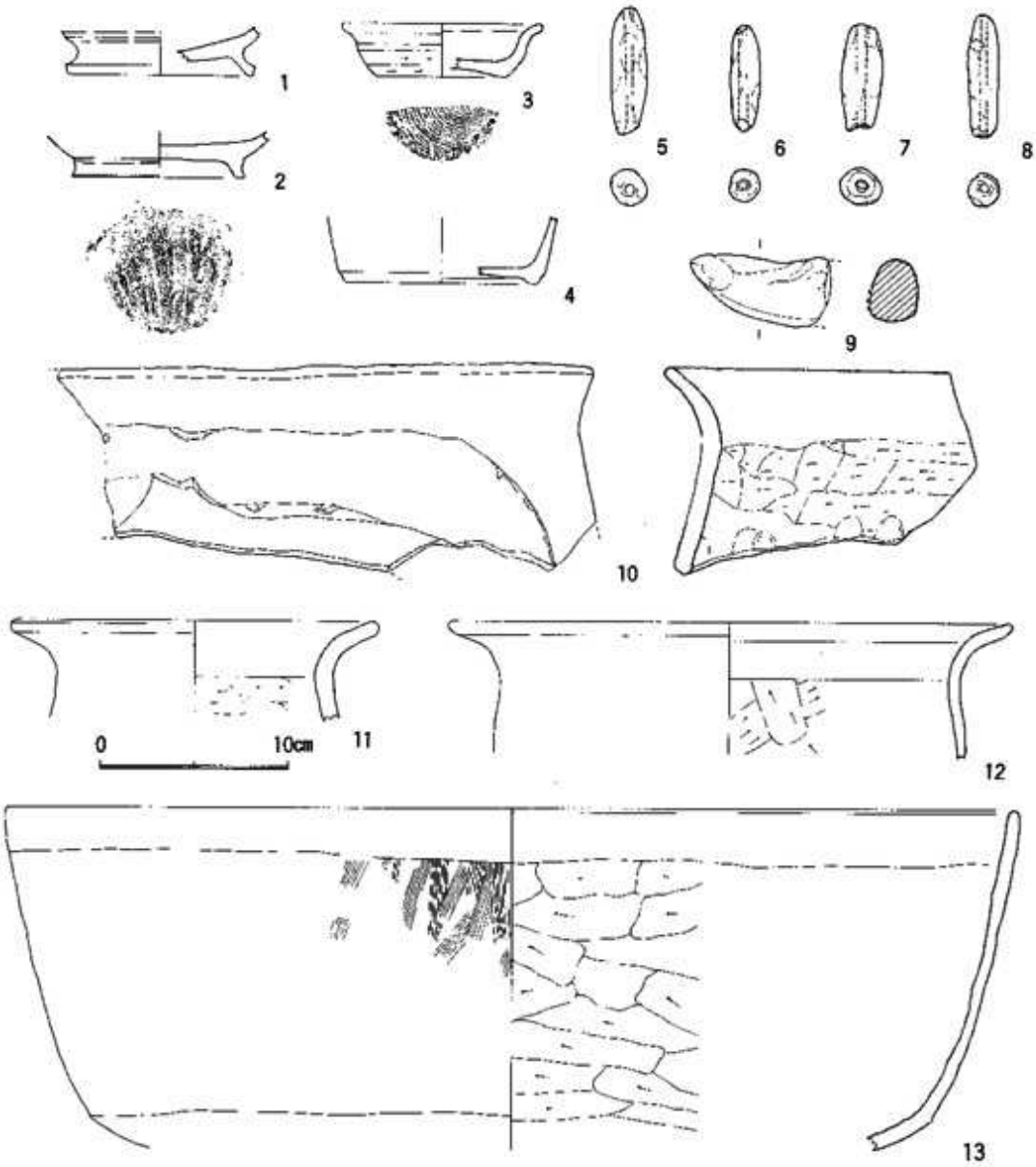


第23図　第Ⅲ調査区土壙実測図

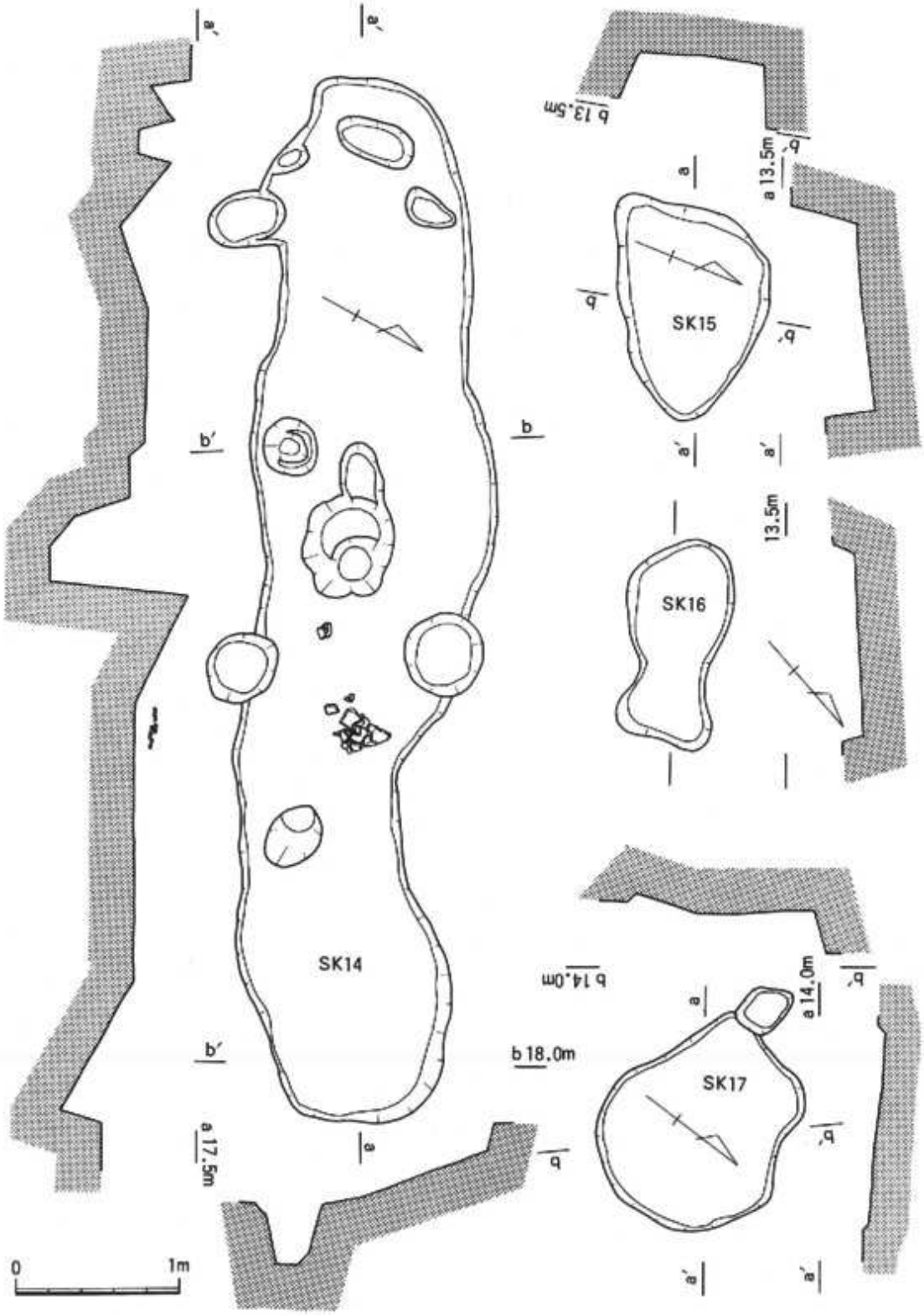
る。表面にはナデ調整を施し，棒状の工具で穿孔したものと思われる。

3の須恵器皿は，出雲国庁編年第4形式の須恵器に類似する形態・手法の皿がみられることから，概ね8世紀中葉～後半のものと思われる。3と供伴する土師器と土錘もこの時期のものと思われる。

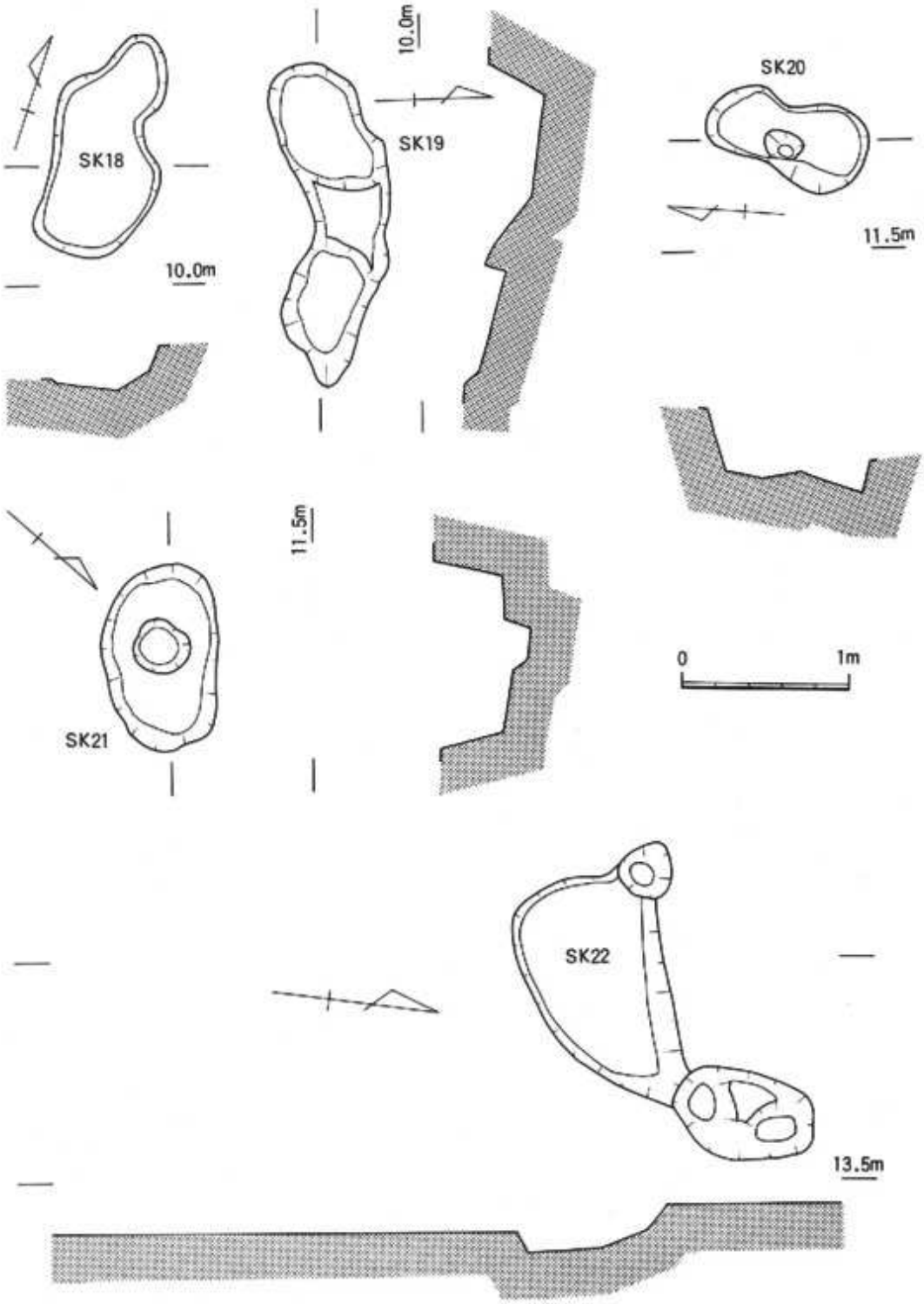
SK19出土遺物（第24図4） 4は底径が10.6cmを測る須恵器の坏で，高さ6mm程の高台が付く。体部は直線的に立ち上がり，底部外面には回転ナデを施す。時期的には，出雲国庁編年第4～5形式の範疇に入ると思われるが，上部が欠損するため明確な判断はしがたい。



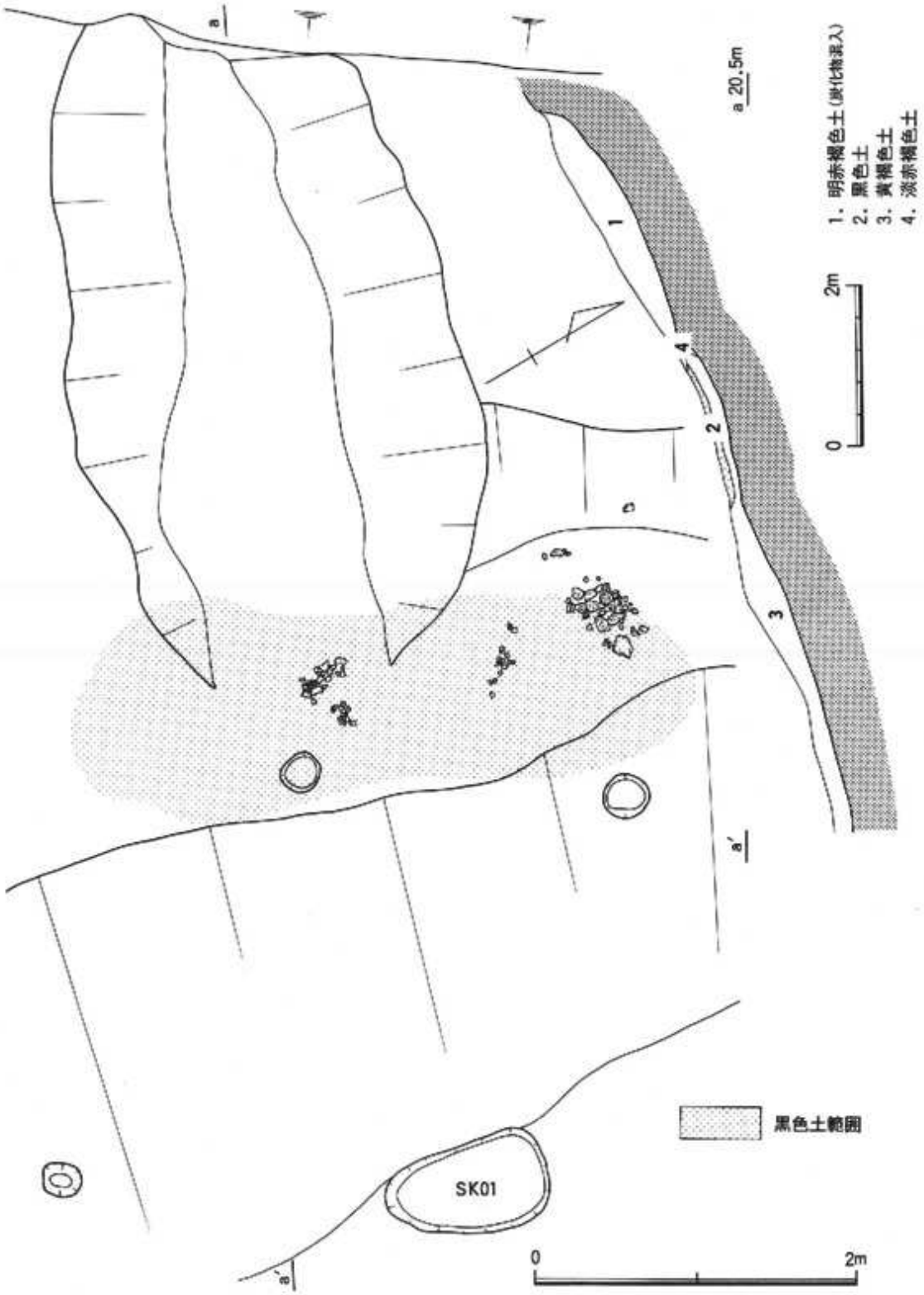
第24図　第Ⅲ調査区SK07・SK10・SK14・SK19出土遺物実測図



第25図　第Ⅲ調査区土壙実測図



第26図　第Ⅲ調査区土壙実測図



第27図　第Ⅲ調査区SX01・土器溜り実測図

時期が判明した上記の土壙はおよそ７世紀末～８世紀後半の間に穿たれたものと考えられ，その他の土壙も埋土などの状態がこれらとあまり変わらないため，ほぼ同時期と考えて良いのではないだろうか。

２．SX01（第27図）

第Ⅲ調査区の西端に近い第１加工段の南側に位置し，標高21～23mの北西斜面に穿たれている。当初，第１加工段へと続く斜面中程に，人為的な手が加えられたと思われる幅１mばかりの平坦面が認められ，そこに遺物を含む黒色土が堆積していたことから，すぐ上部に位置するSX01は横穴墓ではないかと考えた。

そこでSX01上端から第１加工段へ続くライン（第27図ａ－ａ'）にセクションベルトを設定し，遺構を掘り下げた。その結果，SX01の覆土である明黄褐色土が第１加工段の覆土黄褐色土とその上面に堆積した黒色土を掘り込んでおり，第１加工段が埋没した後に穿っていることが判明した。SX01完掘後の規模は，東西幅２～2.4m，南北長４ｍを測り，南側はさらに調査区外へと続く。横断面は深さ0.4～0.6mを測るＵ字形を呈し，出土遺物は全くない。このため，何を目的として掘られたものなのかは不明である。

SX01下端の平坦面に堆積していた黒色土は，東西５ｍ，南北１～1.4mの範囲で広がっており，土層の厚さは0.2mを測る。下面の黄褐色土に近い位置からは，上圧でつぶれた状態の土師器の甕や，須恵器の坏，大甕の破片などが出土している。この出土状況から判断して，流れ込みの遺物ではなく，祭祀などの目的で意図的にこの場に置かれたものではないかと推察される。

SX01出土遺物（第28図，図版36）

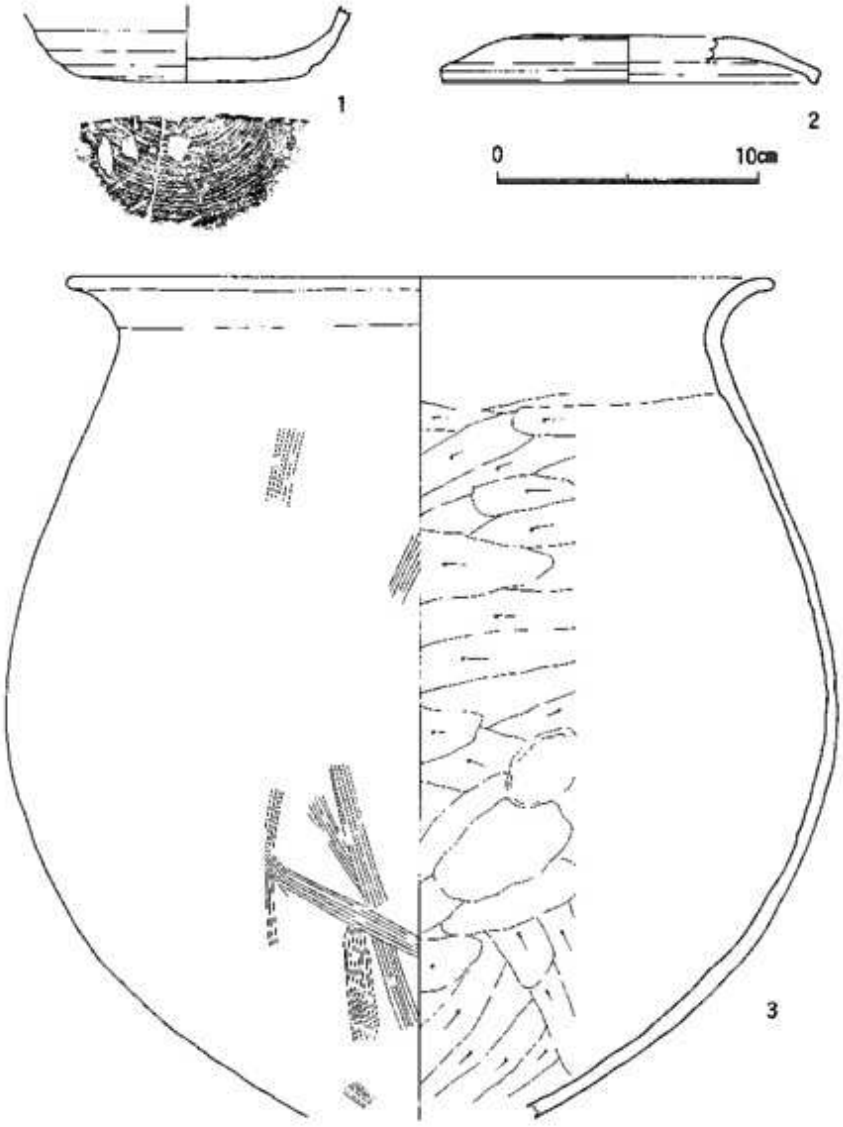
１　**須恵器**　須恵器は図示した第28図１，２の他に，外面に広い平行叩きを施し，内面の同心円叩きをほとんどナデ消す大甕の破片が出土している。１は体部が内湾気味に立ち上がる坏で，底部に回転糸切り痕を残す。２はつまみが欠損した坏蓋で，天井外面の周辺にヘラ削りを施し，口縁端部に丸味を持つ。

２　**土師器**　土師器は第28図３の他，甕口縁や竈庇部の細片などが出土した。３は口縁が「く」の字状に外反し，胴部は倒卵状を呈する。底部は丸底になるものと思われる。内面の頸部以下はヘラ削りを施し，器壁を薄くつくりだす。口縁部内外面にヨコナデ，外面胴部には荒いナデを施す。須恵器は出雲国庁編年第４形式のものである。

第27図土層図ａ－ａ'で確認されるとおり，黒色土層は第１加工段の埋土である明黄褐色土上に堆積しており，黒色土層の出土遺物と第１加工段からの出土遺物の時期にあまり差が認められない

ことから，両者はあまり時間を置かずに堆積したものと考えられる。このため，第1加工段は人為的に埋められたと考えるのが妥当と思われ，造成後あまり時期を置かずに，明黄褐色土層上面で祭祀的行為が行われものと推察される。

明黄褐色土層上面から遺構は全く検出されておらず，住居建設などを目的とした造成ではなかったと思われる。



第28図　第Ⅲ調査区SX01出土遺物実測図

3．掘立柱建物跡

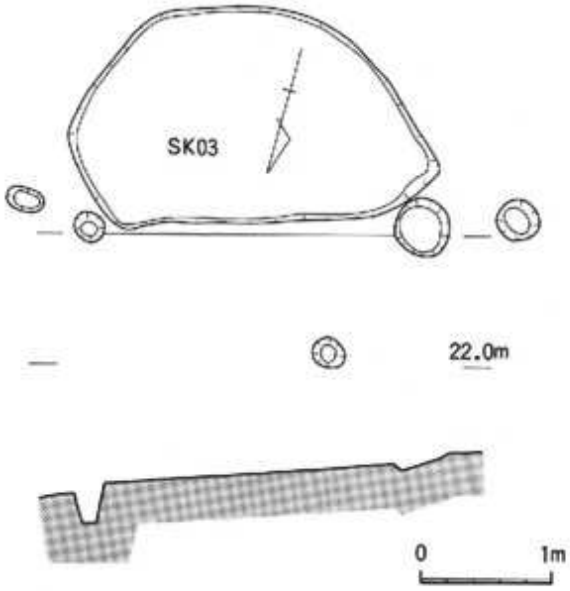
第Ⅲ調査区からは，27棟の掘立柱建物跡を検出したが，建物の規模がわかるものは少なく，SB04，SB05，SB12の3棟のみであった。また，建物跡は，丘陵東斜面に集中し，西北側斜面で検出したのはSB01の1棟のみであった。建物の主軸方位は，ほぼ斜面と平行であり，基本的には自然地形を利用して，建物が作られていると思われる。東斜面東部の第7，8，10加工段にある建物跡は，斜面下側にあたる東部分が欠落しているものがほとんどであった。掘立柱建物跡の遺構には，基本的に東から番号を与えたが，第3加工段のSB25，第7加工段のSB26，SB27は，いずれも2面あった遺構面の下層で検出したため，例外となっている。

(1) 第１加工段

標高19～20ｍの北西斜面を東西約22ｍの幅で平坦に加工しており，SK03の覆い屋と考えられる掘立柱建物跡SB01を復元することができた。

SB01（第29図）

第１加工段中央付近で検出した。８世紀代の遺物が出土した土壙SK03に隣接し，P_1からP_2の２個の柱穴を確認した。柱間寸法は，260cmを測る。建物の主軸方位は，N－72°－Eであると思われる。これらの柱穴から遺物は出土しなかったが，SK03の出土遺物の時期から考えると，この遺構も８世紀代のものと思われる。P_1は，平面形が不整円形で直径24cm，深さ30cmを測る。P_2は，平面形が不整円形で直径44cm，深さ６cmを測る。また，加工段のすぐ南側の斜面では東西幅250cm，南北の長さ420cm，深さ60cmの溝状遺構SX01を検出したが，遺構の性格は不明である。第１加工段とSX01の間の狭い平坦面からは，８世紀中葉～後半頃と思われる須恵器と土師器が出土した。



第29図　第Ⅲ調査区SB01実測図

第１加工段出土遺物（第33図１～７，図版36）　第１加工段では遺構に伴う遺物は出土しなかった。図示したものは全て遺物包含層である褐色土からの出土遺物である。

１，３～５は須恵器の坏で，高台の付かないものである。坏体部は内湾気味に立ち上がり，１，３は端部がわずかに外反する。底部外面は１が回転糸切り未調整，４，５が静止糸切り未調整である。２は高台の付かない皿で，体部は斜め上方へ短く立ち上がる。口径15cm，器高1.5cmを測り，底部外面は回転糸切りである。

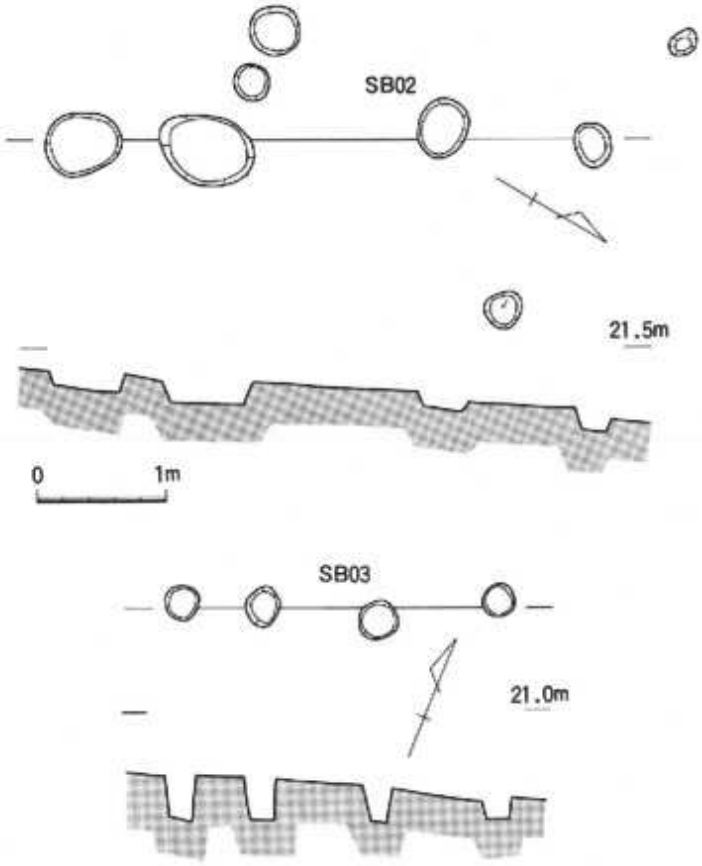
６は土師器の鉢で，体部が内湾気味に立ち上がり口縁部で緩やかに外反する。口径は28cmを測り，外面にハケ目，内面にヘラ削りを施す。７は甕で，口縁部が「く」の字状に外反し端部に丸味を有する。口縁部内・外面にヨコナデ，内面頸部以下にヘラ削りを施す。

須恵器の４，５は出雲国庁編年第３形式，１～３は出雲国庁編年第４形式であり，奈良時代のものと考えられる。また土師器６，７もこの時期のものであろう。

掘立柱建物跡SB01から遺物は出土していないが，SK03に伴う施設と考えられるため，８世紀中葉～後半のものと思われる。

(2) 第２加工段

標高19～22ｍのゆるやかな東側斜面であり，約11×21ｍの地域から，約53のピットが検出され，SB02～SB05の４棟の掘立柱建物跡が復元できた。SB02，03は，南北方向の柱列が残存しているのみであったが，SB04，05は，全体の規模が確認できた。遺物は褐色土層から少量の須恵器・土師器が出土した。



第30図　第Ⅲ調査区SB02，03実測図

SB02（第30図）

第２加工段東斜面北側に位置する。P_1からP_4の４個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2が100cm，P_2～P_3が180cm，P_3～P_4が120cmを測る。桁行残存長P_1～P_4は400cmで，主軸方位は，N－32°－Wである。柱穴については，P_1は平面形が不整楕円形で，長軸60cm，短軸48cm，深さ13cmを測る。P_2は平面形が不整楕円形で，長軸70cm，短軸53cm，深さ16cmを測る。P_3は平面形が不整円形で直径40cm，深さ10cmを測る。P_4は平面形が不整楕円形で長軸が34cm，短軸が28cm，深さ16cmを測る。

SB03（第30図）

第２加工段南部頂上近くに位置する。P_1からP_4の４個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2が60cm，P_2～P_3が88cm，P_3～P_4が92cmを測る。桁行残存長P_1～P_4は240cmである。P_1は平面形が円形で，直径27cm，深さ36cmを測る。P_2は平面形が不整円形で，直径29cm，深さ32cmを測る。P_3は平面形が円形で直径が29cm，深さ30cmを測る。P_4は平面形が円形で直径が25cm，深さ16cmを測る。主軸方位はN－68°－Eである。

SB04（第31図）

第２加工段東部に位置する。P_1からP_8の８個の柱穴を確認した。柱間寸法はP_1～P_2が200cm，P_2～P_3が176cm，P_3～P_4が144cm，P_4～P_5が50cm，P_5～P_6が108cm，P_6～P_7が52cm，P_7～P_8が164cm，

P_8～P_1が148cmを測る。このうち，直接建物と関わるものは，P_5，P_7を除く6個と思われる。南側桁行P_1～P_3が376cm，北側桁行P_4～P_8が374cm，東側梁間148cm，西側梁間144cmを測る桁行2間，梁間1間の比較的小さな掘立柱建物跡と考えられる。P_1は，平面形が円形で直径24cm，深さ10cmを測る。P_2は平面形が円形で直径24cm，深さ24cmを測る。P_3は，平面形が円形で直径24cm，深さ8cmを測る。P_4は平面形が円形で直径が24cm，深さ12cmを測る。P_5は，平面形が不整楕円形で長軸52cm，短軸40cm，深さ44cmを測る。P_6は平面形が不整円形で，直径36cm，深さ28cmを測る。P_7は，平面形が不整方形で長軸42cm，短軸38cm，深さ32cmを測る。P_8は平面形が円形で，直径36cm，深さ24cmを測る。主軸方位はN－77°－Wである。

SB05（第32図）

第2加工段東部に，SB04と重なる形で検出され，P_1からP_6まで6個の柱穴が確認された。柱間寸法はP_1～P_2は314cm，P_2～P_3は144cm，P_3～P_4は152cm，西側梁間P_4～P_5は280cm，北側桁行P_5～P_6は608cm，西側梁間P_6～P_1は276cmで，南側桁行P_1～P_4は640cmであった。SB04よりもやや規模の大きな桁行2間，梁間1間の掘立柱建物跡であると思われる。柱穴については，P_1は平面形が不整楕円形で長軸が50cm，短軸が36cm，深さ26cmを測り，P_2は，平面形が不整円形で，直径48cm，深さ22cmを測る。P_3は平面形が不整楕円形で長軸30cm，短軸24cm，深さ9cmを測る。P_4は平面形が不整円形で直径37cm，深さ23cmを測り，P_5は平面形が不整円形で直径34cm，深さ42cmを測る。P_6は，平面形が不整楕円形で，長軸が46cm，短軸が30cm，深さ28cmを測る。主軸方位は，N－84°－Wである。

第2加工段出土遺物（第33図8～10，図版36）　第2加工段では遺構に伴う遺物は出土しなかった。図示したものは全て表土層下の褐色土からの出土遺物である。8は須恵器の坏で，体部が内湾気味に立ち上がった後，端部がわずかに外反する。口径13.5cmを測り，内・外面に回転ナデを施す。9は天井部外面に宝珠状のつまみを付ける蓋で，口縁端部に丸味を持つ。天井部外面に回転ヘラ削りを施している。10は行基式の丸瓦で，凸面は縄目叩きの後ナデ調整，凹面には布目痕が残る。

須恵器8，9は出雲国庁編年第4形式であり，8世紀中葉～後半のものと思われる。瓦も出雲国分寺創建時の8世紀中葉以降のものであろう。

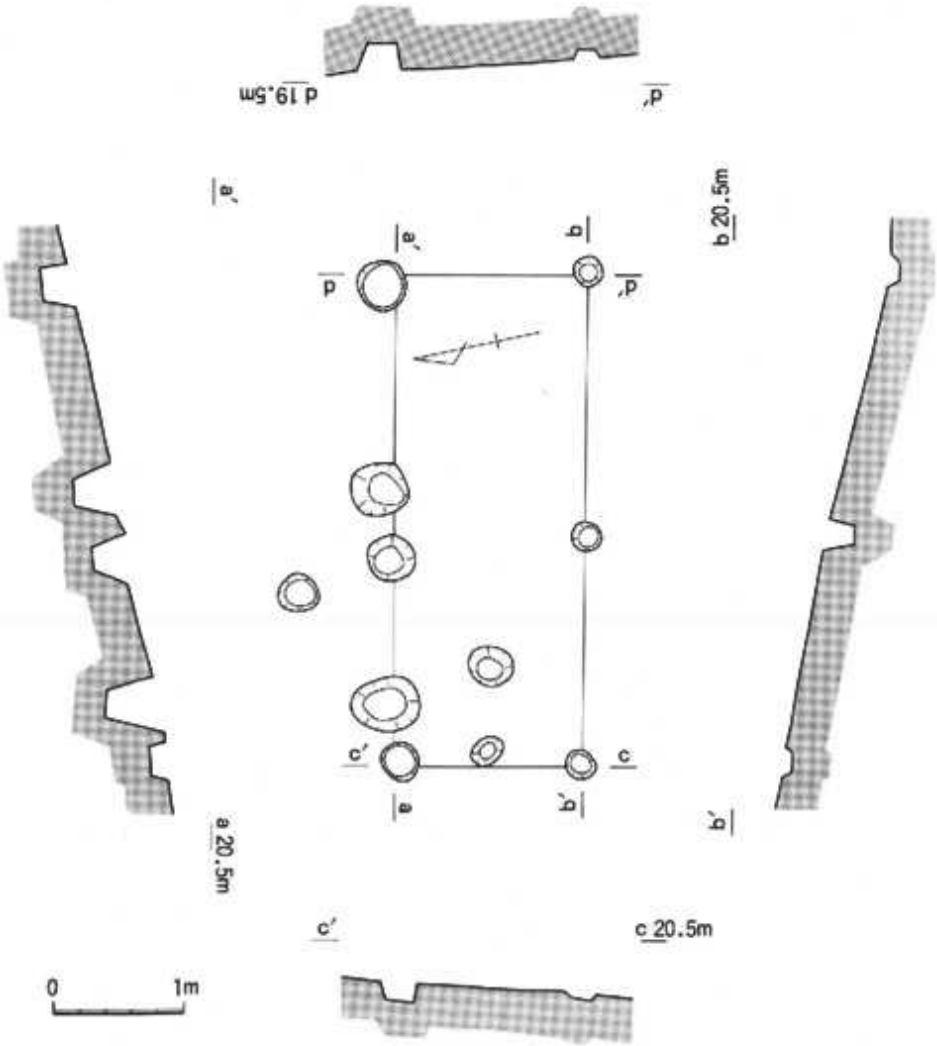
掘立柱建物跡SB02～05より遺物は出土しておらず建物の明確な時期は不明である。しかし，上記の褐色土層出土遺物の下限が9世紀前半であることから，少なくとも9世紀前半までには建てられたと考えられる。

(3)　第3加工段

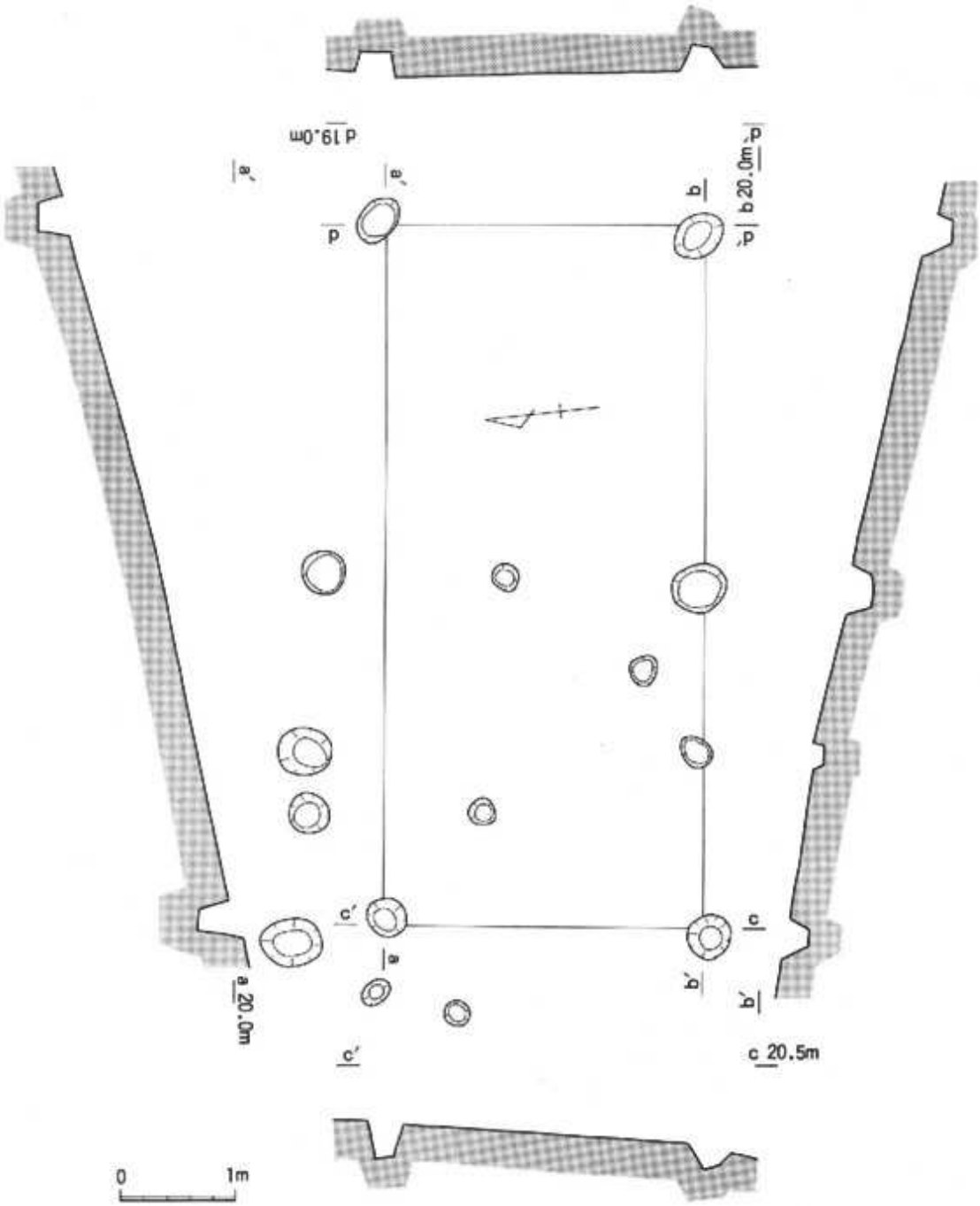
標高17～20mの，北東に面した斜面で，約8×24mの地域に堆積した遺物包含層からSB06～SB08の3棟の掘立柱建物跡を検出した。この遺物包含層を掘り下げた後，地山面を精査した結果SB25を検出した。また，加工段東部の地山面からはSB09を検出した。

SB06（第34図）

加工段西部に位置し，P_1からP_4までの４個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2が280cm，P_2～P_3が180cm，P_3～P_4が236cmを測る。西側桁行残存長P_1～P_3は460cm，北側梁間残存長P_3～P_4は236cmを測るが，南東部が欠落しており，建物の規模は不明である。各柱穴について，P_1は平面形が不整楕円形で長軸60cm，短軸48cm，深さ12cmを測る。底面に直径26cm，深さ14cmのピットが穿たれていた。また，このピットからは８世紀前半頃の須恵器坏蓋が出土した。P_2は平面形が円形で，直径32cm，深さ24cmを測る。P_3は平面形が不整円形で直径48cm，深さ20cmを測る。P_4は平面形が不整楕円形で長軸36cm，短軸44cm，深さ52cmを測る。また，斜面上に位置するため，北側梁間P_3～P_4では0.72mの比高差がある。主軸方位はN－18°－Wである。



第31図　第Ⅲ調査区SB04実測図



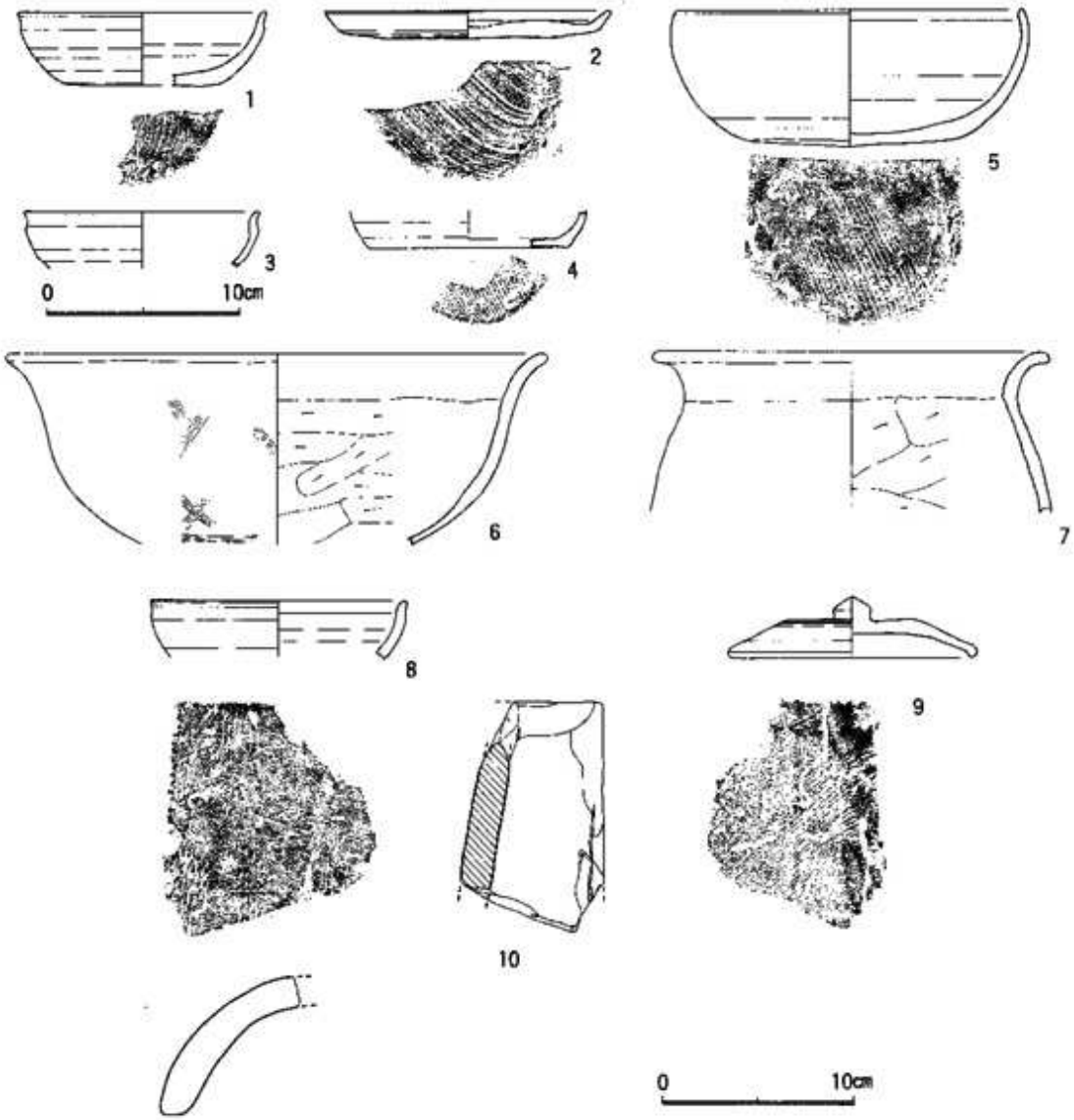
第32図　第Ⅲ調査区SB05実測図

SB06出土遺物（第39図８，図版37）

８は須恵器の蓋で，端部内面にかえりが付く。口径14.3cmを測り，内外面に回転ナデを施す。出雲国庁編年第２形式のものと思われる。

SB07（第35図）

SB06の内側に重複する形で検出された。P_1からP_6の６個の柱穴が確認された。柱間寸法は



第33図　第Ⅲ調査区第１・第２加工段出土遺物実測図

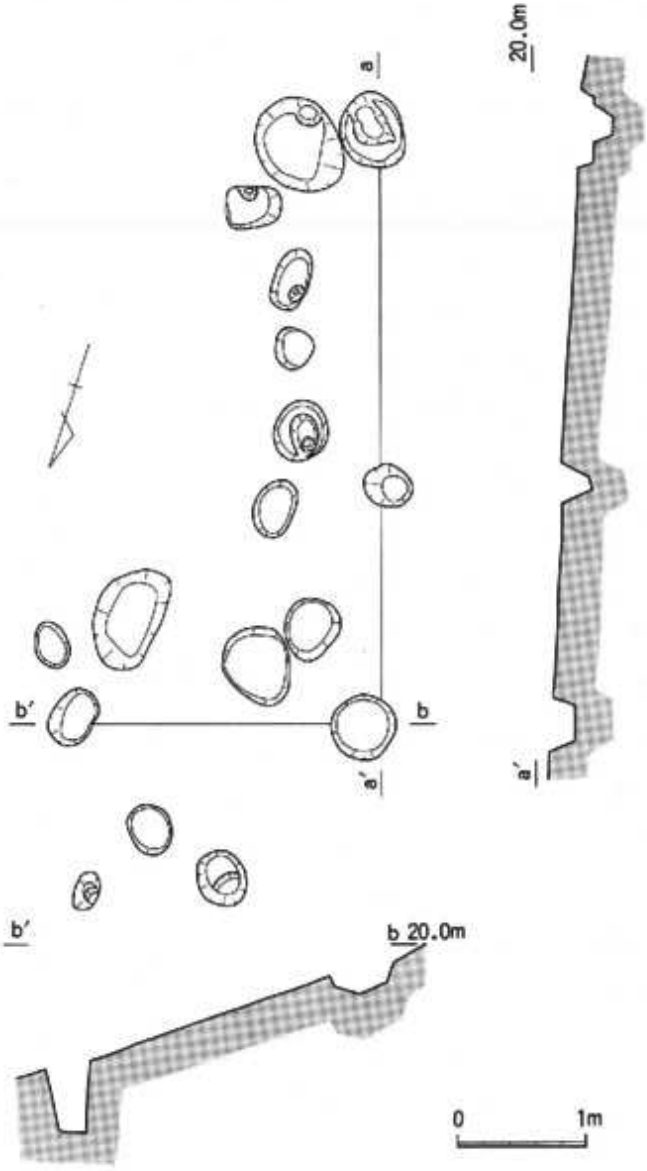
P_1～P_2が108cm，P_2～P_3が52cm，P_3～P_4が60cm，P_4～P_5が144cm，P_5～P_6が134cmを測る。西側桁行残存長P_1～P_5が364cm，北側梁間残存長P_5～P_6が134cmを測るが，南東部が欠落しているため，全体の規模は不明である。P_1は平面形が不整楕円形で長軸72cm，短軸68cmを測る。底面南隅には直径20cm，深さ7cmのピットが穿たれている。P_1からは，須恵器の壺底部，土師器片が出土したが，その時期は明らかではない。P_2は平面形が長円形で長軸40cm，短軸28cm，深さ12cmを測る。底面には直径12cm，深さ8cmの円形のピットが穿たれている。P_3は平面形が不整円形で直径32cm，深さ12cmを測る。P_4は，平面形が不整円形で直径44cm，深さ20cmを測る。底面には，長軸32cm，短軸18cm，深さ10cmの長円形のピットが穿たれている。P_5は平面形が不整円形で直径48cm，深さ48cmを測る。P_5からは土師器の甕片が出土した。P_6は，平面形が不整楕円形で長軸72cm，短軸52cm，深さ40cmを測る。主軸の方位は，N－21°－Wである。

SB07出土遺物（第39図3，12，20，図版37，38）

3は須恵器の壺で，底部に高台を付ける。外面の胴部から底部にかけて丁寧な回転ヘラ削り，内面には回転ナデを施す。

12は土師器の甕で，口縁が「く」の字状に外反する。内・外面にヨコナデを施す。

20は土師器の底部で平底を呈し，外面に指頭圧痕が残る。



第34図　第Ⅲ調査区SB06実測図

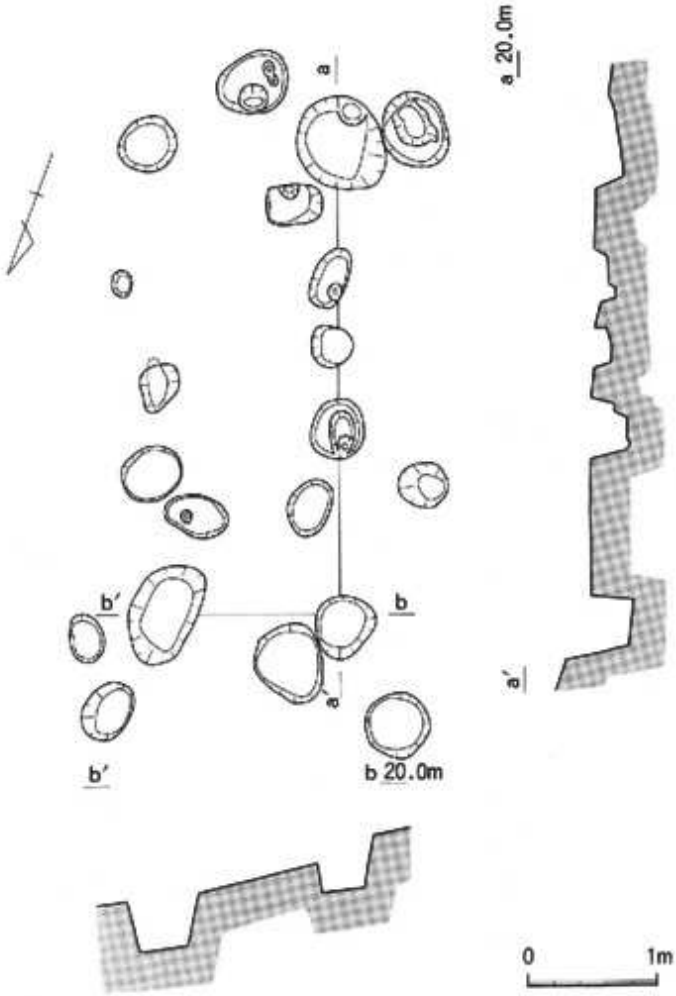
SB08（第36図）

SB07の内側に重複する形で検出された。P_1からP_5までの５個の柱穴が検出された。柱間寸法はP_1～P_2が160cm，P_2～P_3が212cm，P_3～P_4が232cm，P_4～P_5が84cmを測る。西側桁行P_2～P_4が444cm，北側梁間の残存長P_4～P_5が84cm，南側梁間残存長P_1～P_2が160cmを測るが，東側が欠落しており全体の規模は不明である。P_1は平面形が不整円形で直径44cm，深さ20cmを測る。P_2は平面形が不整楕円形で長軸52cm，短軸48cm，深さ18cmを測る。底面には長軸18cm，短軸12cm，深さ８cmのピットが穿たれている。P_3は平面形が不整長方形で長軸が40cm，短軸が28cm，深さが24cmを測る。底面南隅に直径12cm，深さ12cmの円形のピットがある。P_4は平面形が不整楕円形で，長軸40cm，短軸32cm，深さ20cmを測る。P_5は，平面形が不整楕円形で長軸48cm，短軸36cm，深さ16cmを測る。底面には，直径８cm，深さ４cmのピットがあった。P_5からは，土製支脚が出土した。この建物跡の主軸方位はN－25°－Wである。

SB08出土遺物（第39図25，図版38）　25は土製支脚の突起部と考えられ，ナデ調整を施す。

SB09（第37図）

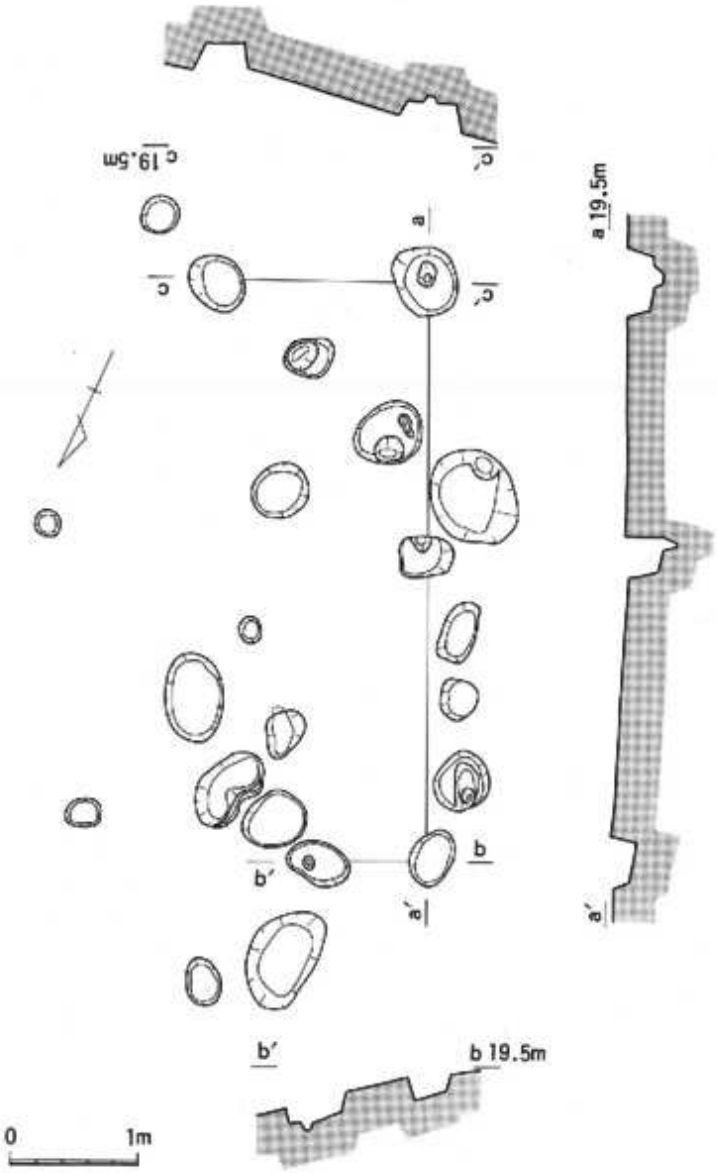
第３加工段東部に位置する。P_1からP_4までの４個の柱穴を検出した。柱間寸法は，P_1～P_2が86cm，P_2～P_3が128cm，P_3～P_4が116cmを測り，桁行残存長は330cmである。P_1は，平面形が不整円形で，直径32cm，深さ16cmを測る。P_1からは８世紀後半のものと思われる須恵器の皿が出土したことから，この遺構もこの時期のものと思われる。P_2は平面形が不整楕円形で長軸が38cm，短軸が28cm，深さが12cmを測る。斜面に沿って，柱列があり，P_1とP_4では，0.9mの比高差がある。主軸方位はN－69°



第35図　第Ⅲ調査区SB07実測図

ーWと思われる。SB09に隣接するSK10からは，７世紀末から８世紀前葉の須恵器・土師器が出土している。

SB09出土遺物（第39図６，図版37）　６は須恵器の皿で，体部が斜め上方へ直線的に立ち上がるものである。内・外面に回転ナデを施す。出雲国庁編年第４形式のものと思われる。



第36図　第Ⅲ調査区SB08実測図

SB25（第38図）

加工段西部の地山面から，P_1からP_4までの４個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2が192cm，P_2～P_3が170cm，P_3～P_4が116cmを測り，桁行残存長は478cmである。P_1は，平面形が不整長円形で長軸108cm，短軸60cm，深さ40cmを測る。P_2は平面形が不整楕円形で長軸100cm，短軸48cm，深さ32cmを測る。底面には長軸60cm，短軸42cm，深さ16cmの楕円形のピットが穿たれている。P_3は平面形が不整楕円形で長軸88cm，短軸72cm，深さ16cmを測る。P_4は平面形が不整楕円形で長軸56cm，短軸40cm，深さ16cmを測る。底面には西隅に直径16cm，深さ10cmの円形のピットが，東隅に長軸16cm，

短軸10cm，深さ7cmの楕円形のピットが穿たれていた。建物の主軸方位は，N－18°－Wである。

SB25覆土・黄褐色土層（第18図1層）出土遺物（第39図9～11，13～18，21～24，27，図版37，38）　9～11は須恵器の坏蓋である。9は縁端部内面にかえりを付け，内・外面に回転ナデを施す。縁端部の径18cmを測る。

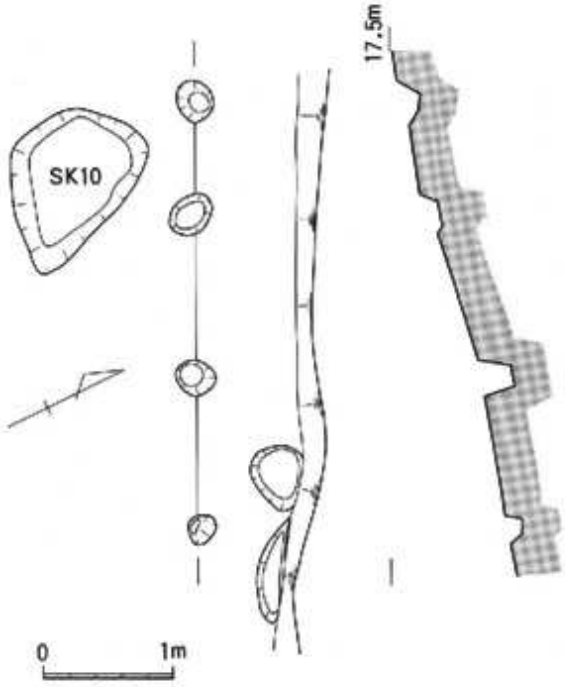
10，11は天井部外面に低い輪状のつまみを付け，周辺に回転ヘラ削りまたは回転ナデを施す。つまみ径は10が5.3cm，11が5.8cmを測る。

13～18は土師器の甕で，胴部が張るもの（14～16，18）と，直線的なもの（13，17）があり，口径は前者が23～35.8cm，後者が14～14.8cmを測る。いずれも口縁部が「く」の字状に外反し，外面にハケ目またはナデ，内面頸部以下ヘラ削り調整を施す。21は竈の基部で，炊口の側面がわずかに残る。基部厚15mmを測り，外面をタテ方向のハケ目及びナデ，内面をヘラ削りによって調整する。22は土製支脚である。高さ10.7cmを測る小形のもので，上部に三又突起を有していたものと思われる。胴部断面は円形状を呈し，底部は上げ底である。指オサエ・ナデ調整により成形する。23，24は甑・竈などの把手と考えられ，残存長は23が8.3cm，24が5cmを測る。土師器のうち，13と22以外はSB25検出面直上の土器溜まりからの出土品である。

27は土師器質の土馬で，顔，前肢，胴部半分以下が欠損しており，現存長6.7cmを測る。首には鬣を表す縦方向の線刻が微かに残る。ナデおよびヘラ状工具により成形する。土馬は水霊祭祀や行疫神からの厄除けに使用されたと考えられており，集落内で土馬による祭祀が行われたことを意味するものである。

SB25に直接伴う遺物は出土していないが，覆土より出土した須恵器が出雲国庁編年第2形式である，7世紀末～8世紀前葉のものと思われることから，SB25は8世紀前葉頃を下限とするものと考えられる。

したがって，SB25の覆土に穿たれたSB06～08は，8世紀前葉以降に建てられたものと考えられる。また，SB06～08の柱穴と同様に黄褐色土層面に穿たれ，埋土（黒褐色土）



第37図　第Ⅲ調査区SB09実測図

も共通するSP78，184より出雲国庁編年第4形式の須恵器が出土していることから，概ね8世紀中葉～後半頃にその時期を置くことができよう。

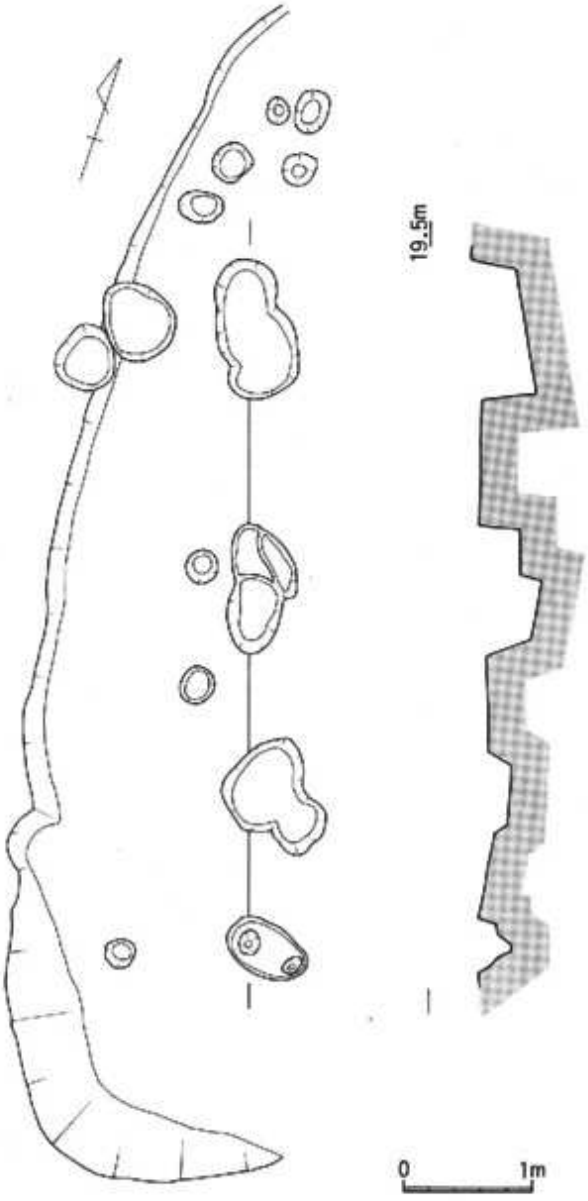
第3加工段・その他の出土遺物　上記の掘立柱建物跡以外の柱穴や，表土の下に堆積した褐色土層などからも遺物が出土した。

SP80出土遺物（第39図2，7，19，図版37，38）　2は須恵器の坏で，体部がゆるやかに内湾して立ち上がり，口縁端部に至る。底部はやや外方へ開く高台を貼り付けた後，丁寧にナデを施している。7は須恵器の蓋で，端部内面にかえりが付き，内・外面に回転ナデを施す。19は土師質の大形手捏土器で，基部の粘土板上に粘土紐を巻き上げて成形している。外面は指オサエの後ナデており，内面にはヘラ削りを施す。須恵器2，7は出雲国庁編年第2形式であり，7世紀末～8世紀前葉のものと考えられ，大形手捏土器もほぼ同時期と思われる。

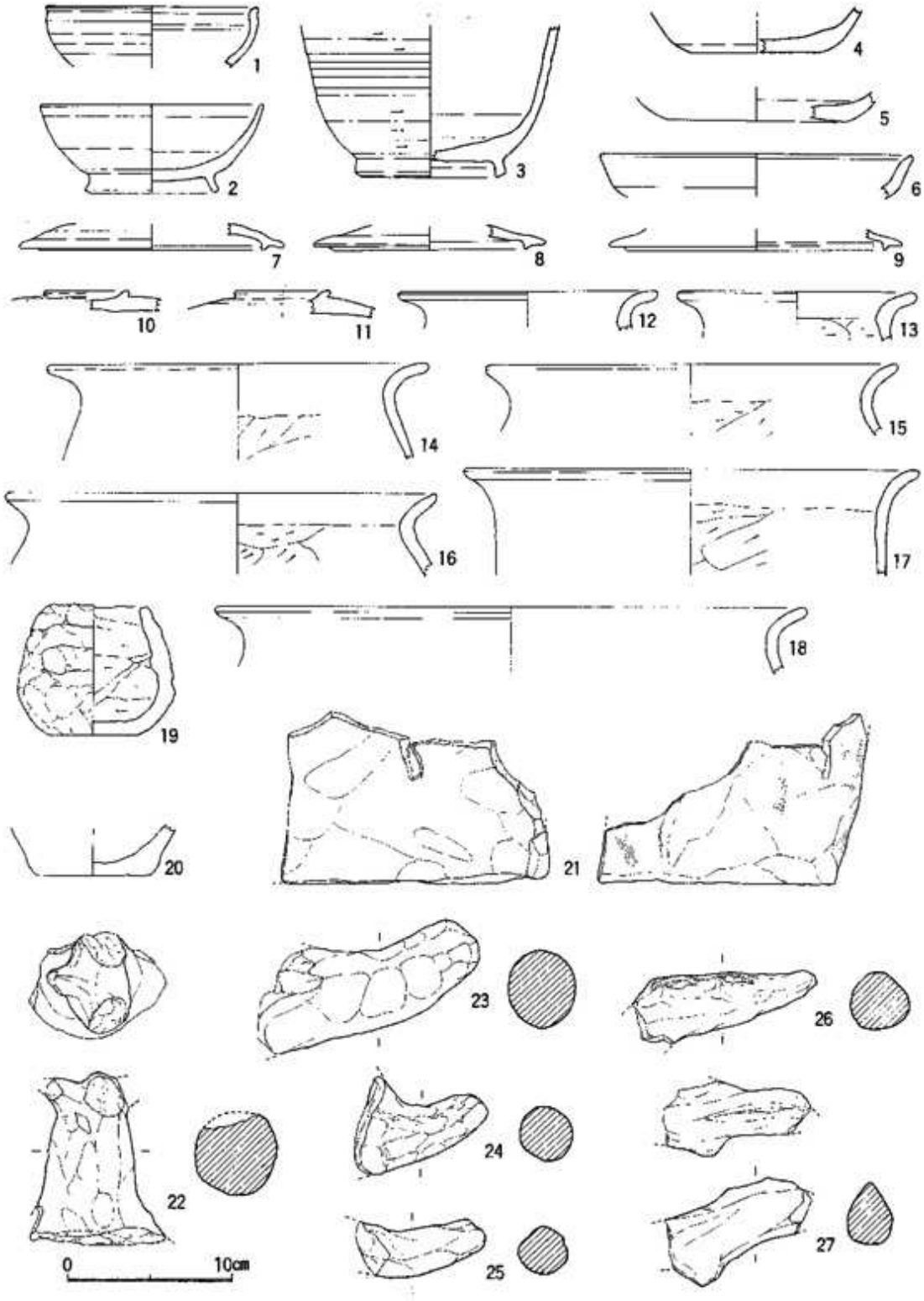
SP78出土遺物（第39図4）　4は須恵器の坏底部で，底部外面は回転糸切り未調整である。出雲国庁編年第4形式のものと思われる。

SP184出土遺物（第39図5，26）　5は須恵器・坏の底部，26は土製支脚の突起部である。5の外面底部は回転糸切り未調整で，出雲国庁編年第4形式のものと思われる。

その他の遺物（第39図1）　1はSB06～09の遺構面検出中に出土した須恵器の坏である。坏体部が内湾気味に立ち上がり，口縁端部が短く外反する。調整は内・外面に回転ナデを施す。



第38図　第Ⅲ調査区SB25実測図



第39図　第Ⅲ調査区第３加工段出土遺物実測図

出雲国庁編年第４形式であり，８世紀中葉～後半頃のものと思われる。

(4) 第４加工段

第４加工段は，東斜面頂上部の南隅に位置する標高18～20ｍの緩やかな斜面である。ピット30あまり，土壙３を検出したが，掘立柱建物跡を復元することはできなかった。

第４加工段出土遺物（第44図３～６，図版39） 第４加工段からは遺構に伴う遺物は出土しなかった。図示したものは表土下の褐色土からの出土遺物である。３は土師器の手捏土器で，口径3.6cm，高さ2.2cmを測る。内・外面ともナデ調整により成形する。４，５は土師器の甕・竈などの把手で，残存長が４が6.6cm，５が４cmを測る。ヘラ削りあるいはナデ調整により成形する。

６は平瓦で，凸面に縄目叩き，凹面に布目痕を残す。

(5) 第５加工段

第４加工段南端から続き，緩やかな傾斜を持つ幅2ｍほどの狭い平坦面で，この平坦面と第４加工段東端との標高差は１ｍである。ここにSB10と土壙SK14が切り合った状態で検出された。この切り合いの様子からSK14が穿たれた後，これを囲むようにSB10が築かれた様子が窺われる。

SB10（第40図）

P_1～P_8の８個の柱穴を検出した。このうち，直接建物に関わるのはP_3を除く７個の柱穴であると思われる。柱間寸法はP_1～P_2が176cm，P_2～P_3が156cm，P_3～P_4が46cm，P_4～P_5が176cm，P_5～P_6が200cm，P_6～P_7が68cm，P_7～P_8が272cmを測る。南側桁行の残存長P_5～P_8は540cm，北側桁行の残存長P_1～P_4が378cmで，東側梁間はP_4～P_5の176cmである。北西側が欠落していると思われる。建物の主軸方位はＮ－67°－Ｅである。P_1は平面形が不整円形で直径が36cm，深さ24cmを測る。P_2は，平面形が不整楕円形で２つの柱穴が切り合った形になっている。長軸60cm，短軸44cm，深さ32cmを測る。P_3は平面形が不整楕円形で長軸56cm，短軸24cm，深さ12cmを測る。P_4は，平面形が不整楕円形で長軸36cm，短軸28cm，深さ16cmを測る。P_5は平面形が不整円形で直径が44cm，深さ20cmを測る。底面北隅に直径12cm深さ８cmのピットが穿たれている。P_6は平面形が円形で直径が24cm，深さが12cmを測る。P_7は平面形が円形で直径が44cm，深さ32cmを測る。P_8は平面形が不整楕円形で長軸が44cm，短軸が32cm，深さが28cmを測る。これらの柱穴からは少量の土師器片が出土している。

第５加工段出土遺物 遺物の出土量は極めて少ない。

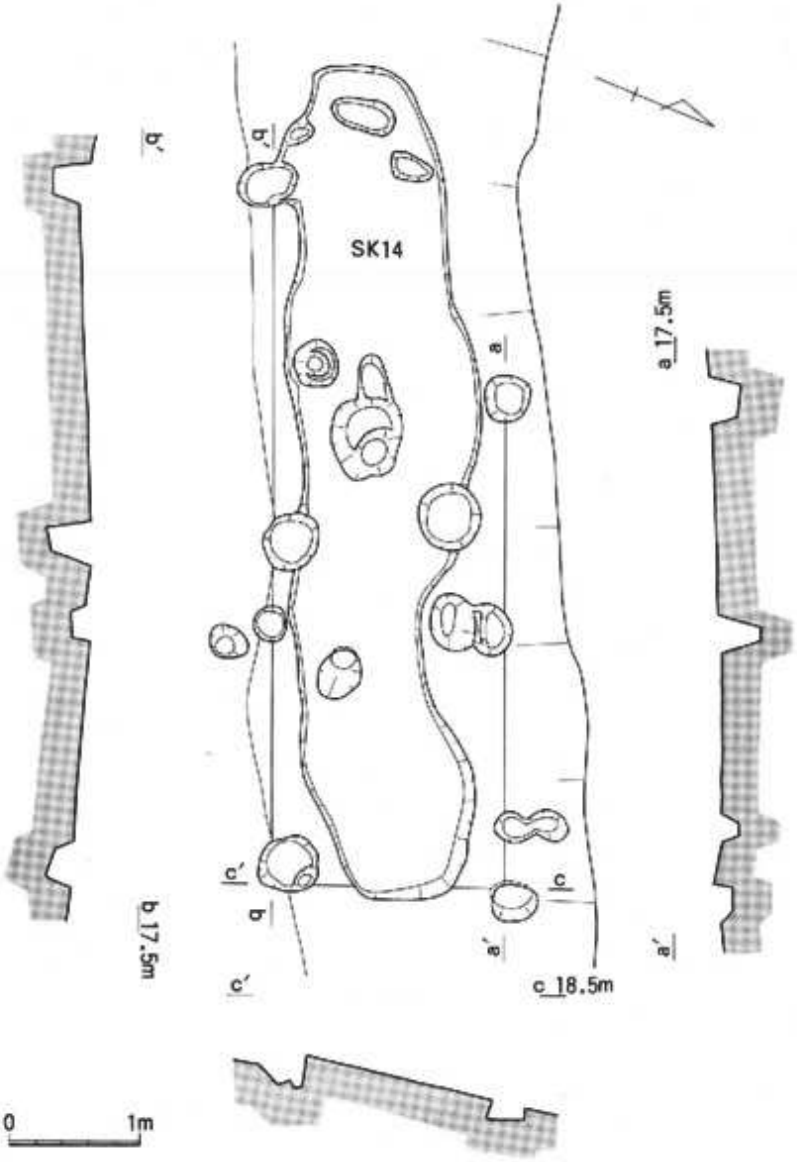
SP213出土遺物（第44図１，図版39） １は須恵器の坏蓋で，天井部外面に宝珠状のつまみを付けるものと思われる。縁端部が下方へ短く屈曲し，天井部２/３の範囲に回転ヘラ削りを施す。口径10.8cm，残存高1.8cmを測り，出雲国庁編年第３形式～第４形式のものである。

掘立柱建物跡SB10からは，土師器片が１片しか出土していないが，SP７，８が８世紀中葉～後半に比定されるSK14の肩を切っていることから，８世紀後半以降のものと思われる。ただ，わざ

わざSK14を囲むように柱穴が穿たれている点から考えると，SK14の覆屋的施設であった可能性も考えられる。

(2) 第6加工段

東斜面中央部東側に位置する標高14～17mの緩斜面である。約10×21mの地域で，ここからはSB12～SB15の4棟の建物跡が検出された。



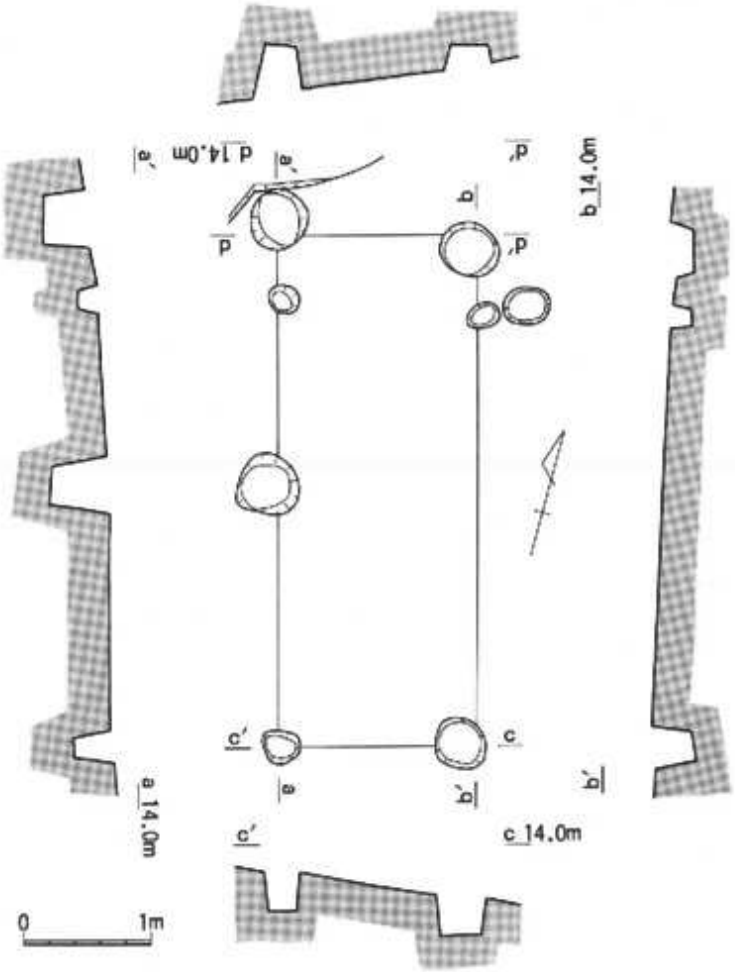
第40図　第Ⅲ調査区SB10実測図

SB12（第41図）

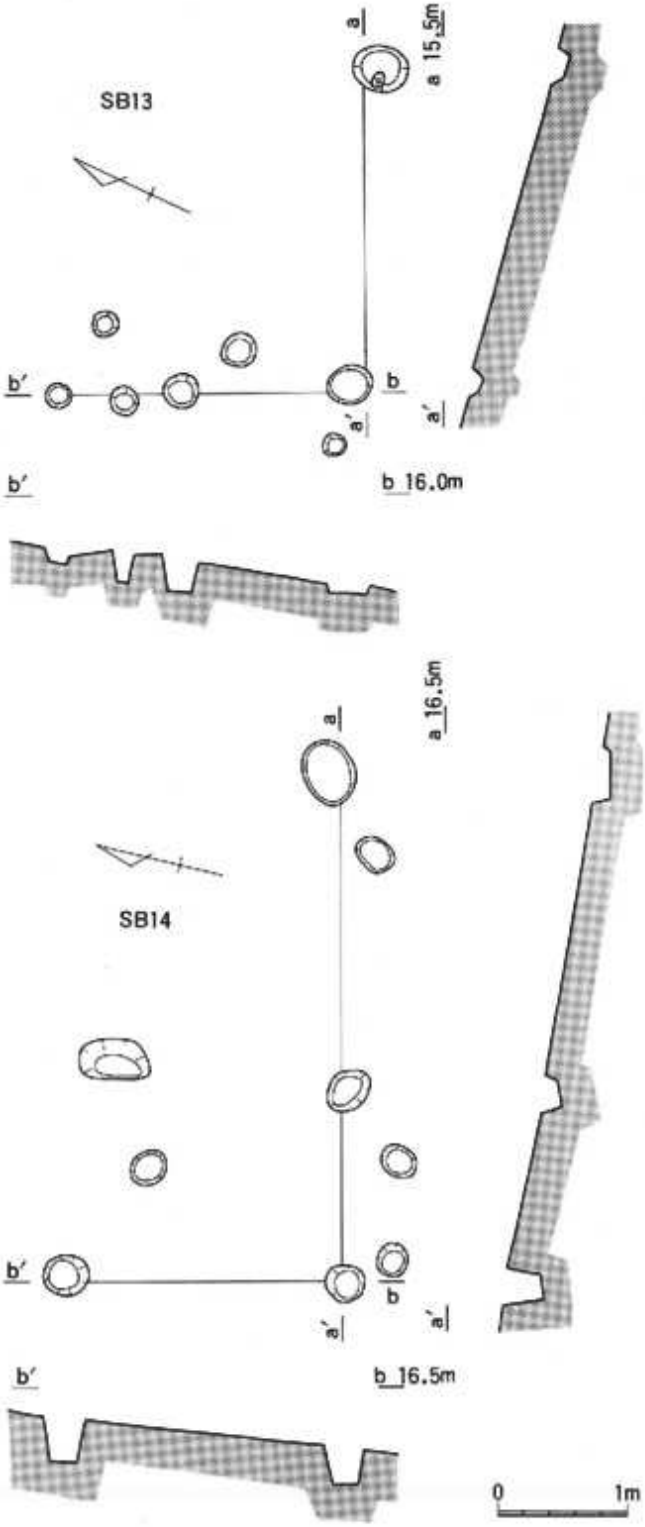
加工段東隅に位置し，P_1からP_7までの７個の柱穴が確認できた。柱間寸法はP_1～P_2が60cm，P_2～P_3が332cm，P_3～P_4が154cm，P_4～P_5が198cm，P_5～P_6が148cm，P_6～P_7が48cm，P_7～P_1が152cmを測る。建物の規模は，東側桁行P_1～P_3が382cm，西側桁行P_4～P_7が394cm，南側梁間P_3～P_4は154cm，北側梁間P_7～P_1は152cmであり，約400×150cmの比較的小さな建物で，２間×１間であったと思われる。建物の主軸方位はN－17°－Wである。P_1は平面形が円形で直径が44cm，深さが16cmを測る。P_2は平面形が不整楕円形で長軸が24cm，短軸が20cmを測る。P_3は平面形が不整円形で直径40cm，深さ32cmを測る。P_4は平面形が不整楕円形で長軸28cm，短軸24cm，深さ32cmを測る。P_5は平面形が不整円形で直径が46cm，深さ44cmを測る。P_6は平面形が円形で直径が20cm，深さ16cmを測る。P_7直径は44cm，深さ36cmを測る。

SB13（第42図）

加工段中央北隅に位置し，P_1からP_5の５個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2は250cm，P_2～P_3が140cm，P_3～P_4が48cm，P_4～P_5が52cmを測る。南側桁行残存長はP_1～P_2の250cm，西側梁間の残存長はP_2～P_5の240cmであるが，北東部が欠落しているため，全体の規模は不明である。P_1は平面形が不整楕円形で長軸40cm，短軸36cm，深さ12cmを測る。底面西隅に直径10cm，深さ６cmほどのピットが穿たれていた。P_2は平面形が円形で直径32



第41図　第Ⅲ調査区SB12実測図



第42図　第Ⅲ調査区SB13，14実測図

cm，深さ8cmを測る。P_3は平面形が円形で直径28cm，深さ28cmを測る。P_4は平面形が円形で直径24cm，深さ25cmを測る。P_5も平面形が円形で直径20cm，深さ8cmを測る。建物の主軸方位はN－64°－Eである。

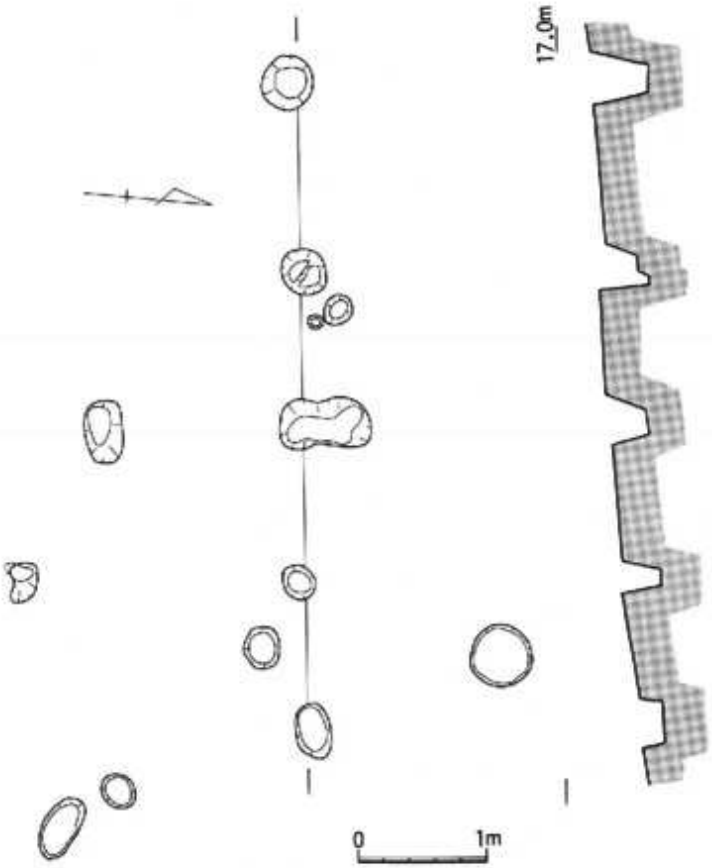
SB14（第42図）

加工段中央南隅に位置する。P_1～P_4までの4個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2が244cm，P_2～P_3が146cm，P_3～P_4が214cmを測る。南側桁行の残存長P_1～P_3は390cm，西側梁間の残存長P_3～P_4は214cmであるが，北東部が欠落しており，全体の規模は不明である。建物の主軸方位はN－76°－Eであった。P_1は平面形が楕円形で長軸48cm，短軸40cm，深さ12cmを測る。P_2は，平面形が不整楕円形で長軸38cm，短軸28cm，深さ16cmを測る。P_3は平面形が不整円形で直径28cm，深さ32cmを測る。P_4は平面形が直径32cmの円形で，深さ32cmを測る。

SB15（第43図）

加工段西隅で検出された。P_1からP_5までの5個の柱穴を

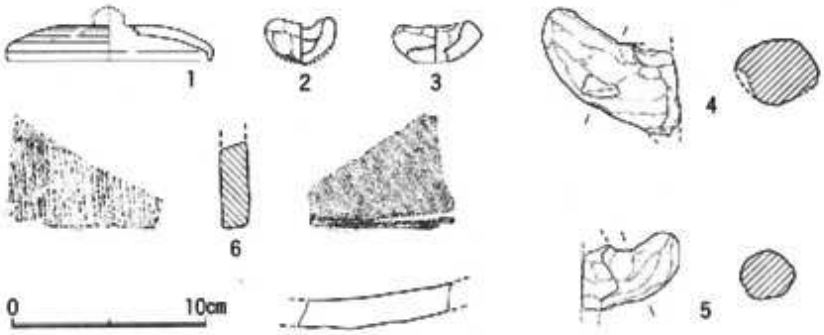
確認した。柱間寸法はP_1～P_2は144cm，P_2～P_3が120cm，P_3～P_4が120cm，P_4～P_5が112cmを測る。桁行の残存長P_1～P_5は496cmである。主軸方位はN－83°－Eであった。P_1は平面形が円形で直径40cm，深さ44cmを測り，P_2は直径36cmの円形を平面形に持ち，深さ24cmを測る。P_2の底面北隅には長軸24cm，短軸12cm，深さ10cmの楕円形のピットが穿たれている。P_3は平面形が不整長円形で長軸72cm，短軸40cm，深さ28cmを測る。P_4は平面形が直径24cmの円形で，深さが28cmを測る。P_5は平面形が楕円形で，長軸40cm，短軸28cm，深さ16cmを測る。



第43図　第Ⅲ調査区SB15実測図

第6加工段出土遺物（第44図2）　2は表土の下に堆積した褐色土層からの出土遺物で，手捏土器である。口径2.7cm，器高2.4cmを測る小形品で，内・外面に指オサエにより成形する。

掘立柱建物跡SB12～15に伴う遺物は出土していないが，表土下の褐

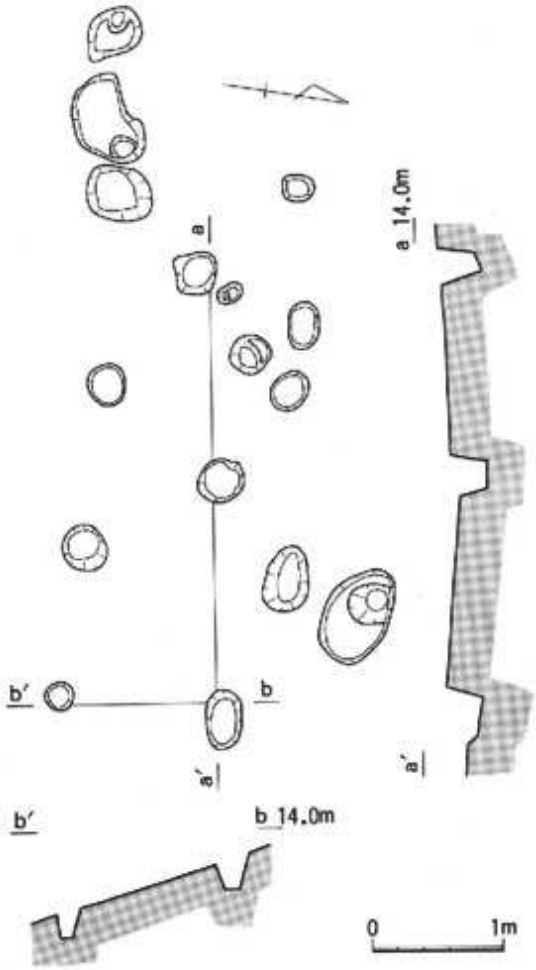


第44図　第Ⅲ調査区第4・第5・第6加工段出土遺物実測図

色土層出土遺物の下限が9世紀前半頃と考えられるため，第6加工段の掘立柱建物跡群も概ねこの頃までに建てられたものと推測される。

(7) 第7加工段

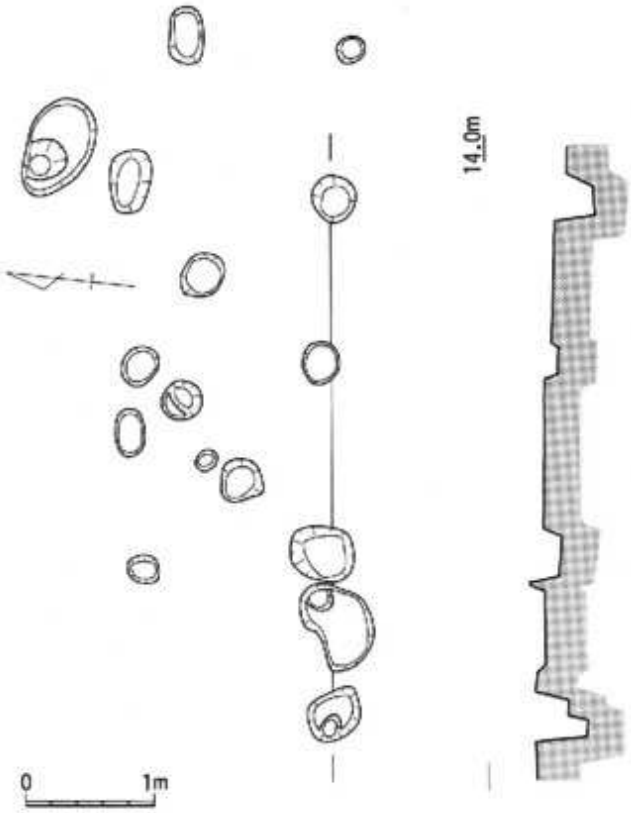
標高13～15mの斜面に幅約8m，長さ約22mの広い平坦面をつくり出しており，少なくとも2面の遺構面が重複していた。赤色ブロック及び炭化物の混入した褐色土層が上層で，この上層面からSB16～SB19の4棟の建物跡が検出され，この堆積土を取り除いた地山面からSB26，SB27の2棟の建物跡が検出された。SB18，19とSB26，27は，土層堆積状況から明らかに切り合いが認められ，SB18，19の覆土にSB26，27の柱穴が穿たれていた。SB16，17については，土層から掘立柱建物同士の切り合い関係を確認することはできなかった。



第45図　第Ⅲ調査区SB16実測図

SB16（第45図）

第7加工段東部に位置し，P_1からP_4までの4個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2が164cm，P_2～P_3が168cm，P_3～P_4が122cmを測る。北側桁行残存長P_1～P_3は332cm，東側梁間残存長P_3～P_4が122cmであるが南西部が欠落しており，全体の規模は不明である。主軸方位はN－80°－Eである。P_1は平面形が不整方形で，長辺32cm，短辺28cm，深さ28cmを測る。P_2は不整円形で直径36cm，深さ24cmを測る。P_3は平面形が不整楕円形で長軸44cm，短軸28cm，深さ24cmを測る。P_4は平面形が不整円形で直径20cm，深さ20cmを測る。



第46図　第Ⅲ調査区SB17実測図

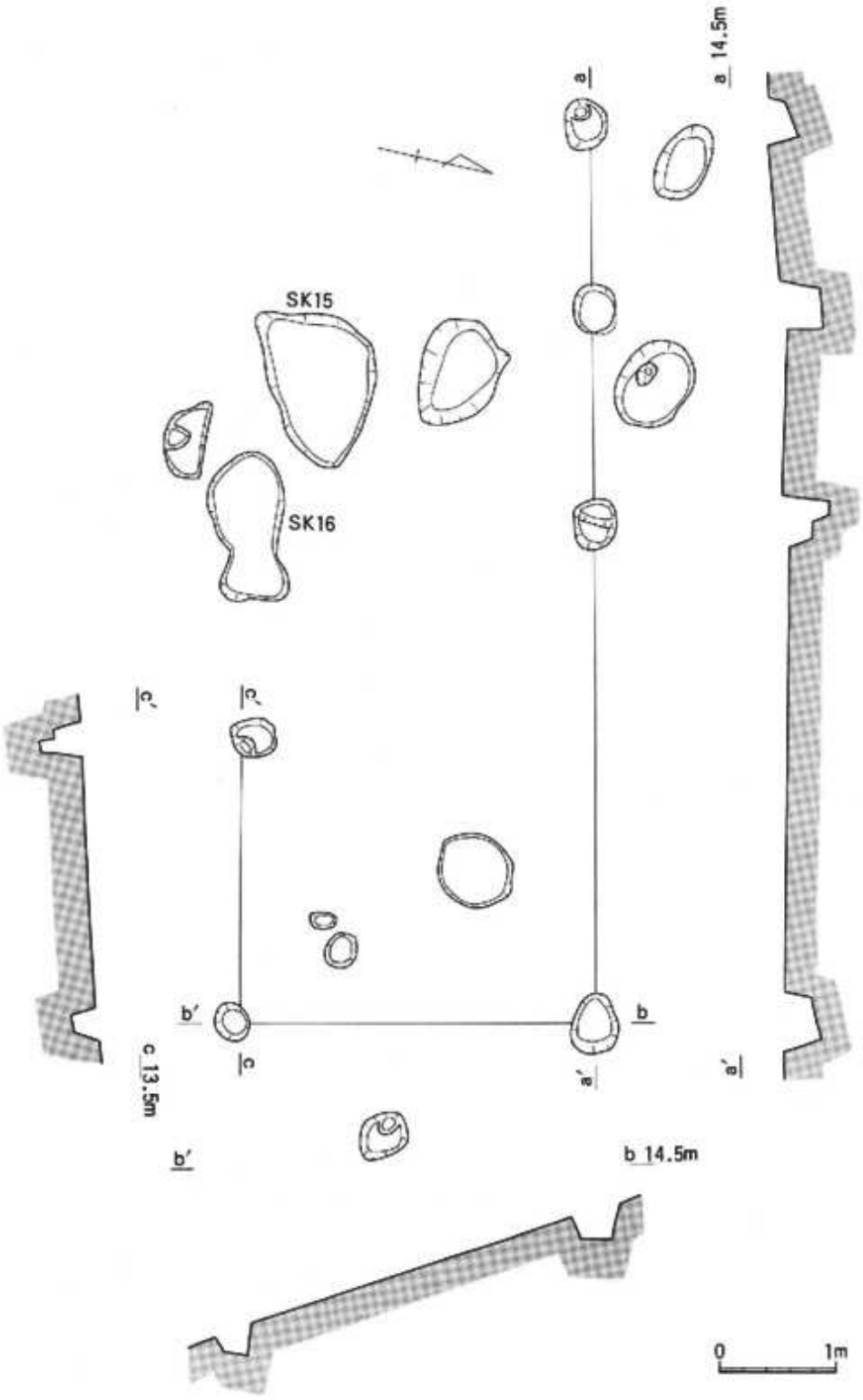
SB17（第46図）

SB16と一部重複する形で検出された。P_1からP_5まで5個の柱穴を確認している。柱間寸法は，P_1～P_2が124cm，P_2～P_3が148cm，P_3～P_4が48cm，P_4～P_5が76cmを測る。桁行の残存長P_1～P_3は396cmで，主軸方位はN－84°－Eである。P_1は平面形が円形で，直径36cm，深さ32cmを測る。P_2は平面形が円形で直径32cm，深さ12cmを測る。P_3は，平面形が不整方形で長辺50cm，短辺44cm，深さ24cmを測る。P_4は平面形が不整楕円形で長軸が70cm，短軸が44cm，深さが12cmを測る。底辺の東端には直径20cm，深さ7cmのピットが穿たれていた。P_5は平面形が不整方形で長辺が42cm，短辺が35cm，深さ24cmを測る。底面西隅には直径20cm，深さ16cmのピットが穿たれていた。

SB18（第47図）

第7加工段西部から検出した。P_1からP_6の6個の柱穴を確認した。柱間寸法はP_1～P_2が154cm，P_2～P_3が184cm，P_3～P_4が420cm，P_4～P_5が300cm，P_5～P_6が240cmを測る。北側桁行残存長P_1～P_4は758cm，南側桁行残存長はP_5～P_6の240cmで，梁間P_4～P_3が300cmであり，南西部が欠落しているが，建物の規模は比較的大きなものであったと思われる。建物の主軸方位はN－77°－Eである。緩斜面に位置するため，P_4～P_5の比高差は，0.88mである。P_1は平面形が楕円形で長軸44cm，短軸36cm，深さ28cmを測る。底面東隅には直径16cm，深さ6cmのピットが穿たれている。P_2は，平面形が楕円形で長軸が40cm，短軸が34cm，深さが36cmを測る。P_3は平面形が楕円形で長軸44cm，短軸36cm，深さ40cmを測る。P_4は平面形が楕円形で長軸52cm，短軸40cm，深さ32cmを測る。P_4からは，土師器の甕片が出土した。P_5は平面形が円形で直径32cm，深さ28cmを測る。

SB18出土遺物（第51図3）　3は土師器の甕で，口縁が「く」の字状に開くものである。復元口

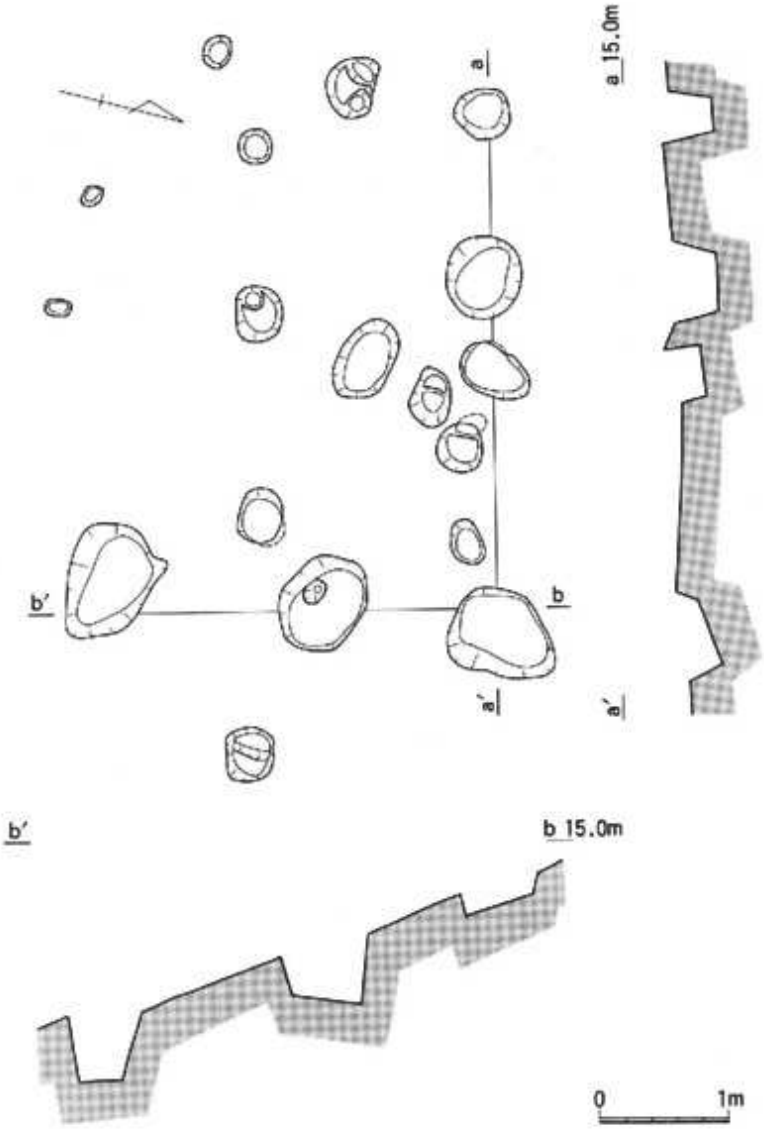


第47図　第Ⅲ調査区SB18実測図

径24.8cmを測り，内・外面にヨコナデを施す。

SB19（第48図）

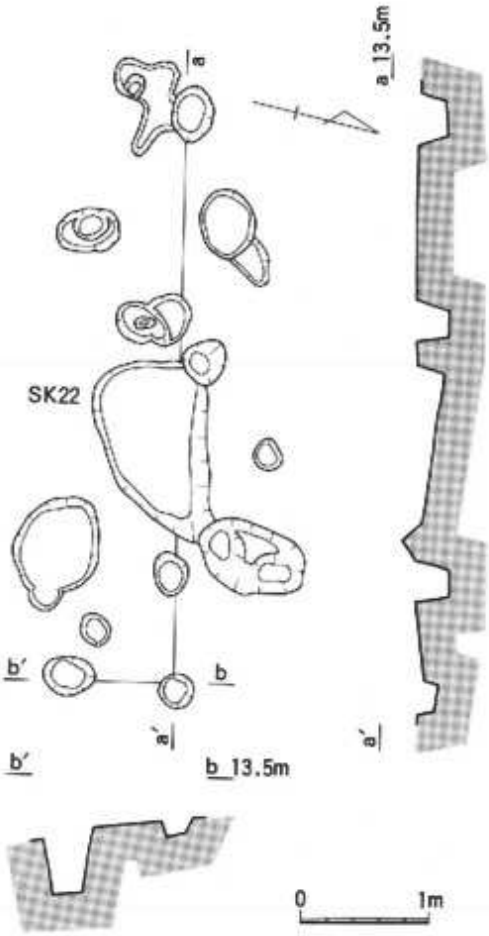
SB18と重複する形で検出された。P_1からP_6の6個の柱穴を確認した。柱間寸法はP_1～P_2が124cm，P_2～P_3が76cm，P_3～P_4が180cm，P_4～P_5が136cm，P_5～P_6が170cmを測る。北側桁行残存長P_1～P_4は380cm，東側梁間残存長P_4～P_6は306cmを測るが，南西部が欠落し，全体の規模は不明である。緩斜面に位置するため，P_1～P_6で1.06mの比高差がある。建物の主軸方位はN－76°－Eである。P_1は平面形が直径40cmの円形で，深さが41cmを測る。P_2は平面形が不整円形で直径64cm，深さ36cmを測る。P_3は平面形が楕円形で，長軸58cm，短軸36cm，深さ28cmを測る。P_4は平面形が不整楕円形で長軸88cm，短軸72cm，深さ28cmを測る。P_5は平面形が不整楕円形で長軸が80cm，短軸が60cm，深さ52cmを測る。底面南隅には長軸20cm，短軸14cm，深さ8cmの楕円形のピットが穿たれていた。P_6は平面形が不整楕円形で長軸88cm，短軸76cm，深さ52cmを測る。



第48図　第Ⅲ調査区SB19実測図

SB26（第49図）

P_1からP_5の５個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2が160cm，P_2～P_3が198cm，P_3～P_4が90cm，P_4～P_5が80cmを測る。北側桁行残存長P_1～P_4は448cmを測り，東側梁間残存長P_4～P_5は80cmを測るが，南西部が欠落し，全体の規模は不明である。建物の主軸方位はN－77°－Eである。P_1は平面形が楕円形で長軸44cm，短軸32cm，深さ24cmを測る。P_2は平面形が不整楕円形で長軸56cm，短軸40cm，深さ24cmを測る。底面中央付近に長軸16cm，短軸８cm，深さ６cmのピットが穿たれていた。P_3は平面形が楕円形で長軸34cm，短軸28cm，深さ24cmを測る。P_4は平面形が円形で直径が26cm，深さ12cmを測る。P_5は平面形が不整楕円形で長軸40cm，短軸30cm，深さ48cmを測る。



第49図　第Ⅲ調査区SB26実測図

SB27（第50図）

P_1からP_6の６個の柱穴が検出された。柱間寸法はP_1～P_2が80cm，P_2～P_3が184cm，P_3～P_4が186cm，P_4～P_5が108cm，P_5～P_6が56cmであった。北側桁行残存長P_1～P_5が558cm，西側梁間残存長P_5～P_6が56cmを測るが，南東部は欠落している。建物の主軸方位はN－87°－Wであった。P_1は平面形が円形で直径36cm，深さ48cmを測る。P_2は平面形が不整楕円形で長軸52cm，短軸32cm，深さ44cmを測る。P_3は平面形が不整楕円形で長軸40cm，短軸28cm，深さ28cmを測る。P_4は平面形が円形で直径28cm，深さ40cmを測る。P_5は平面形が楕円形で長軸36cm，短軸28cm，深さ28cmを測る。P_6は平面形が不整円形で直径32cm，深さ12cmを測る。

SB26，27覆土・褐色土層（第18図２層）出土遺物（第51図２，５～７，10，第52図１，２）　51－２は須恵器の坏で，体部が内湾気味に立ち上がり，やや外方へ開く高台を貼り付ける。底部外面に回転ナデ調整を施した後，「×」印のヘラ記号を付ける。この他，細片のため図示できなかったが，底部外面に静止糸切り痕や回転糸切り痕が残る坏も出土している。

51－５は土師器の土製支脚で，上部に三又突起をもっていたと思われる。胴部断面は円形を呈し，

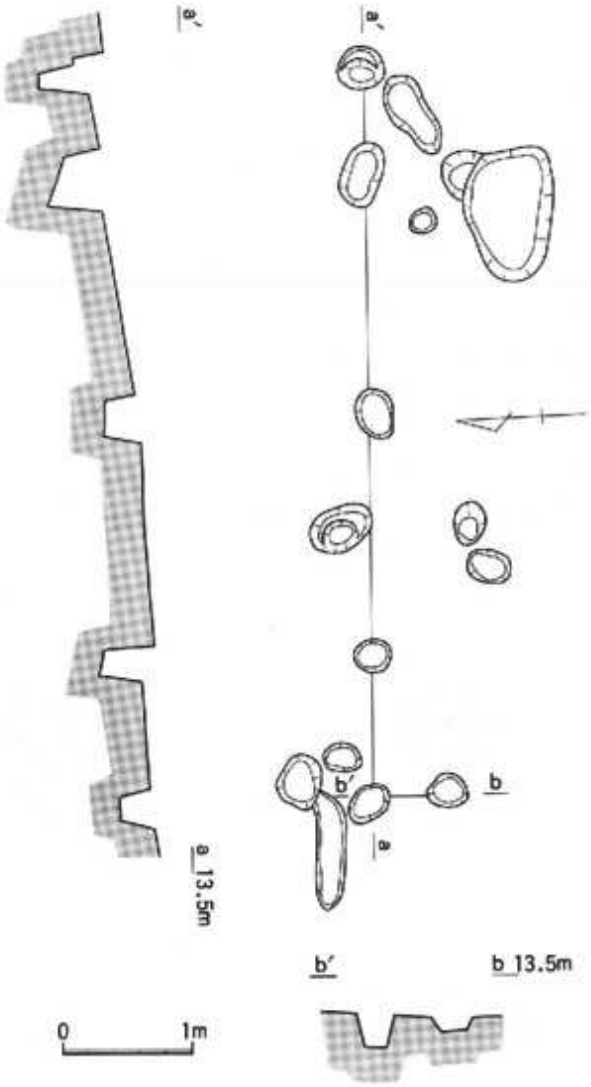
ナデ調整を施す。51－10は甑・竈などの把手で，残存長7.7cm，径3.3cmを測る。ヘラ状工具で形を整えた後ナデている。

51－6，7は砲弾形の土錘で，長さ5cm前後，幅2cmを測る大型品である。表面に指頭によるナデ痕跡が残る。

52－1はSB26，27検出面の直上から出土した行基式の丸瓦である。凸面はナデ調整を行い，凹面には布目痕が残る。52－2は平瓦で，凸面に幅の広い縄目叩きを施し，凹面に布目痕が残る。両者とも焼成は良好である。

須恵器51－2は出雲国庁編年第2形式であり，静止糸切り痕や回転糸切り痕が残る坏は第3形式～第4形式と思われる。また，瓦は8世紀中頃以降と思われ，出土遺物の時期幅が比較的広い。

SB26，27に伴う遺物はないが，覆土の出土遺物の時期から一応7世紀末～8世紀後半の間に置くことができよう。このため，覆土に穿たれたSB16～19の時期は，8世紀後半～9世紀前半頃になるものと思われる。



第50図　第Ⅲ調査区SB27実測図

第7加工段・その他の遺物　掘立柱建物跡以外の柱穴や表土下に堆積した褐色土層からも遺物が出土した。

SP295出土遺物（第51図11）　11は竈の庇で，外面にナデ調整，内面にヘラ削りを施す。

その他の遺物（第51図1，4，8，9）　全て遺構面検出中に褐色土から出土したものである。1は須恵器の坏で，1.4cmの高さの高台を付け，底部外面の高台周辺に回転ナデ，その他の部分にはナ

デ調整を施す。出雲国庁編年第２形式に属すると思われる。

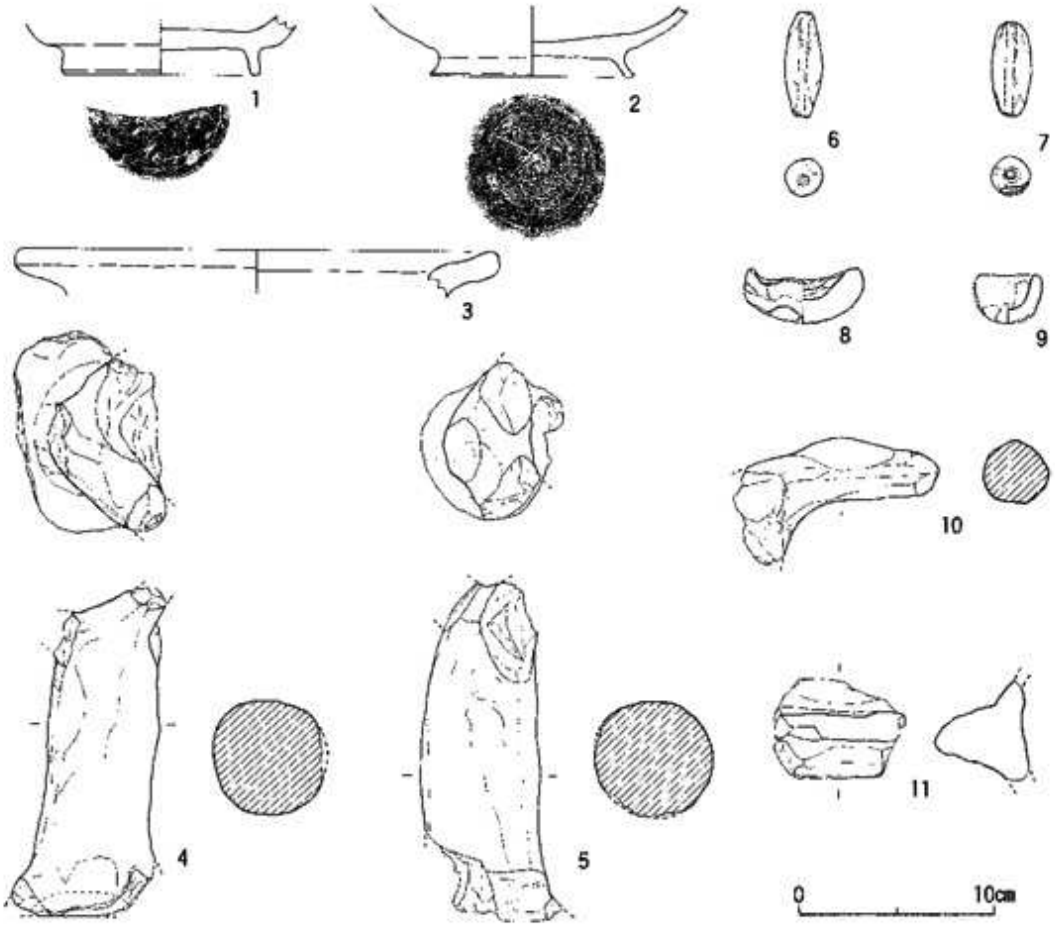
４は残存高17cmを測る大形の上製支脚で，三又突起である。底部は上げ底で，表面をヘラ状工具およびナデ調整で成形する。８，９は手捏土器で，８は口径5.4cm，器高2.8，９は口径３cm，器高2.5cmをそれぞれ測り，手捏により成形する。

(8) 第８加工段

東斜面南東端に位置し，標高９～10mの緩やかな傾斜面を削って，約５×12mの平坦面が作られている。25のピットを検出したが，ここで復元できた掘立柱建物跡はSB24の１棟であった。

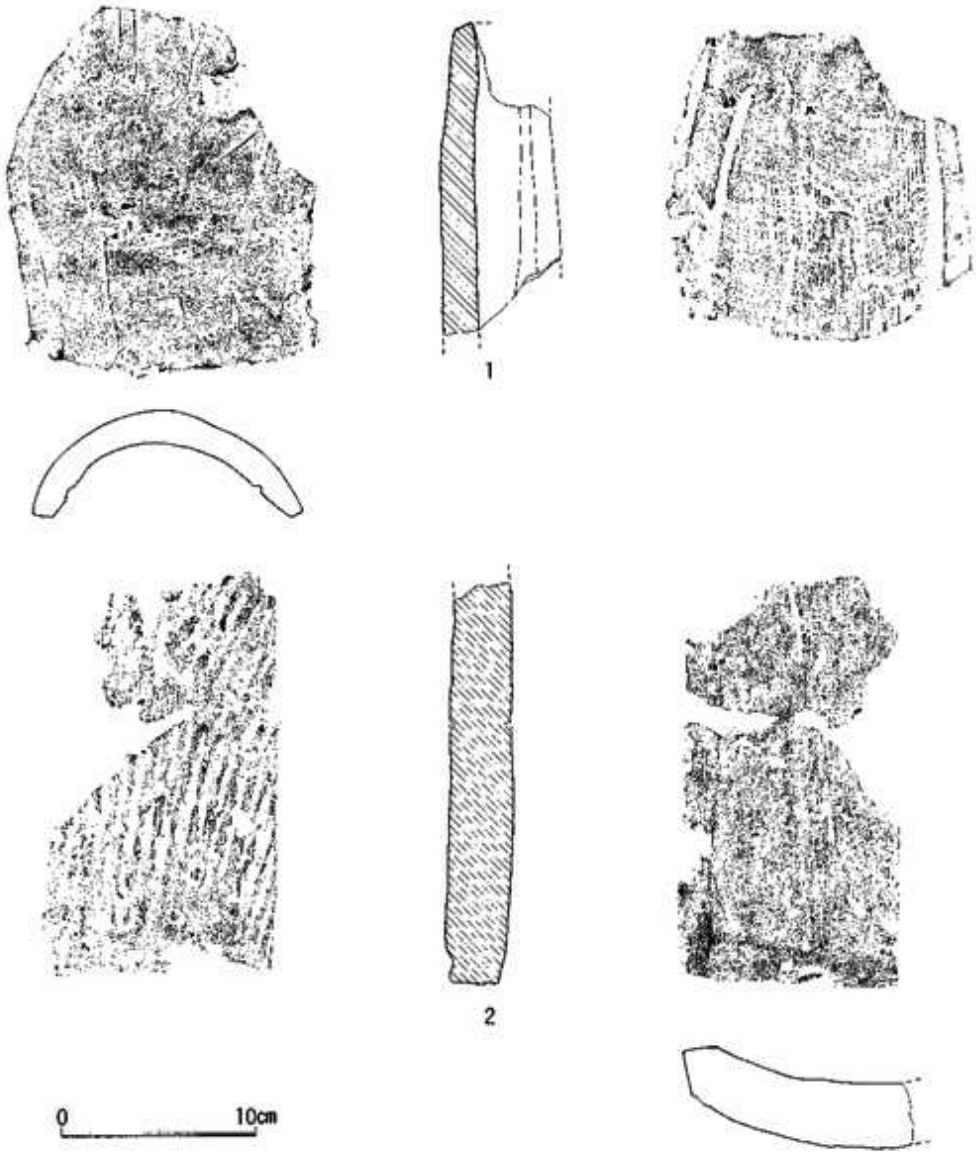
SB24（第53図）

P_1からP_9までの９個の柱穴が検出された。柱間寸法は，P_1～P_2が160cm，P_2～P_3が128cm，P_3～P_4が104cm，P_4～P_5が186cm，P_5～P_6が80cm，P_6～P_7が68cm，P_7～P_8が156cm，P_8～P_9が152cmを測る。南側桁行P_1～P_4が392cm，北側桁行P_5～P_9が516cm，西側梁間P_4～P_5は186cmであり，東側が欠落し



第51図　第Ⅲ調査区第７加工段出土遺物実測図(1)

ていた。比較的規模の大きな掘立柱建物であったと思われる。建物の主軸方位はN－87°－Eであった。P_1は平面形が楕円形で長軸28cm，短軸24cm，深さ32cmを測る。P_2は平面形が直径36cmの円形で深さ20cmを測る。P_3は平面形が円形で直径28cm，深さ20cmを測る。P_4は平面形が直径48cmの円形で深さ44cmを測る。P_5は平面形が不整楕円形で長軸72cm，短軸48cm，深さ36cmを測る。底面南隅には，直径36cm，深さ19cmの円形のピットが穿たれていた。P_5からは土師器の甕片が出土している。P_6は平面形が不整円形で直径が30cm，深さが44cmを測る。P_7は平面形が長軸76cm，短軸44cmの不整楕円形で深さ27cmを測る。底面西半分には直径36cm，深さ20cmの円形のピットが穿たれていた。P_7でも，



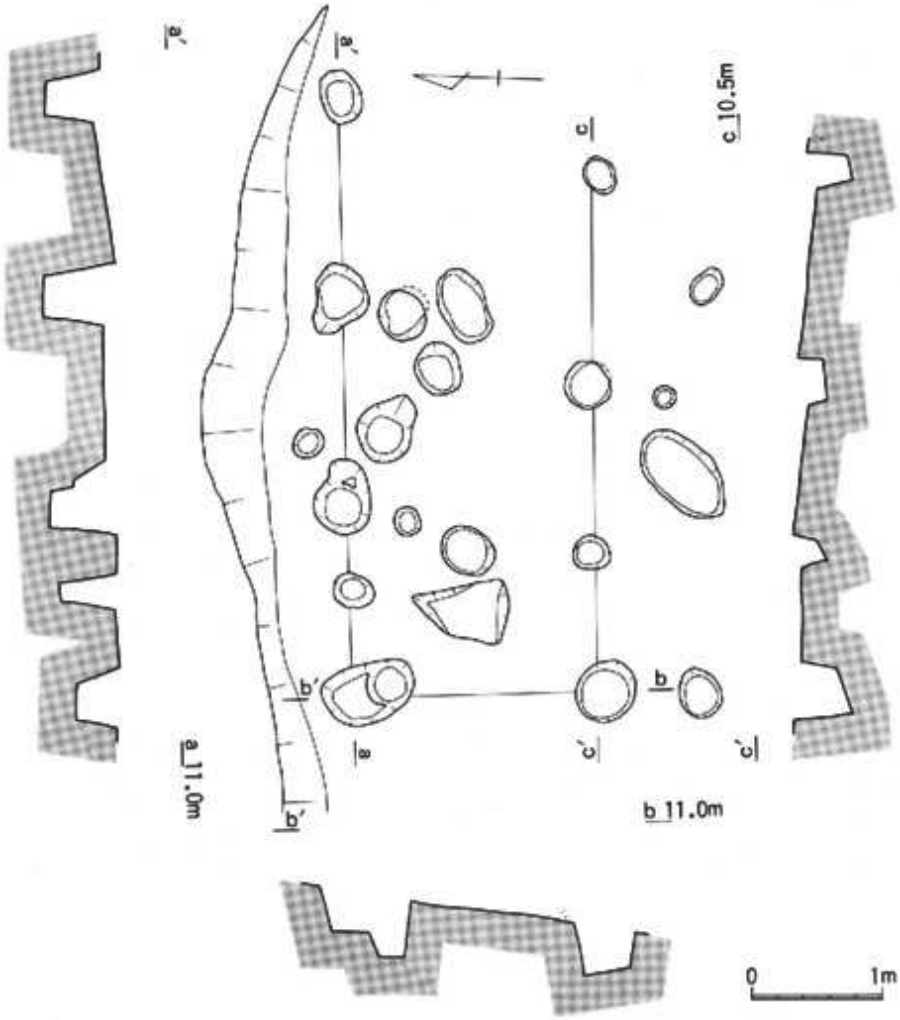
第52図　第Ⅲ調査区第７加工段出土遺物実測図(2)

土師器の甕片が出土した。P_8は，平面形が不整楕円形で長軸54cm，短軸40cm，深さ52cmを測る。P_9は平面形が長軸40cm，短軸32cmの不整楕円形で，深さ40cmを測る。

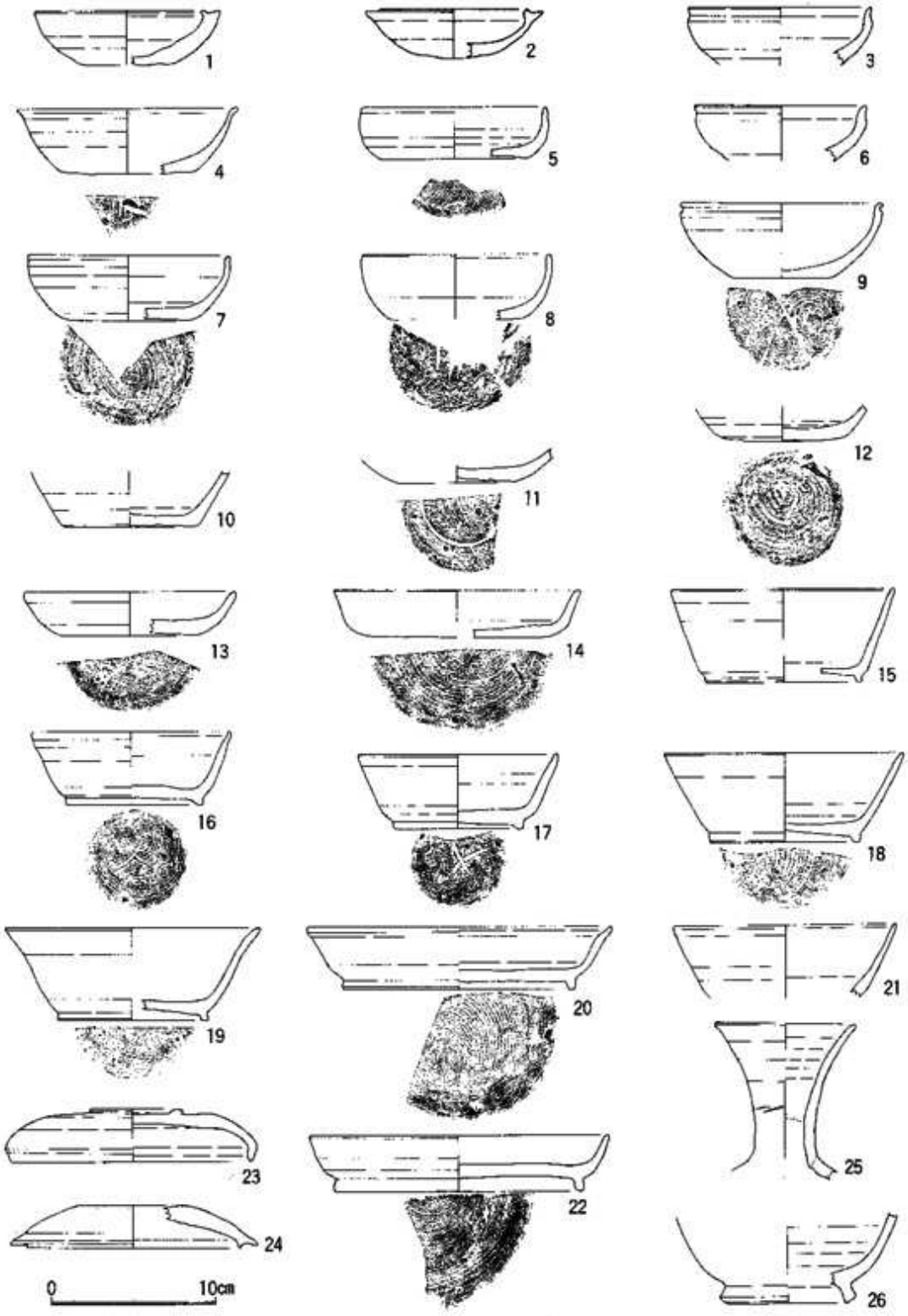
SB24出土遺物（第55図８，10）　８，10は土師器の甕で，口縁部が「く」の字状に大きく外反するものである。口縁部内・外面にヨコナデ，内面頸以下ヘラ削りを施す。

第８加工段・出土遺物　第８加工段は表土下の褐色土下層に赤褐色土層（第18図２層）が堆積しており，その下に地山面があった。褐色土および赤褐色土から多数の遺物が出土した。

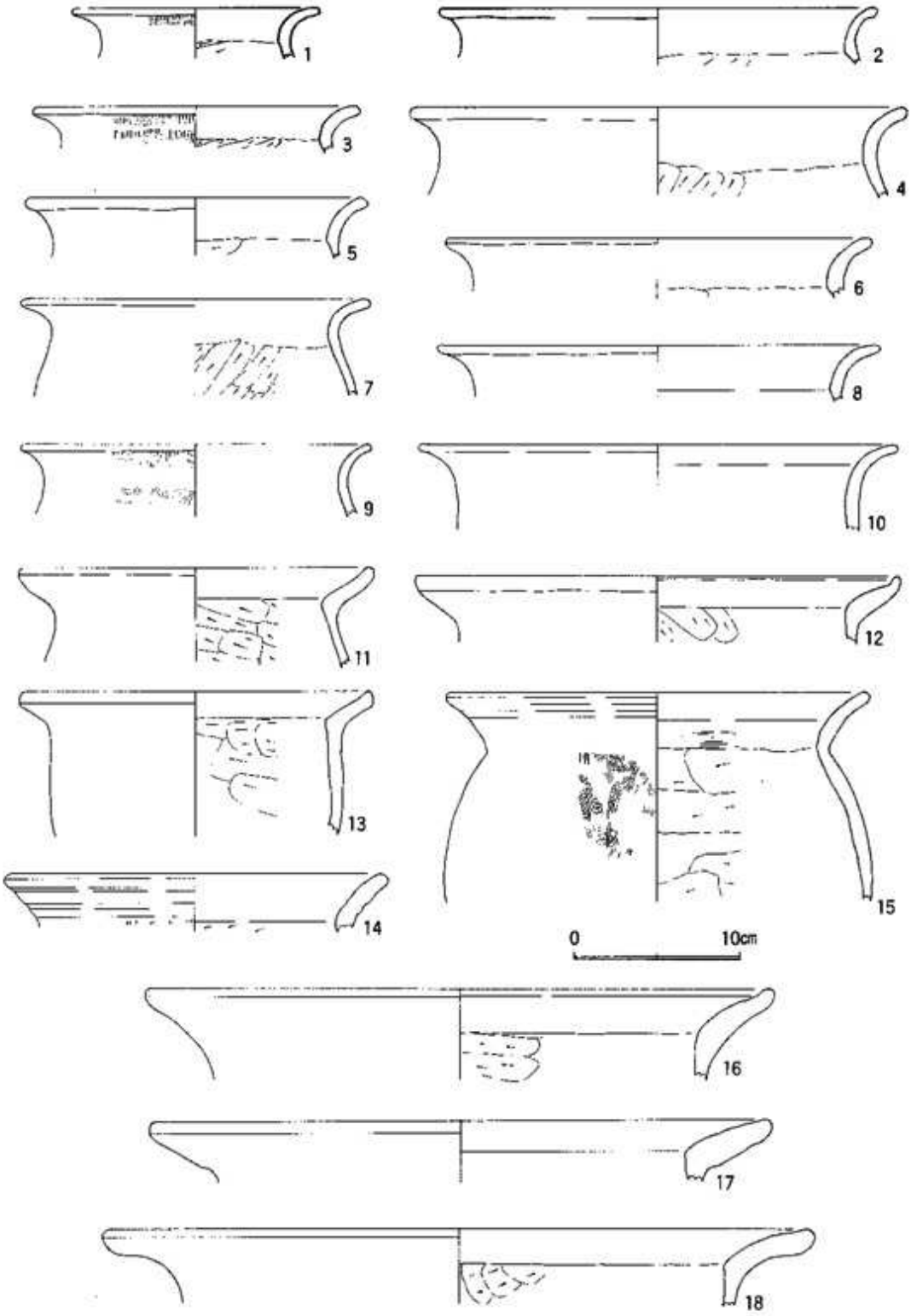
赤褐色土層出土遺物（第54図１，６，８，10，11，19，23，26，第55図２，５，11，12～14，16～18，第56図３，10，第57図２，３）　54－１，６，８，10，11は須恵器の坏である。１は坏体部が丸く緩や



第53図　第Ⅲ調査区SB24実測図



第54図　第Ⅲ調査区第８加工段出土遺物実測図(1)



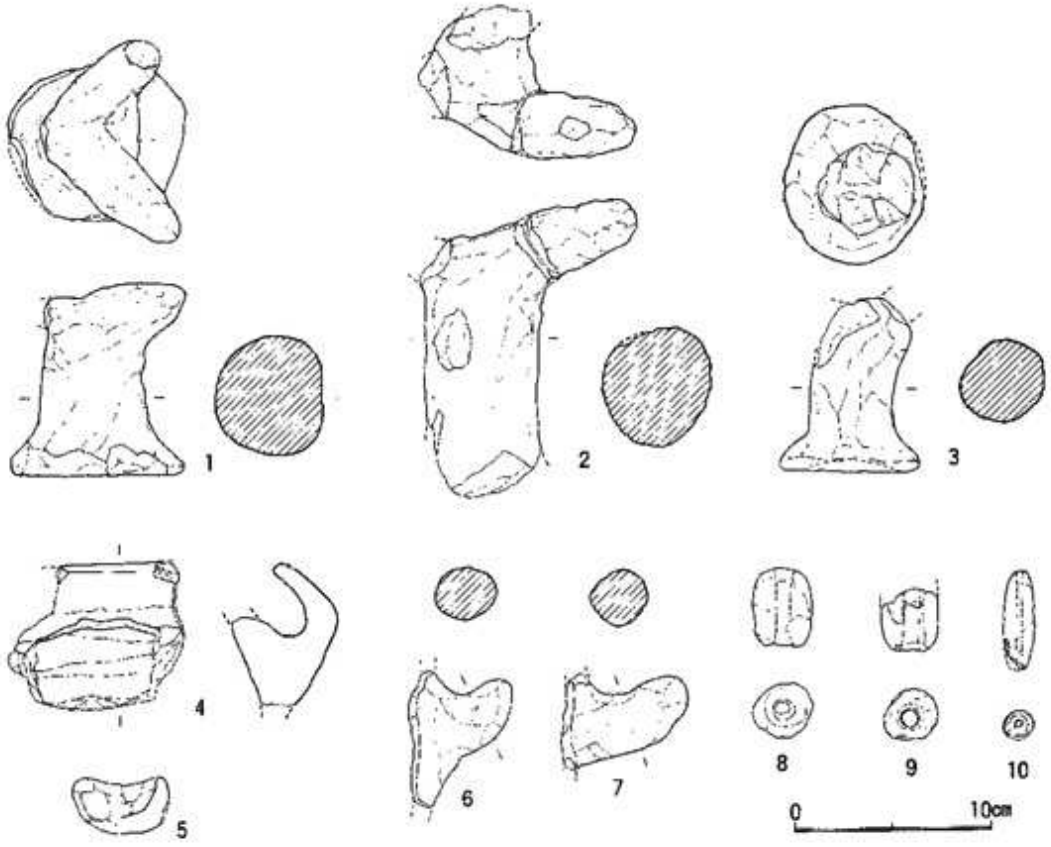
第55図　第Ⅲ調査区第８加工段出土遺物実測図(2)

かに立ち上がり受部に至る。口縁部のたちあがりは非常に短く，端部が丸い。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。6，8，11は坏体部が内湾気味に，10，19は比較的直線的に立ち上がるもので，8は口縁端部が「く」の字状に短く外反する。底部外面は8がナデ，11が静止糸切り後ナデ，19が回転糸切り未調整である。54－23は坏蓋で，天井部が内湾気味に伸びた後，縁端部が内側へ直立する。天井部外面に輪状の低いつまみを付け，周辺に回転ヘラ削り調整を施す。54－26は長頸壺の底部と思われ，高さ1.1cmばかりの高台が付いている。体部内外面に回転ナデを施す。

55－2，5，11～14，16～18は土師器の壺・甕で，口縁部が「く」の字状に緩やかに外反するもの（2，5）と，外方へ大きく開くもの（11～14，16～18）とがある。外面はナデおよびハケ目，内面頸部以下はヘラ削りを施す。56－3は残存高8.9cmを測る小形の土製支脚である。外面底部は上げ底を呈し，ヘラ状工具およびナデ調整により成形する。

56－10は長さ5.2cmを測る砲弾形土錘の大形品で，表面にナデ調整を施す。

57－2，3は平瓦で，凸面にそれぞれ目の大きい斜格子叩き，縄目叩きを施す。3は凹面に糸切り痕を残す。



第56図　第Ⅲ調査区第8加工段出土遺物実測図(3)

須恵器の54－1は陶邑TK217（古）型式併行期の山陰須恵器編年Ⅳ期，54－23は出雲国庁編年第3形式，54－6，8，10，11は出雲国庁編年第4形式，54－19は出雲国庁編年第5形式であり，7世紀初めから9世紀前半までのものが混在する。これと供伴する土師器も同様の時期幅が考えられるが，時期的に分類することは困難である。このため，土師器しか出土していないSB24も，その時期を明らかにすることはできないが，9世紀前半を下るものではないものと思われる。

その他の遺物（第54図2～5，7，9，12～18，20～22，24，25，第55図1，3，4，6，7，9，15，第56図1，2，4～9，第57図1，4）　表土下に堆積した褐色土層からも遺物が出土している。

第54図2～5，7，9，12，15～18，21は須恵器の坏である。54－2は口縁部が内傾して立ち上がり，底部外面はヘラ切り後ナデを施している。54－3～5，7，9，12は底部外面に高台が付かないもので，底部が残る坏の外面は全て回転糸切り未調整である。54－9の口縁端部外面には一条の沈線をめぐらしている。15～18は高台が付き，坏体部が斜め外方へ直線的に立ち上がるもので，20も同様の形態を示すものと思われる。いずれも，底部外面は回転糸切り未調整である。皿も高台の付かないものと（54－13，14）と，高台の付くもの（20，22）があり，口径は前者が15cm前後，後者が18.5cm前後を測る。底部は回転糸切り未調整である。54－24は坏蓋で縁端部にかえりが付き，径12.8cmを測る。54－25長頸壺では頸部中ほどに一条のヘラ描き沈線がめぐる。

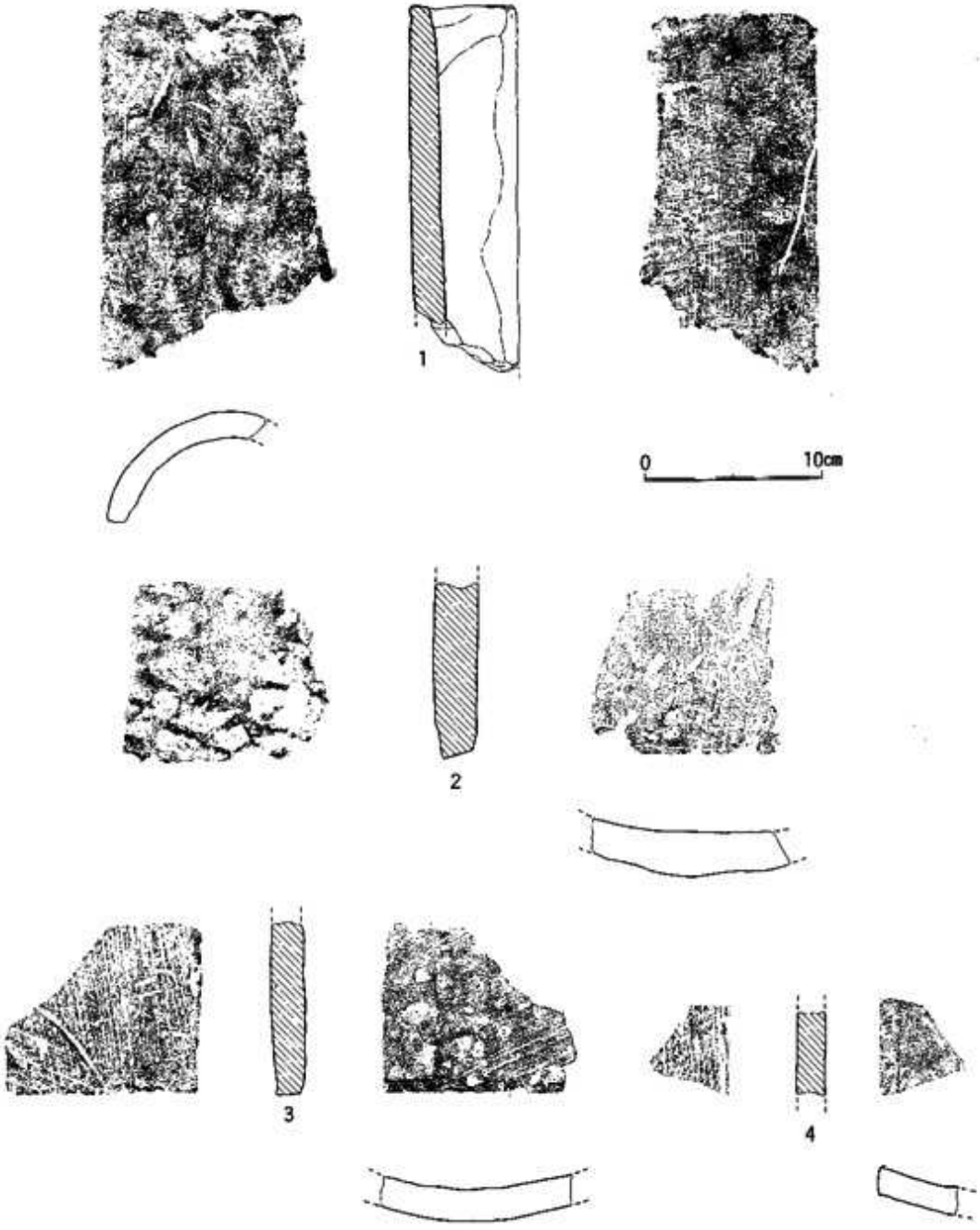
第55図1，3，4，6，7，9，15は土師器に甕で，口縁部が「く」の字状に外反する。外面はナデおよびハケ目，外面頸部以下ヘラ削りを施す。土製支脚は高さ9.95cmを測る小形品（56－1）と残存高15.4cmを測る大形品（56－2）とがある。両者とも三又突起で，ヘラ削りとナデにより成形する。56－4は竈の掛口部から庇部で，ナデないしヘラ削りを施す。56－5は手捏土器で，口径4cm，器高2.9cmを測る。56－6，7は把手部で，7の外面には赤色顔料が付着する。56－8，9は円筒形の土錘で，指頭によるナデ調整を施す。

57－1は行基式の丸瓦で，凸面にナデ調整を行い，凹面には布目痕が残る。57－2は平瓦で，凸面に縄目叩きを施し，凹面には布目痕が残る。

須恵器は，54－2が陶邑TK217（古）型式併行期の山陰須恵器編年Ⅳ期，54－3～5，7，9，12，13，14，16，17，22が出雲国庁編年第4形式，54－15，18，20が出雲国庁編年第5形式である。54－24は天井部外面に糸切り痕を伴わないため出雲国庁編年第2形式であると思われる。

(9)　第9加工段

第9加工段は，第6加工段の北側に隣接し，東斜面の地山を削って平坦面を作り出していた。壁の高さは最大で20cm程度であった。平坦面は約4×5mの範囲であるが，北側は調査区外に続いており，全体の規模はもっと大きいと思われる。この加工段からは掘立柱建物跡SB11が1棟検出された。



第57図　第Ⅲ調査区第８加工段出土遺物実測図(4)

SB11（第58図）

P_1からP_6の６個の柱穴が検出された。柱間寸法はP_1～P_2が32cm，P_2～P_3が104cm，P_3～P_4が194cm，P_4～P_5が172cm，P_5～P_6が106cmを測る。東側桁行の残存長は，P_1～P_3の136cmであり，西側桁行の残存長はP_4～P_6の278cmである。南側梁間の残存長はP_3～P_4の194cmで，北側は欠落している。建物の主軸方位はN－10°－Wである。P_1は，平面形が円形で直径42cm，深さ24cmを測る。P_2は，平面形が不整円形で直径20cm，深さ21cmを測る。P_3は，平面形が不整楕円形で長軸32cm，短軸28cm，深さ６cmを測る。P_4は，平面形が不整楕円形で長軸36cm，短軸30cm，深さ12cmを測る。底面西部には，直径16cm，深さ４cmのピットが穿たれていた。P_5は，平面形が不整楕円形で長軸36cm，短軸24cm，深さ24cmを測る。P_6は，長軸32cm，短軸28cmの不整楕円形を平面形に持ち，深さ28cmを測る。

第９加工段出土遺物　第９加工段は表土下の褐色土下層に黒褐色土層が堆積しており，その下に地山面があった。

SB11覆土・黒褐色土層出土遺物（第63図１～３，20）　１～３は須恵器の坏蓋である。１は天井部が内湾気味に伸びた後，縁端部が直立し，天井部全体にに回転ヘラ削り調整を施す。２，３はヘラ切り後ナデを施し，天井部外面に断面三角形を呈する輪状つまみを付ける。

20は不整な球状を呈する土玉で，長さ2.6cmを測る。表面に指頭によるナデ調整を施す。

須恵器は出雲国庁編年第２形式であり，７世紀末～８世紀前葉のものと思われる。黒褐色土層の出土遺物は時期的にまとまっており，SB11の時期もこの時期かそれよりも若干遡る程度のものと判断される。

⑽　第10加工段

第10加工段は，丘陵東斜面北東端に位置し，第８加工段の北側に隣接する。標高９～12mの緩斜面で，約７×21mの規模を持つ。ここからSB20～23の４棟の掘立柱建物が検出された。このうち，SB20，SB21は，地山面を削って壁を作り出しており，奥壁の残存高は，最大で60cmを測る。

SB20（第59図）

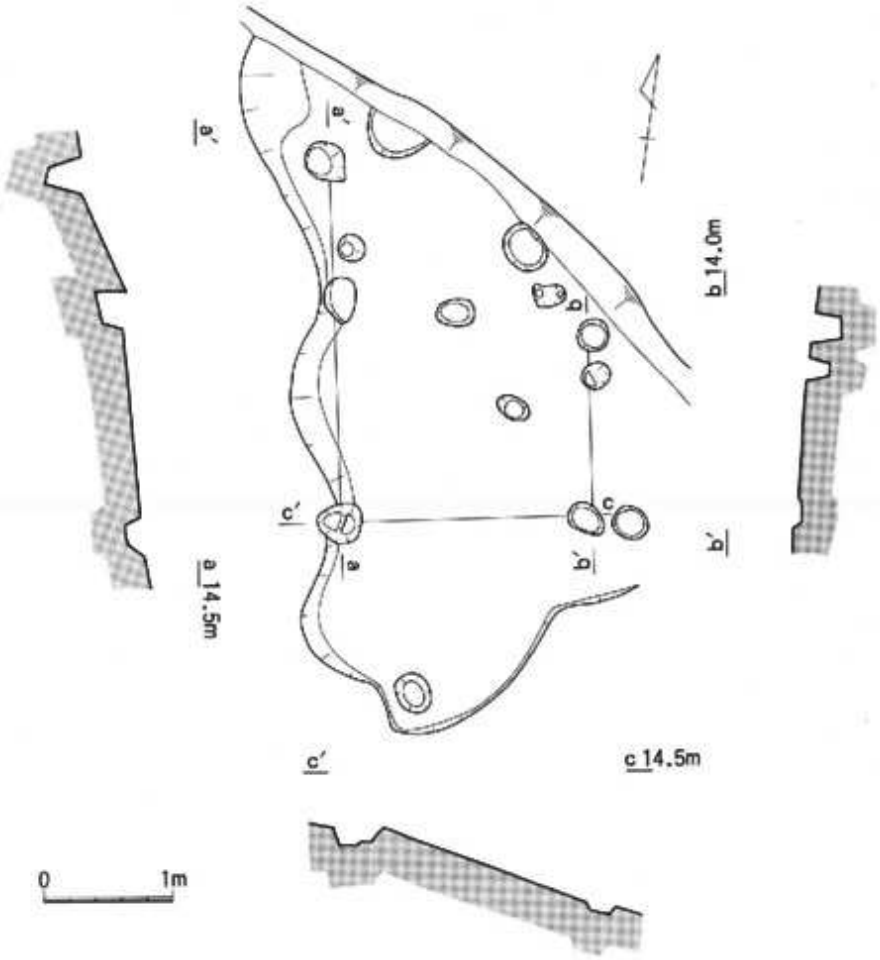
P_1からP_5の５個の柱穴が検出された。柱間寸法はP_1～P_2が164cm，P_2～P_3が284cm，P_3～P_4が254cm，P_4～P_5が60cmを測る。このうち，P_4は，規模・柱間寸法から，P_5の補助的な柱穴であると思われる。桁行残存長P_1～P_5は762cmを測り，比較的規模の大きな建物であったと思われるが，斜面下側の南東部が欠落しており，全体の規模は把握できない。建物の主軸方位はN－51°－Eである。P_1は，平面形が不整楕円形で長軸52cm，短軸48cm，深さ16cmを測る。P_2は，平面形が不整方形で１辺が44cmを測り，深さは64cmを測る。P_3は，平面形が長軸92cm，短軸52cm，深さ56cmを測る。P_4は，平面形が円形で直径24cm，深さ12cmを測る。P_5は，平面形が不整楕円形で長軸56cm，短軸48cm，深さ52cmを測る。

SB21（第60図）

SB20の南に重複する形で検出された。ここではP_1からP_3の３個の柱穴を確認した。柱間寸法は，北側桁行残存長P_1～P_2が，320cm，東側梁間残存長P_2～P_3が，292cmを測る。南西部は欠落しており，建物の規模は不明である。建物の主軸方位は，N－52°－Eである。P_1は，平面形が不整円形で直径56cm，深さ40cmを測る。P_2は，平面形が不整楕円形で長軸56cm，短軸44cm，深さ36cmを測る。P_3は平面形が不整円形で直径48cm，深さ16cmを測る。

SB22（第61図）

第10加工段の最も西側から検出され，P_1からP_4の４個の柱穴を確認した。柱間寸法は，P_1～P_2が192cm，P_2～P_3が124cm，P_3～P_4が48cmを測る。北側桁行残存長P_1～P_3が316cm，東側梁間残存長

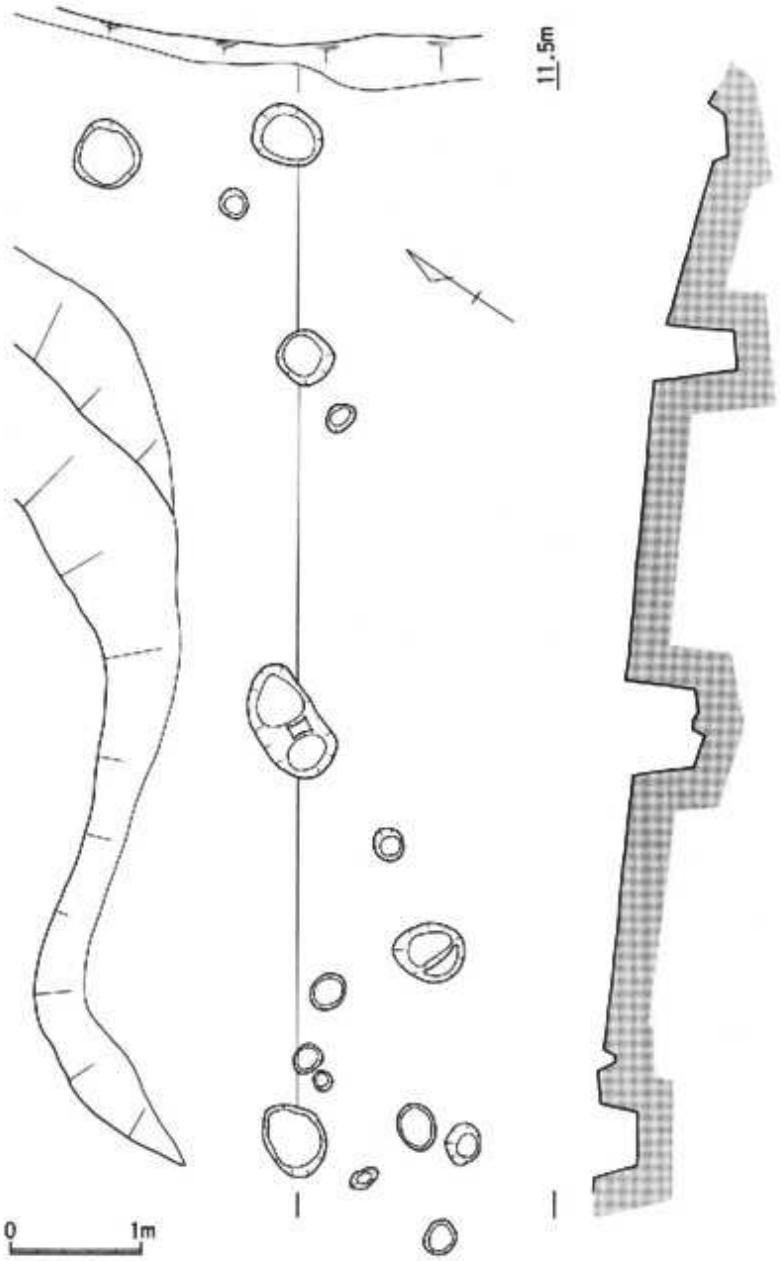


第58図　第Ⅲ調査区SB11実測図

P_3～P_4は48cmで，南西部分が欠落しており，建物の規模は不明である。主軸方位は，N－49°－Eである。P_1は平面形が不整楕円形で，長軸56cm，短軸36cm，深さ28cmを測る。P_2は，平面形が不整円形で直径56cm，深さ20cmを測る。P_3は，平面形が不整円形で直径36cm，深さ44cmを測る。P_4は，平面形が不整円形で直径が36cm，深さ40cmを測る。

SB23（第62図）

SB22の南東側に重複する形で検出された。ここからは，P_1からP_7の7個の柱穴を検出した。柱間寸法は，P_1～P_2が46cm，P_2～P_3が84cm，P_3～P_4が60cm，P_4～P_5が60cm，P_5～P_6が94cm，P_6～P_7が98cmを測り，柱間は比較的狭い。北側桁行P_3～P_7は312cm，東側梁間P_1～P_3は130cmを測る。建物南東部は欠落しており，建物の規模は不明である。主軸方位はN－41°－Eであった。P_1は平面形

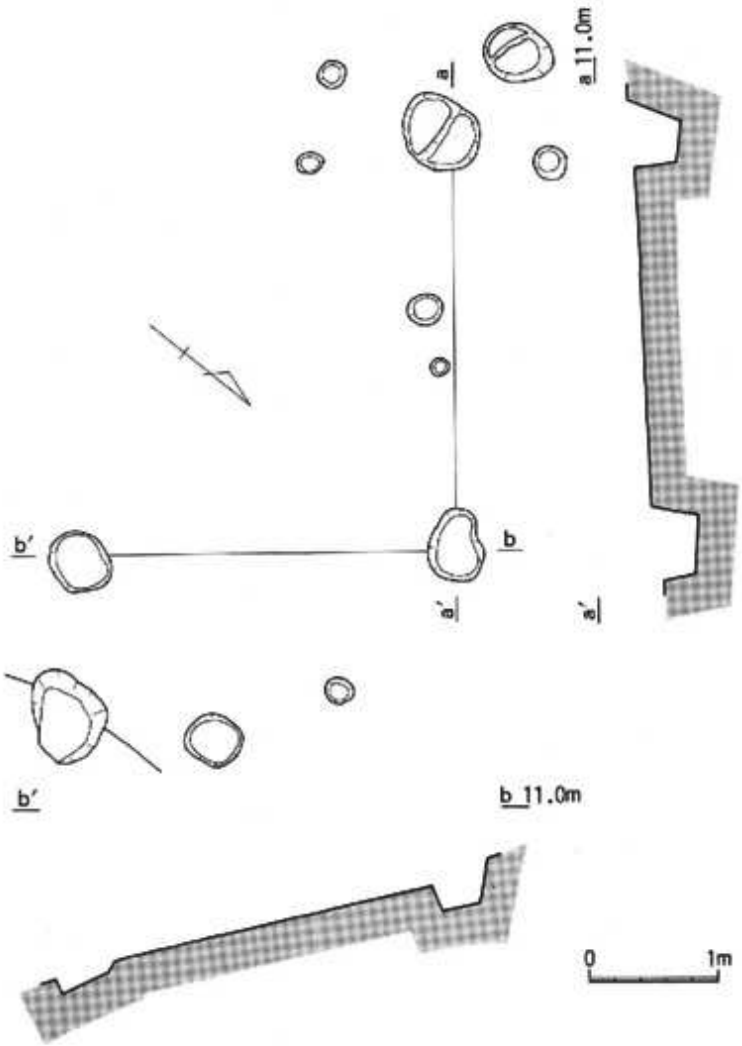


第59図　第Ⅲ調査区SB20実測図

が不整円形で直径が20cm，深さ20cmを測る。P_2は平面形が円形で直径16cm，深さ12cmを測る。P_3は，平面形が不整楕円形で長軸48cm，短軸36cm，深さ40cmを測る。P_4は，平面形が不整円形で直径32cm，深さ28cmを測る。P_5は平面形が長円形で，長軸52cm，短軸28cm，深さ28cmを測る。P_6は平面形が不整円形で直径36cm，深さ37cmを測る。P_7は，平面形が不整円形で直径が36cm，深さ8cmを測る。

第10加工段出土遺物　第10加工段は掘立柱建物跡に伴わない柱穴や，表土下の褐色土層から遺物が出土した。

SP382出土遺物（第63図11）　11は須恵器の坏で，高さ1.6cmの外方へ広がる高台が付く。坏体部



第60図　第Ⅲ調査区SB21実測図

は内湾気味に立ち上がり，外面底部にナデを施す。出雲国庁編年第１形式である。

SP385出土遺物（第63図７）　７は須恵器の坏で，底部に回転糸切り痕が残る。出雲国庁編年第４形式である。

SP385出土遺物（第63図13）　13は体部が斜め上方へ直線的に伸びる須恵器の坏である。

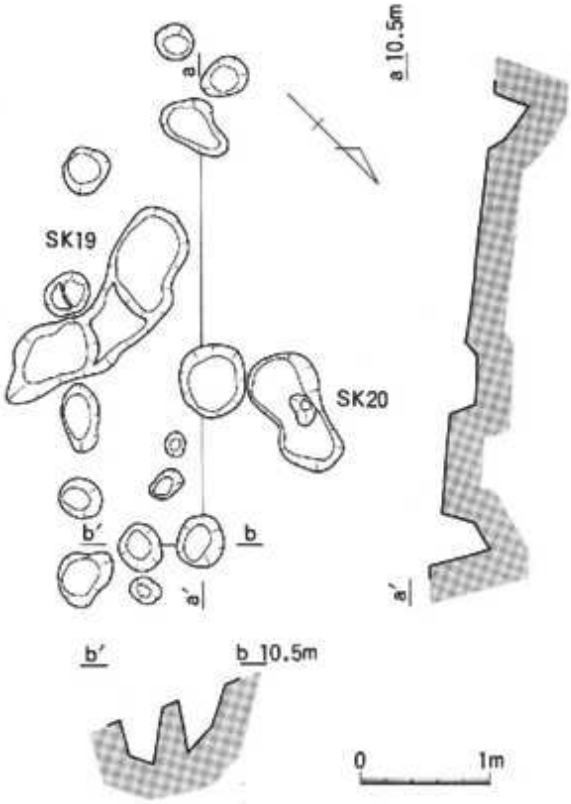
褐色土出土遺物（第63図４～６，８～10，12，14～19，21～23）

須恵器の坏は高台の付かないもの（４，５，８）と，付くもの（10，12，14，15）がある。高台の付かない坏は体部が内湾気味に立ち上がっており，５は端部がわずかに外反する。いずれも底部外面は回転糸切り未調整である。高台の付く坏では，体部が直線的に立ち上がるもの（14）と，内湾気味に立ち上がるもの（10，12，15）とがある。底部外面は，12はナデ調整，その他は回転糸切り痕が残る。皿も高台の付かないもの（９）と，付くもの（16）があり，底部は回転糸切り未調整である。６は坏蓋で，天井部外面に宝珠状のつまみを付け，その周辺に回転ヘラ削りを施す。17は高坏で内・外面にナデもしくは回転ナデ調整を施す。18は長頸壺の口縁部で，外面に二条のヘラ描き沈線がめぐる。

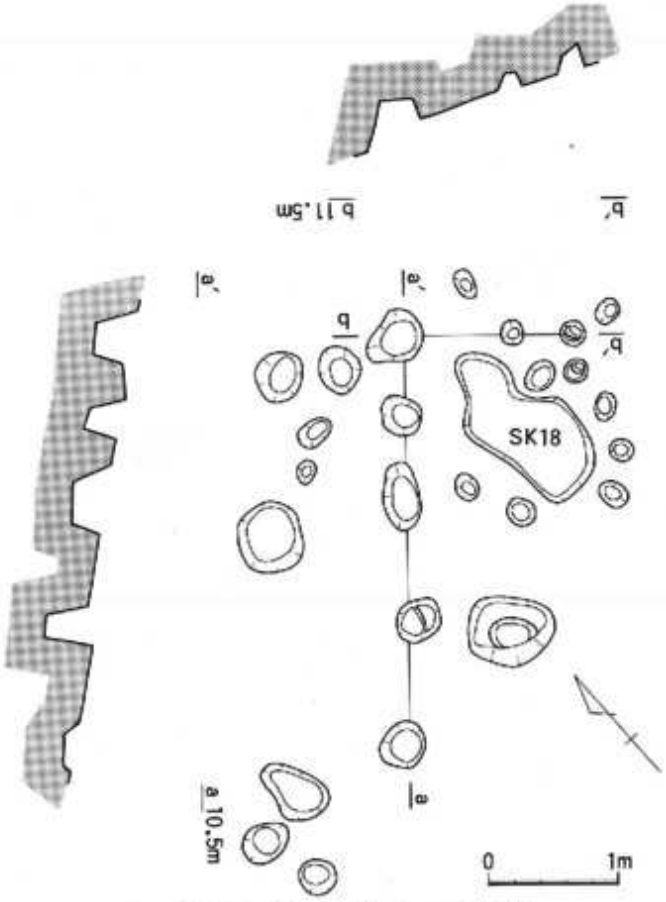
19は土師器の竈で，底部から炊口部にかけて残存する。底端部はヘラ状工具で面取りを行い，その他の部分には強いナデ調整を施す。21，22は砲弾形土錘の大形品で，表面にナデ調整を施す。

23は行基式の丸瓦で，凸面にナデ調整を施し，凹面には布目痕が残る。焼成は良好である。

上記の須恵器のうち，時期の判断が難しい17，18以外は，概ね出雲国庁編年第４形式であり，８世紀中葉～後半のものと思われる。このため，第10加工段のSB20～23も，これとほぼ同時期か幾分遡るものと考えられる。



第61図　第Ⅲ調査区SB22実測図



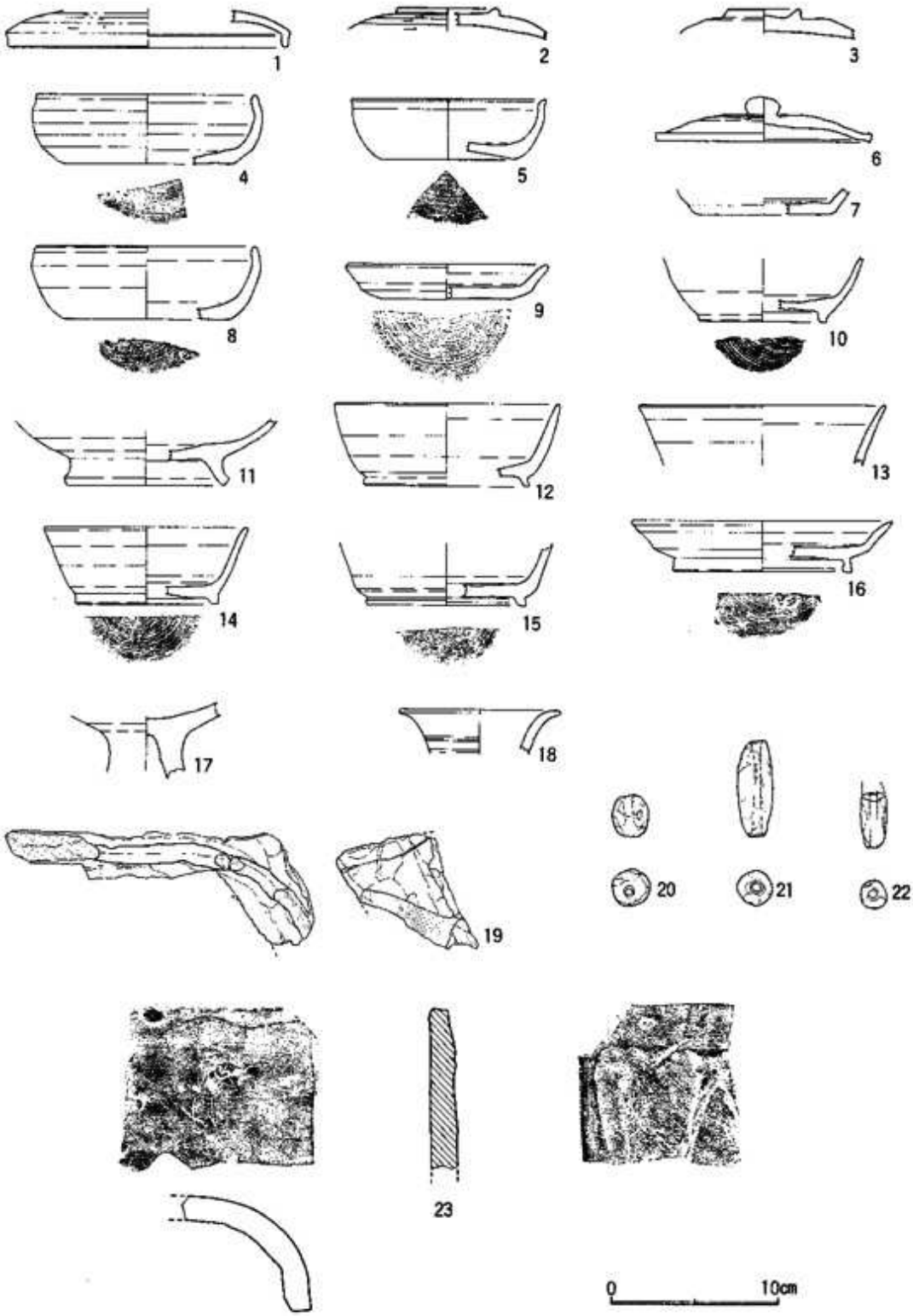
第62図　第Ⅲ調査区SB23実測図

註

(1)　火を受けた痕跡がなく潰れたような出土状況の竈は鳥取県鳥取市秋里遺跡〔「秋里遺跡」財団法人　鳥取県教育文化財団1990年〕のSK66（古墳時代末）などでもみられる。祭祀の内容として推測できる例としては，鍛冶関係の祭祀（岡山県総社市窪木薬師遺跡）や海上交通の祭祀（岡山県笠岡市大飛島遺跡）などが考えられるようである。〔亀田修一「中・四国地方のカマド」『第32回埋蔵文化財研究集会　古墳時代の竈を考える』発表要旨　埋蔵文化財研究会1992年を参考とした。〕

第２表　第Ⅲ調査区掘立柱建物跡一覧表

遺構名	加工段	PIT数	長軸	短軸	軸方位	挿図番号	時期
SB01	第1加工段	2	260	―	N－72°－E	29	8世紀中葉～後半
SB02	第2加工段	4	400	―	N－32°－W	30	9世紀前半？
SB03	第2加工段	4	240	―	N－68°－E	30	9世紀前半？
SB04	第2加工段	8	376	144	N－77°－W	31	9世紀前半？
SB05	第2加工段	6	610	280	N－84°－W	32	9世紀前半？
SB06	第3加工段	4	460	236	N－18°－W	34	8世紀中葉～後半
SB07	第3加工段	6	364	134	N－21°－W	35	8世紀中葉～後半
SB08	第3加工段	5	444	160	N－25°－W	36	8世紀中葉～後半
SB09	第3加工段	4	330	―	N－69°－W	37	8世紀中葉～後半
SB10	第5加工段	8	540	176	N－67°－E	40	8世紀後半？
SB11	第9加工段	6	278	194	N－10°－W	58	7世紀末～8世紀前葉
SB12	第6加工段	7	394	154	N－17°－W	41	9世紀前半？
SB13	第6加工段	5	250	240	N－64°－E	42	9世紀前半？
SB14	第6加工段	4	390	214	N－76°－E	42	9世紀前半？
SB15	第6加工段	5	496	―	N－83°－E	43	9世紀前半？
SB16	第7加工段	4	332	122	N－80°－E	45	8世紀後半～9世紀前半？
SB17	第7加工段	5	396	―	N－84°－E	46	8世紀後半～9世紀前半？
SB18	第7加工段	6	758	300	N－77°－E	47	8世紀後半～9世紀前半？
SB19	第7加工段	6	380	306	N－76°－E	48	8世紀後半～9世紀前半？
SB20	第10加工段	5	762	―	N－51°－E	59	8世紀中葉～後半
SB21	第10加工段	3	320	292	N－50°－E	60	8世紀中葉～後半
SB22	第10加工段	4	316	48	N－49°－E	61	8世紀中葉～後半
SB23	第10加工段	7	312	130	N－41°－E	62	8世紀中葉～後半
SB24	第8加工段	9	456	186	N－87°－E	53	9世紀前半
SB25	第3加工段	4	478	―	N－18°－W	38	7世紀末～8世紀前葉
SB26	第7加工段	5	448	80	N－77°－E	49	7世紀末～8世紀後半
SB27	第7加工段	6	558	56	N－87°－W	50	7世紀末～8世紀後半



第63図　第Ⅲ調査区第９・第10加工段出土遺物実測図

V　自然科学分析

オノ峠遺跡遺跡出土遺物年代測定結果

オノ峠遺跡第Ⅰ調査区黒色粘土層（第３図１層）出土の流木片と第ⅡＢ調査区白色粘土層（第４図７層）出土の杉の木を，土層の年代を知る手がかりとするため，Ｃ－14年代測定を社団法人日本アイソトープ協会に委託して行った。

測定に結果は下記のとおりであるが，年代は14Ｃの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され，西暦1950年よりさかのぼる年数（yearsB.P.）として示されている。付記された年代誤差は，放射線計数の統計誤差と計数管のガス封入圧力および温度の読みとりの誤差から計算されたもので，14Ｃ年代がこの範囲に含まれる確率は約70％である。この範囲を２倍に拡げると確率は95％となる。

オノ峠遺跡第Ⅰ調査区 黒色粘土層出土試料	2840±90yB.P.(2760±85yB.P.)
オノ峠遺跡第ⅡＢ調査区 白色粘土層出土試料	3130±90yB.P.(3040±85yB.P.)

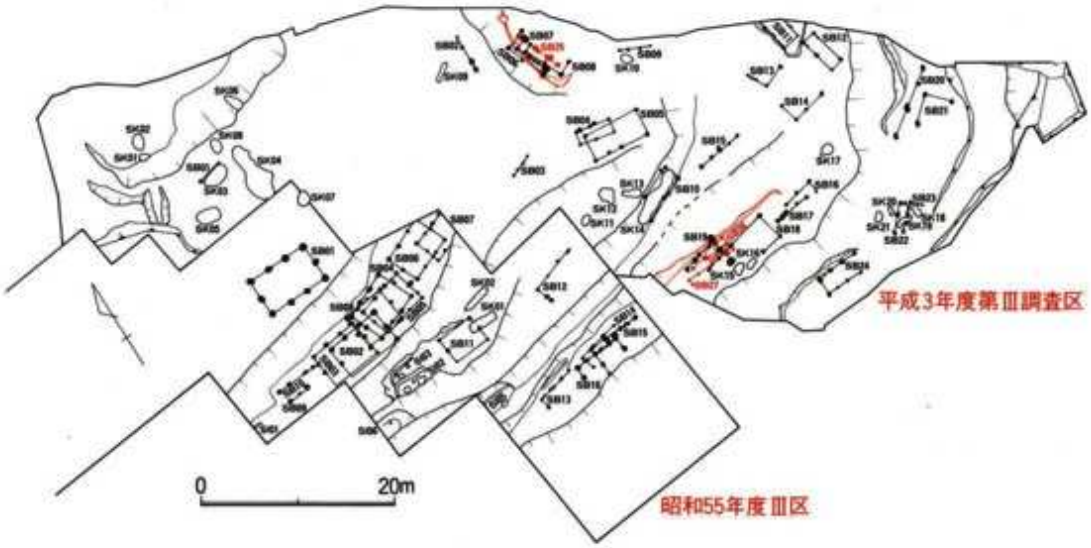
上記の結果から，測定試料は縄文時代後期末～晩期初頭のものと考えられる。昭和55年度の本遺跡調査でもⅠ区西端の青灰色砂質土層から多くの流木と早期末～後期初頭にかけての縄文土器が出土しており，水田部全体に縄文時代の層が堆積していた可能性も考えられる。

Ⅵ　ま　と　め

才ノ峠遺跡では，標高25mの丘陵部とその東側の水田部から，多数の遺構・遺物が検出された。丘陵部と水田部の比高差は，約20mである。

丘陵部では北側斜面と東側斜面から10の加工段とそれに伴う27棟の掘立柱建物跡，土壙などが検出され，かなり大規模な集落が営まれていたことがわかった。これらの掘立柱建物は，自然地形を生かしながら丘陵斜面を加工し，平坦面を作り出した後に建てられている。各加工段からは，1～6棟の掘立柱建物跡が検出されており，これらの加工段がかなり計画的に作られていた可能性が高い。加工段は，前回調査の際に検出された加工段の位置とほぼ合致し[1]（第64図），今回の調査結果と考え合わせると，本遺跡では丘陵斜面を概ね60～80mの幅で平坦面を造成し，40棟以上の掘立柱建物跡が建っていたと推察される。加工段平坦面は谷側が欠損しているものが多く，残存する掘立柱建物跡の規模は1間×2間，1間×3間のものがほとんどである。このため全容を確認できる建物はSB04，SB05，SB12の3棟しかなく，これらの建物の平均的な規模を断定することはできない。建物の多くは出土遺物から考えて7世紀末頃～9世紀前半のものと思われ，特に8世紀中葉～後半を中心として集落は営まれていたようである。

同時代の集落跡には隠岐郡西郷町尼寺原遺跡[2]や益田市大溢遺跡[3]，松江市中竹矢遺跡[4]，同鷹沢A遺



第64図　加工段・掘立柱建物跡遺構合成図(一部改変)

跡,[5] 同イガラビ遺跡,[6] 同古曽志平廻田遺跡,[7] 同久米遺跡,[8] 安来市高広遺跡,[9] 同島山南遺跡,[10] 同越峠遺跡,[11] 同岩屋口遺跡,[12] 同臼コクリ遺跡,[13] 米子市青木遺跡[14]などが知られている。これらの遺跡に見られる加工段は，1棟の建物を建てるために必要な面積の平坦面のみを削り出した例が多く，才ノ峠遺跡はこれらの例と比較して，かなり計画的につくられていた様子が窺える。

こうした集落の在り方の差が，何に起因するかは明かでないが，才ノ峠遺跡が出雲国分寺跡や出雲国庁跡などの政治的中枢に近いといった地理的要因にあるのかもしれない。すなわち，才ノ峠遺跡が出雲国分寺跡の中軸線を真北に400m延長したライン上に位置し，出雲国分寺跡・国分尼寺跡と同文の軒平瓦や木簡，墨書須恵器，陶硯といった寺院・官衙的性格の強い遺物が出土していることなどが，両寺や国庁との深い関係を窺わせ，本遺跡が公的な寺院や役所に関係した人々の集落であった可能性が考えられる。そうした場合，そこで働く多数の人々が住むためのスペースが必要となり，限られた範囲をできるだけ有効に使用するには，必然的に計画性を持った住宅作りを行わざるを得なかったのではないだろうか。

また，才ノ峠遺跡の出土遺物で特徴的なのは，竈，手捏土器，土玉，土錘，土馬といった祭祀関係遺物が多いという点である。これらは他の遺物と同様に第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ調査区全域にわたり出土したが，特に第Ⅱ－A・B調査区と住居が多数検出された第Ⅲ調査区に多く認められた。このことから，本遺跡は集落跡であるとともに，祭祀遺跡としての色彩も強く，掘立柱建物跡の中にはこうした祭祀的行為に使用する目的で建てられたものも含まれていると考えられる。特に第Ⅲ調査区西北斜面で検出されたSB01は，SK03の覆屋であったと考えられ，遺物等の状況から祭祀的行為に使用された建物であった可能性が高い。

一方，祭祀関係遺物以外では，日常生活で使用されたと思われる須恵器の坏，蓋，皿や土師器の甕，土製支脚などが多く出土している。これらの遺物の時期は7世紀代から9世紀代にわたると考えられ，才ノ峠遺跡の集落がかなり長期間にわたって営まれていたことを示している。

さらに，前回調査で窯壁が発見されており，周辺に窯跡が存在する可能性も考えられる。才ノ峠遺跡の東約500mに位置する中竹矢遺跡からは両寺の瓦を焼いた瓦窯跡が発見されており，[15] 本遺跡と出雲国分寺跡の位置関係を考えれば，周辺に別の瓦窯跡が存在していても不思議はないものと思われる。

この他，第Ⅰ・Ⅱ調査区の水田部から遺構は検出されなかったが，大きく2層に分かれる遺物包含層の下層から6世紀後半から9世紀前半の遺物が出土し，上層からは11世紀後半から17世紀頃の遺物が出土した。かつては湖沼であったと思われるこの地に，投棄などの行為により古代から近世にかけての遺物が長い年月をかけて混入していったものであろう。

以上のことから，才ノ峠遺跡の性格ついては，集落遺跡であるとともに祭祀遺跡であること，出

雲国分寺跡と深い関わりを持つ可能性が高いこと，窯跡が近くに存在した可能性があることなどが挙げられる。先述の中竹矢遺跡からも９世紀後半頃の掘立柱建物跡が検出されているが，祭祀関連遺物は出土しておらず，意宇平野周辺の古代集落遺跡の中では，特異な存在と言える。ただ，集落の規模からして，８世紀中葉～後半にかけては間違いなくこの地域の拠点となる集落であったと考えられ，見方をかえればこうした拠点集落を中心に大がかりな祭祀行為が行われていたのかもしれない。

いずれにしろ，意宇平野周辺にはまだまだ多くの古代集落遺跡が存在すると考えられ，今後これら遺跡の調査が進めば，上記の問題点も徐々に明らかになっていくものと思われる。

註

（1）「国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」 島根県教育委員会　1983年
（2）松本岩雄 「隠岐国府について」『島前の文化財第10号』 隠岐島前教育委員会　1980年
（3）「石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報Ⅱ」 島根県教育委員会　1983年
（4）「一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ（中竹矢遺跡）」 島根県教育委員会　1992年
（5）「鳶沢Ａ遺跡・鳶沢Ｂ遺跡・別所遺跡」 松江市教育委員会　1988年
（6）「釜田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥Ｃ，Ｄ遺跡・池ノ奥Ａ遺跡・池ノ奥窯跡群」 松江市教育委員会　1990年
（7）「古曽志遺跡群発掘調査報告書」 島根県教育委員会　1989年
（8）松江市教育委員会文化課　岡崎雄二郎氏の御教示を得た。
（9）「高広遺跡発掘調査報告書」 島根県教育委員会　1984年
（10）「一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ（島田南遺跡）」 島根県教育委員会　1992年
（11）「一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査概報（臼コクリ遺跡，岩屋口遺跡，越峠遺跡）」 島根県教育委員会　1992年
（12）註11に同じ
（13）註11に同じ
（14）「青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」 鳥取県教育委員会　1976～1978年
（15）註４に同じ

オノ峠遺跡土器観察表

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
5	1	19	ⅠC	黒色粘土	須恵器・坏(身)	7.4	2.8		密	良好	暗灰色	ナデ，回転ナデ底部ヘラオコシ後ナデ
5	2	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	9.4			密 砂粒含む	良	暗灰色	回転糸切り，回転ナデ，ナデ
5	3	19	Ⅰ	褐色土	須恵器・坏	15.8	残 4.0	0.8	砂粒を含む	良好	暗灰色	ヘラ切り，回転ナデ
5	4	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	12.4	3.65	1.1	1㎜以下微粒	良	青灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
5	5	19	ⅡA	黒色粘土	須恵器・坏	11.0	3.9	0.7	密，砂粒僅か	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
5	6	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	13.2	3.6	0.6	砂粒多く含む	良好	暗灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
5	7	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	12.9	3.8	0.8	微砂粒を含む	良好	青灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
5	8	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	11.6	4.2	0.8	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
5	9	19	Ⅰ	黒色粘土	須恵器・坏	15.2	4.6	0.4	細かい砂粒含	やや不良	茶褐色	回転糸切り，回転ナデ
5	10	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏(身)	12.5	4	0.9	微砂粒を含む	良好	青灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
5	11	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	底 10.8	残 5.2	0.5	砂粒多く含む	良好	赤褐色	回転ナデ，ナデ，ヨコナデ
5	12	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	12.8	3.9	0.7	砂粒を含む	やや不良	暗灰色	回転糸切り，回転ナデ，ナデ
5	13	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・皿	14.6	2.3	0.8	微砂粒多し	良好	青灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
5	14	19	Ⅰ	褐色土	須恵器・皿	14.4	1.6	0.5	砂粒多く含む	不良	淡灰色	回転ナデ，ナデ，外面底部調整不明
5	15	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・皿	14	2.3	0.7	砂粒を含む	やや不良	暗灰色	回転ナデ，ナデ，糸切痕
5	16	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・皿	15.4	2.6	1.0	細かい砂粒含	良好	暗灰色	回転糸切り，回転ナデ，ナデ
5	17	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・皿	13.8	2.7	1.0	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
5	18	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・皿	15.4	2.5	0.8	2㎜以下微粒	良	明灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り後ナデ
5	19	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・皿	14.8	2.3	0.7	砂粒を含む	良好	灰色	回転糸切り，回転ナデ，ナデ
5	20	19	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	底 5.8	残 1.6	1.1	細かい砂粒含	良好	明灰色	回転糸切り，回転ナデ，ナデ
6	1	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	12.8	4.3	0.7	細かい砂粒含	良好	暗灰，明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ，ヨコナデ
6	2	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	16.0	5.3	0.5	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
6	3	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	12.8	4.3	0.8	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，回転糸切り後ナデ，ナデ
6	4	20	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	高台 8.6	残 3.3	0.7	砂粒を含む	やや不良	明灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り，ヨコナデ
6	5	21	ⅡB	黒色粘土	須恵器・坏	底 13.4	残 3.9	0.9	砂粒を含まず	不良	淡赤褐色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
6	6	20	ⅠC	黒色粘土	須恵器・坏	底 8.6	4.8		密	良好	灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
6	7	20	ⅠB	黒色粘土	須恵器・坏	高台 6.0	残 3.5	1.0	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ，ヨコナデ
6	8	20	ⅠB	黒色粘土	須恵器・壺	高台 12.4	残 3.5	1.3	2㎜程砂多含	良好	暗灰色	回転ナデ
6	9	20	ⅠB	黒色粘土	須恵器・坏	底 9.6	残 3.1		砂粒多く含む	良好	暗灰色ハイカブリ	回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ，ケズリ
6	10	21	ⅠC	黒色粘土	須恵器・蓋坏(蓋)	7.8	2.9		密	良好	灰色	回転ナデ，ナデ，底ヘラオコシ後ナデ
6	11	21	ⅠC	黒色粘土	須恵器・蓋坏(蓋)	12.0	3.7		密	良好	灰色	回転ヘラケズリ，回転ナデ，ナデ
6	12	20	ⅠB	黒色粘土	須恵器・蓋坏(蓋)	5.3	1.6	0.5	砂粒を含む	良好	暗灰色，明灰色	回転ナデ，ナデ，ヨコナデ
6	13	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・盤	18.6	5.1	0.8	細かい砂粒含	良	暗灰色	回転ナデ，ナデ，ヨコナデ
6	14	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・皿	20.0	3.55	1.1	白色細砂粒含	良	赤褐色灰褐色	ヨコナデ，ナデ，糸切り後ナデ
6	15	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・盤	17.8	3.4	0.9	砂粒多く含む	やや不良	明灰色	回転糸切り，回転ナデ，ナデ，ヨコナデ
6	16	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・皿	19.8	3.1	0.7	1,2㎜程砂含	良	灰白色	回転ナデ，ナデ
6	17	21	Ⅰ	褐色土	須恵器・盤	17.6	残 2.8	0.8	砂粒を含む	やや不良	明灰色	回転ナデ，ナデ，糸切り？
6	18	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・皿	19.6	3.35	0.9	砂粒多く含む	良	灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
6	19	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・皿	20.0	3.95	1.2	1㎜程白砂粒	良	灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
6	20	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・蓋坏(蓋)	13.7	2.15	0.8	密	良好	青灰色	回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ
6	21	21	ⅠA	黒色粘土	須恵器・蓋坏(蓋)	13.2	3.1	0.9	密，砂粒僅か	良好	明灰色	ケズリ後ナデ，回転ナデ，ナデ
6	22	21	ⅠA	黒色粘土	須恵器・蓋坏(蓋)	つまみ 2.5	2.5	1.5	細かい砂粒含	良好	青灰色	ヨコナデ，ヘラケズリ
6	23	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・蓋坏(蓋)	つまみ 2.4	残 1.8	0.8	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ
6	24	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・蓋坏(蓋)	16	残 1.75	0.8	1㎜程砂粒含	良好	青灰色	回転ナデ，ナデ
6	25	21	ⅠB	黒色粘土	須恵器・皿	高台 12.8	残 2.5	0.9	密微砂粒含	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ，ヨコナデ
7	1	22	ⅠB	黒色粘土	須恵器・甕?	18.6	残 3.1	0.8	細かい砂粒含	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ，ヨコナデ
7	2	22	ⅠB	黒色粘土	須恵器・甕	22.2	残 5.7	1.0	2㎜程砂粒含	良好	黒緑，青灰色	回転ナデ，タタキ，灰カブリ自然ユウ
7	3	22	ⅠB	黒色粘土	須恵器・鉢?	21	6	0.6	密　砂粒含む	良	明灰色	回転ナデ
7	4	22	ⅠB	灰黒色粘土	須恵器・壺	10.6	残 3.5	0.7	細砂粒僅か	良好	濃青灰色	回転ナデ
7	5	22	Ⅰ	灰色粘土	須恵器・甕口縁	32.2	残 5.3	1.6	砂粒多く含む	良	赤褐色	回転ナデ
7	6	22	Ⅰ	褐色土	須恵器・壺底部	底 27.4	残 6.6	1.6	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
7	7	22	ⅡB	黒色粘土	須恵器・高坏	残 4.9	残 5.5	0.7	砂粒多く含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ
7	8	22	ⅡB	黒色粘土	須恵器・長頸壺	残 5.1	残 11.3	0.8	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ
7	9	22	Ⅰ	灰色粘土	須恵器・高坏	高 10.2	残 3.3	0.6	細かい砂粒含	やや不良	明灰色	回転ナデ，ヨコナデ，ナデ，スカシ
7	10	22	ⅡB	黒色粘土	須恵器・高坏	底 8.6	残 3.4	0.8	密微か砂粒含	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ
7	11	22	ⅡA	黒色粘土	須恵器・高坏？	脚部 6.4	残 1.9	1.1	砂粒を含む	良	明灰色	ヨコナデ，ナデ，ケズリ
8	1	23	ⅡB	黒色粘土	土師器・甕	14.3	残 3.0	0.8	砂粒多く含む	やや不良	黄褐色	回転ナデ，ケズリ
8	2	23	ⅡB	黒色粘土	土師器・甕		残 10.6		砂粒を含む	やや不良	淡褐色	ナデ
8	3	23	ⅡB	青白色粘土	土師器・土製支脚	6.6 ×6.8	8.0		密	良好	淡橙色	ナデ
8	4	23	ⅡC	黒色粘土	土師器・土製支脚	5.1 ×5.2	残 10.2		1㎜以下微砂	やや不良	黄褐色	ナデ
8	5	23	ⅡB	黒色粘土	土師器・土製支脚	7.5 ×8.0	17.6		1㎜以下微粒	やや不良	灰白色	摩耗
8	6	23	ⅡA	黒色粘土	土師器・土製支脚	4.9 ×5.0	9.5		密白色砂含む	良好	淡黄色	ナデ
8	7	23	Ⅰ	褐色土	土師器・土製支脚	4.6 ×5.3	9.3		密	良好	黄褐色	基部径7.6cm，ヘラケズリ
8	8	23	ⅡB	黒色粘土	土師器・取手	1.9 ×1.6	残 1.9		細かい砂粒含	やや不良	黄褐色	ナデ？：摩耗
8	9	23	ⅡB	黒色粘土	土師器・取手	4.2 ×3.1	残 5.7		砂粒を含む	やや不良	茶褐色	ナデ？：摩耗
8	10	23	Ⅰ	黒色粘土	土師器・取手	3.3 ×4.0	残 5.3		砂粒を含む	やや不良	黄褐色	ナデ？：摩耗，内面ケズリ
8	11	23	ⅡA	黒色粘土	土師器・土製支脚	3.2 ×3.8	残 5.1		砂粒を含む	良	褐色	ナデ？：摩耗
8	12	23	Ⅰ	黒色粘土	土師器・取手	3.5 ×4.0	残 6.9		砂粒を含む	良好	茶褐色	ナデ？：摩耗
8	13	23	ⅡB	黒色粘土	土師器・取手	3.6 ×2.5	残 6.9		砂粒多く含む	やや不良	黄褐色	摩耗
8	14	23	Ⅰ	灰色粘土	土師器・取手	2.8 ×3.6	残 4.6		砂粒を含む	やや不良	黄褐色	摩耗
8	15	24	ⅡB	黒色粘土	土師器・取手	4.7 ×4.7	残 8.6		砂粒を含む	やや不良	淡褐色	摩耗
8	16	24	Ⅰ	黒色粘土	土師器・土製支脚	3.4 ×4.0	残 8.7		砂粒を含む	やや不良	淡黄褐色	ナデ？：摩耗
8	17	24	ⅡB	黒色粘土	手捏土器	3.5	1.7		密	良好	乳白色	ナデ，摩耗が激しい
8	18	24	ⅡB	青白色粘土	手捏土器	4	3		密	良好	褐色	ナデ
8	19	24	ⅡB	黒色粘土	手捏土器	3.7	2.6		密	良好	乳白色	ナデ
20	1	34	Ⅲ	SK03	須恵器・坏	12.3	4.2	1.1	1㎜以下微砂	良	明灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
20	2	34	Ⅲ	SK03	須恵器・坏	底 7.6	残 1.6	1.1	1㎜以下微砂	良	灰色	ナデ，回転糸切り，ヘラ記号

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
20	3	34	Ⅱ	SK03	須恵器・坏	18.8	残 6.2	1.0	1㎜以下微砂	良	暗灰色	回転ナデ
20	4	34	Ⅱ	SK03, 3群	土師器・甕	19.3	残 4.15		1㎜以下微砂	良好	黄褐色	ヘラケズリ
20	5	34	Ⅱ	SK03, 3群	土師器・壺	24.8	残 4.3		密	良好	赤褐色	ヨコナデ, ヘラケズリ
20	6	34	Ⅱ	SK03, 3群	土師器・甕	24.5	残 3.1		砂粒を含む	良好	黄褐色	ヨコナデ, ヘラケズリ
20	7	34	Ⅱ	SK03	土師器・甕	25	残 12.4		密	良好	暗褐色, 赤褐色	ヨコナデ, ハケメ, ヘラケズリ
20	8	34	Ⅱ	SK03, 3群	土師器・甕	21.2	残 10.1	0.6	1㎜以下微砂	良	鈍い黄橙色	ヨコナデ, ハケメ, ケラケズリ
20	9	34	Ⅱ	SK03, 3群	土師器・甕	25.6	残 5.7		砂粒を含む	良好	明黄褐色	ヨコナデ, ヘラケズリ
20	10	34	Ⅱ	SK03, 3群	竈		残 6.2		1㎜以下微砂	良	黄褐色	ヨコナデ, 指頭圧痕
20	11	34	Ⅱ	SK03, 1群	竈		残 3.4		1㎜以下微砂	良	黄橙色	ナデ
20	12	34	Ⅱ	SK03, 2群	竈		残 7.7		1㎜以下微砂	良	黄橙色	ハケメ, ヘラケズリ, ヨコナデ
20	13	34	Ⅱ	SK03, 2群	竈		残 6.3		1㎜以下微砂	良	黄橙色	ハケメ, ヨコナデ
20	14	34	Ⅱ	SK03, 3群	竈		残 19.3		1㎜以下微砂	良	赤褐色	ヘラケズリ, ハケメ, ヨコナデ
20	15	34	Ⅱ	SK03, 1群	竈		残 12.5		1.2㎜程微砂	良好	赤褐色	ナデ, ハケメ
24	1	35	Ⅱ	SK07埋土中	須恵器・坏	底 10.1	残 2.6	1.0	砂粒を含む	良好	明灰色	ヨコナデ, ナデ
24	2	35	Ⅱ	SK10	須恵器・坏	底 9.2	残 2.4	0.9	砂粒を含む	やや不良	暗灰色	回転ナデ, ナデ, 静止糸切り, ヨコナデ
24	3	35	Ⅱ	SK14	須恵器・皿	10.8	2.8	0.9	砂粒を含む	やや不良	暗灰色	回転ナデ, ナデ, 回転糸切り, ヨコナデ
24	4	35	Ⅱ	SK19	須恵器・坏	高台 10.6	残 3.6	0.9	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ, ナデ, ヨコナデ
24	9	35	Ⅱ	SK14	土師器・土製支脚	2.4 ×3.3	4		砂粒を含む	やや不良	赤褐色	ナデ
24	10	35	Ⅱ	SK10	竈	34.2	残 11.0		砂粒多く含む	良好	黄褐色	ヘラケズリ, ヨコナデ, 指頭圧痕
24	11	35	Ⅱ	SP189	土師器・甕	19.6	残 5.3	1.0	砂粒を含む	良	茶褐色	ヨコナデ, ヘラケズリ
24	12	35	Ⅱ	SK14	土師器・甕	30.2	残 7.0	0.7	砂粒を含む	良	赤褐色	ヨコナデ, ナデ, ケズリ, 外面摩耗
24	13	35	Ⅱ	SK14	土師器・大鉢	54	残 18.1	0.8	密	良好	赤褐色	ヨコナデ, ヘラケズリ, ハケメ
28	1	36	Ⅱ	SX01テラス	須恵器・坏	底 9.4	残 2.6	0.9	微砂粒を含む	良	暗灰色	回転ナデ, ナデ, 回転糸切り痕
28	2	36	Ⅱ	SX01テラス	須恵器・蓋坏(蓋)	14.4	残 2.8	0.8	密	良好	灰白色	回転ナデ, ナデ, 回転ヘラケズリ
28	3	36	Ⅱ	SX01テラス3群	土師器・甕	27.2	残 32.3	0.7	密	良好	黄褐色	ヨコナデ, ハケメ, ヘラケズリ, ケズリ後ナデ
33	1	36	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.0	3.8	0.8	密	良好	青灰色	回転ナデ, 回転糸切り後一部ナデ

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
33	2	36	Ⅱ	褐色土	須恵器・皿	15.0	1.5	0.9	密	やや不良	灰色，赤褐色	回転ナデ，ナデ，静止糸切り
33	3	36	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	12.4	残 3.0	0.5	密	良好	青灰色	回転ナデ
33	4	36	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	底 10.4	残 2.0	0.5	密	良好	灰色	回転ナデ，ナデ，静止糸切り
33	5	36	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	18.2	7.2	1.0	密	良好	灰白色	回転ナデ，ナデ，静止糸切り
33	6	36	Ⅱ	褐色土	土師器・鉢	28	残 10.0	0.8	密微粒を含む	良好	褐色	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ
33	7	36	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	20.2	残 8.4	0.8	密	良好	黄褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
33	8	36	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.5	残 3.1	0.5	砂粒を含む	良好	明灰色	ヨコナデ
33	9	36	Ⅱ	褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	13.1	3.2	0.7	砂粒多く含む	良好	暗灰色	ヘラケズリ，回転ナデ
39	1	37	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.0	残 3.7	0.5	細かい砂粒含	良好	暗褐色	回転ナデ
39	2	37	Ⅱ	SP80	須恵器・坏	13.6	5.5	0.7	微砂粒を含む	やや不良	明緑灰色	回転ナデ，ナデ，ヨコナデ
39	3	37	Ⅱ	SB07	須恵器・壺	高台 9.2	残 9.4	1.5	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ，ヨコナデ
39	4	37	Ⅱ	SP78	須恵器・坏	底 7.8	残 2.5	1.2	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
39	5	37	Ⅱ	SP184	須恵器・坏	底 11.0	残 1.9	1.1	砂粒を含む	良好	暗灰色，褐色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
39	6	37	Ⅱ	SB09	須恵器・皿	19.4	残 2.7	0.7	細かい砂粒含	良好	暗灰色，明灰色	回転ナデ
39	7	37	Ⅱ	SP80	須恵器・蓋坏(蓋)	16.2	残 1.6	0.65	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ
39	8	37	Ⅱ	SB06	須恵器・蓋坏(蓋)	14.3	残 2.0	0.7	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ
39	9	37	Ⅱ	黄褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	18	残 1.4	0.4	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ
39	10	37	Ⅱ	黄褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	つまみ 5.3	残 1.3	0.9	砂粒を含む	良好	明灰色	ヘラケズリ，回転ナデ
39	11	37	Ⅱ	黄褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	つまみ 5.8	残 1.7	1.0	砂粒を含む	良好	灰色	回転ナデ，ナデ
39	12	37	Ⅱ	SB07	土師器・甕	16	残 3.4	0.85	砂粒を含む	良	黄褐色	ヨコナデ
39	13	37	Ⅱ	黄褐色土	土師器・甕	14.8	残 3.0	1.0	砂粒を含む	不良	黄褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
39	14	37	Ⅱ	黄褐色土	土師器・甕	23	残 5.9	0.8	微砂粒を含む	良好	赤褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
39	15	37	Ⅱ	黄褐色土	土師器・甕	25.4	残 4.4	0.65	微砂粒を含む	良	暗黄橙色	ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ？
39	16	37	Ⅱ	黄褐色土	土師器・甕	24.4	残 5.1	0.85	砂粒を含む	良	黄褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
39	17	37	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	14	残 6.6	0.7	微砂粒を含む	良	黄橙色	ヨコナデ，ナデ，ハケメ，ヘラケズリ
39	18	37	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	35.8	残 4.1	0.7	微砂粒を含む	良好	黄橙色	ヨコナデ，ナデ，ハケメ

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
39	19	38	Ⅱ	SP80	手捏土器	6.1	8.1	1.1	微砂粒を含む	やや不良	明黄褐色	ナデ，ヘラケズリ，指おさえ
39	20	38	Ⅱ	SD07	土師器・？	底 6.8	残 2.9	0.7	砂粒を含む	不良	黄褐色	指頭圧痕
39	21	38	Ⅱ	黄褐色土	土師器・竈片	残高 10.5	残幅 16.5	0.8	密	良好	黄褐色	ハケメ，ナデ，ヘラケズリ
39	22	38	Ⅱ	褐色土	土師器・土製支脚	5.0 ×5.2	残 10.7		微砂粒を含む	良	赤褐色	ナデ？：摩耗
39	23	38	Ⅱ	黄褐色土	土師器・把手	4.0 ×4.8	残 8.3		砂粒を含む	良	赤褐色	ナデ
39	24	38	Ⅱ	黄褐色土	土師器・甑・把手	3.3 ×3.4	残 5.0		砂粒を含む	不良	黄褐色	ナデ，ヘラケズリ
39	25	38	Ⅱ	SD08	土師器・土製支脚	2.9 ×3.0	残 3.6		砂粒を含む	やや不良	黄褐色	ナデ
39	26	38	Ⅱ	SP184	土師器・土製支脚	3.5 ×3.7	残 4.3		砂粒を含む	良	黄褐色	摩耗
44	1	39	Ⅱ	SP213	須恵器・蓋坏(蓋)	10.8	残 1.8	0.5	砂粒を含む	良	明灰色	回転ナデ，ヘラケズリ
44	2	39	Ⅱ	褐色土	手捏土器	2.7	2.4	0.8	密	良好	褐色	ナデ
44	3	39	Ⅱ	褐色土	手捏土器	3.6	2.2	1.1	密	良好	赤褐色	ナデ
44	4	39	Ⅱ	褐色土	把手	3.4 ×4.3	残 6.6		密	良好	赤褐色	ナデ，ヘラケズリ，ハケメ
44	5	39	Ⅱ	褐色土	土師器・把手	2.5 ×2.8	残 4.0		密細砂粒含む	良好	黄褐色	ナデ：摩耗
51	1	40	Ⅱ	褐色土(上)	須恵器・坏	高台 10.0	残 2.6	1.1	密	不良	淡赤褐色	ナデ，ヨコナデ
51	2	40	Ⅱ	褐色土(下)	須恵器・坏	底 10.4	残 3.7	1.2	微砂粒を含む	良好	灰白色	回転ナデ，ナデ，ヘラ記号
51	3	39	Ⅱ	SP282	土師器・甕	24.8	残 2.4	1.2	砂粒を含む	やや不良	黄褐色	ヨコナデ
51	4	40	Ⅱ	褐色土(上)	土師器・土製支脚	5.8 ×5.9	残 17.0		微砂粒を含む	やや不良	赤褐色	ナデ？：摩耗
51	5	40	Ⅱ	褐色土(下)	土師器・土製支脚	5.9 ×6.1	残 17.5		微砂粒を含む	やや不良	暗黄褐色	ナデ
51	8	39	Ⅱ	褐色土(上)	手捏土器	5.4	2.8	1.4	密	良好	赤褐色	ナデ
51	9	39	Ⅱ	褐色土(上)	手捏土器	3	2.5		密	良好	赤褐色	ナデ
51	10	39	Ⅱ	褐色土(下)	土製支脚	3.3 ×3.4	残 6.6		砂粒を含む	良好	黄褐色	ヘラケズリ後ナデ
51	11	39	Ⅱ	SP295	土師器・竈		残 5.5		砂粒を含む	不良	黄褐色	
54	1	41	Ⅱ	赤褐色土	須恵器・蓋坏(身)	11.4	3.35	1.1	1㎜程砂粒含	良好	灰白色	回転ナデ，ナデ，ヘラケズリ
54	2	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏(身)	11	3.0	0.8	微砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ，自然ゆう，ヘラ記号
54	3	0	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	11.3	残 3.6	0.9	微砂粒を含む	良好	暗褐色	回転ナデ，ナデ
54	4	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.6	4.0	1.0	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
54	5	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	11.2	3.2	0.9	微砂粒を含む	やや不良	青灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
54	6	41	Ⅱ	赤褐色土	須恵器・坏	10.6	残 3.4	0.8	1㎜程微粒含	良好	黒褐，褐色	回転ナデ，ナデ
54	7	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	12.4	4.0	0.8	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
54	8	41	Ⅱ	赤褐色土	須恵器・坏(身)	11.4	4.0	0.9	1㎜程砂粒含	やや不良	暗灰，黄褐色	回転ナデ，ナデ，ヘラ記号
54	9	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	12.5	4.6	1.0	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ，沈線
54	10	41	Ⅱ	赤褐色土	須恵器・坏	底 8.0	残 3.3	0.7	密	不良	灰色	摩耗
54	11	41	Ⅱ	赤褐色土	須恵器・皿	底 7.0	残 2.0	0.9	微砂粒を含む	良好	灰色	回転ナデ，静止糸切り後ナデ，ナデ
54	12	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・皿	底 8.0	残 2.2	0.9	微砂粒を含む	やや不良	茶褐色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
54	13	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・皿	13	2.7	1.0	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
54	14	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・皿	15.2	2.9	0.7	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
54	15	42	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.8	5.7	0.7	1㎜以下微砂	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ
54	16	42	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	12.2	4.5	0.75	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，回転糸切り，ヘラ記号
54	17	42	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	12.4	4.6	1.0	微砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，回転糸切り，ヘラ記号
54	18	42	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	15.8	5.5	0.9	微砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
54	19	42	Ⅱ	赤褐色土	須恵器・坏	15.6	5.6	1.3	微砂粒を含む	良好	灰色	回転ナデ，回転糸切，ナデ
54	20	42	Ⅱ	褐色土	須恵器・皿	18.8	3.9	0.8	微砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
54	21	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.8	残 4.4	0.7	密	良好	灰色，淡灰色	ヨコナデ
54	22	42	Ⅱ	褐色土	須恵器・皿	18.4	3.9	0.8	細砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，回転糸切り，ナデ
54	23	42	Ⅱ	赤褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	14.4	3.3	0.8	1㎜程微粒含	やや不良	灰黄色	回転ナデ，ヘラケズリ，ナデ，ヨコナデ
54	24	41	Ⅱ	褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	13	残 2.6	1.0	1㎜程微粒含	良好	灰色	回転ナデ，回転ヘラケズリ，ナデ
54	25	42	Ⅱ	褐色土	須恵器・長頸壺	8.6	残 8.3	0.65	1㎜程微粒含	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ，自然ゆう
54	26	41	Ⅱ	赤褐色土	須恵器・壺底部	底 7.2	残 5.4	1.0	1㎜程微粒含	良好	黒褐色	回転ナデ，ナデ
55	1	43	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	15	残 3.1	0.8	密微砂粒を含	良好	赤褐，褐色	ハケメ後ヨコナデ，ヨコナデ，ヘラケズリ
55	2	43	Ⅱ	赤褐色土	土師器・壺	26.8	残 3.3	0.7	密1～3㎜粒含	良好	赤褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
55	3	43	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	19.2	残 2.5	0.75	密1㎜程粒含	良好	赤褐，褐色	ハケメ後ヨコナデ，ヘラケズリ
55	4	43	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	29.8	残 5.3	0.85	密	良好	褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
55	5	43	Ⅱ	赤褐色土	土師器・壺	20.4	残 3.5	0.8	密	良好	赤褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
55	6	43	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	25.4	残 3.7	1.0	密	良好	淡赤褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
55	7	43	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	21.2	残 5.7	0.7	密	良好	赤褐色	ハケメ？，ヨコナデ，ヘラケズリ
55	8	43	Ⅱ	SP421	土師器・甕	13.5	残 3.2	0.8	砂粒を含む	やや不良	黄褐色	ヨコナデ，ケズリ
55	9	43	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	21	残 4.4	0.6	密1～2mm粒含	良好	褐色	ハケメ後ヨコナデ，ヨコナデ
55	10	43	Ⅱ	SP428	土師器・甕	29.2	残 5.2	0.7	砂粒を含む	やや不良	黄褐色	ヨコナデ，ケズリ
55	11	43	Ⅱ	赤褐色土	土師器・甕	21.6	残 6.1	0.9	砂粒を含む	良好	黄褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
55	12	43	Ⅱ	赤褐色土	土師器・甕	29.5	残 4.0	1.3	砂粒を含む	良好	黄褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
55	13	43	Ⅱ	赤褐色土	土師器・甕	21.5	残 8.7	0.8	砂粒を含む	良好	茶褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ？
55	14	43	Ⅱ	赤褐色土	土師器・甕	23.4	残 3.5	1.1	微砂粒を含む	良好	黄褐色	ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ
55	15	43	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	25.8	残 12.7	0.9	砂粒を含む	良好	黄橙色	ナデ，ハケメ，ヘラケズリ
55	16	44	Ⅱ	赤褐色土	土師器・甕	38.2	残 5.5	1.6	砂粒を含む	良好	黄褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
55	17	44	Ⅱ	赤褐色土	土師器・甕	37.8	残 3.7	1.85	砂粒を含む	良好	黄褐色	ヨコナデ
55	18	44	Ⅱ	赤褐色土	土師器・甕	43.2	残 4.7	1.4	砂粒を含む	良好	茶褐色	ヨコナデ，ヘラケズリ
56	1	44	Ⅱ	褐色土	土師器・土製支脚	5.6 ×6.1	9.95		密	良好	黄褐色	ヘラケズリ
56	2	44	Ⅱ	褐色土	土師器・土製支脚	5.8 ×6.1	残 15.4		密	良好	赤褐色	ナデ
56	3	44	Ⅱ	赤褐色土	土師器・土製支脚	4.2 ×4.3	残 8.9		1mm程微粒含	やや不良	赤褐色	摩耗
56	4	44	Ⅱ	褐色土	土師器・竈		残 7.3		密1～2mm粒含	良好	赤褐色	ナデ，ヘラケズリ
56	5	44	Ⅱ	褐色土	手捏土器	4.0	2.9		密	良好	褐，灰褐色	ナデ
56	6	44	Ⅱ	褐色土	土師器・把手	2.7 ×3.1	残 7.0		密	良好	黄褐色	ナデ
56	7	44	Ⅱ	褐色土	土師器・把手	2.9 ×3.1	残 5.0		密1～2mm粒含	良好	赤褐色	ナデ，ヘラケズリ，赤色顔料
63	1	45	Ⅱ	黒褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	17	残 2.2	0.7	細砂粒を含む	良好	暗灰色	ヨコナデ，ヘラケズリ，ナデ
63	2	45	Ⅱ	黒褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	つまみ 6.2	残 1.8	0.9	砂粒を含む	良好	明灰色	ヨコナデ，ヘラケズリ，ナデ
63	3	45	Ⅱ	黒褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	つまみ 4.4	残 2.2	1.0	砂粒を含む	良好	明灰色	自然ゆう
63	4	45	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.3	4.2	0.9	1mm以下微砂	良好	黒褐色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
63	5	45	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	11.7	4.1	0.9	1mm以下微砂	良好	黒褐，灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	法量(cm) 口径	器高	厚さ	胎土	焼成	色調	調整
63	6	45	Ⅱ	褐色土	須恵器・蓋坏(蓋)	13.0	2.7	0.8	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ
63	7	45	Ⅱ	SP385	須恵器・坏	底 8.4	残 1.4	0.8	砂粒を含む	不良	明灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
63	8	45	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.0	残 4.5	1.0	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
63	9	45	Ⅱ	褐色土	須恵器・皿	12.2	2.1	0.8	砂粒を含む	良好	赤褐色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
63	10	45	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	高台 7.6	残 3.8	1.0	砂粒を含む	やや不良	明灰色	回転ナデ，回転糸切り
63	11	45	Ⅱ	SP382	須恵器・坏	高台 10.0	残 4.0	0.7	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ
63	12	46	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	13.6	5.0	0.7	密	良好	灰，灰白色	回転ナデ，ナデ
63	13	46	Ⅱ	SP388	須恵器・坏	14.8	残 3.6	0.4	砂粒を含む	良	明灰色	回転ナデ
63	14	46	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	12.2	残 4.6	0.8	砂粒を含む	良好	暗灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
63	15	46	Ⅱ	褐色土	須恵器・坏	底 9.6	残 3.7	0.8	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ，回転糸切り
63	16	46	Ⅱ	褐色土	須恵器・皿	15.6	残 3.1	0.7	砂粒を含む	不良	明灰色	回転ナデ，ロコナデ，回転糸切り
63	17	46	Ⅱ	褐色土	須恵器・高坏	脚径 4.2	残 4.1	1.4	砂粒を含む	良好	明灰色	回転ナデ，ナデ
63	18	46	Ⅱ	褐色土	須恵器・長頸壺	9.6	残 2.7	0.6	密	良好	灰緑色	回転ナデ，自然ゆう，沈線
63	19	46	Ⅱ	褐色土	土師器・甕	残高 6.9	残幅 18.5		密	良好	赤褐色	ナデ

オノ峠瓦観察表

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	胎土	焼成	色調	調整
10	1	25	ⅡB	黒色粘土	軒平瓦	微砂粒を含む	良好	青灰色	凹布目痕ケズリ凸格子タタキ砂着
10	2	25	Ⅰ	褐色土	軒平瓦	砂粒を含む	良好	暗灰色	凹面凸面ケズリ
10	3	25	ⅡB	黒色粘土	軒平瓦	砂粒を含む	不良	淡黄色	凸糸切り痕布目痕凹ナデ
10	4	26	ⅡB	黒色粘土	丸瓦	砂粒を含む	不良	黒色，明灰色	凹ケズリ，布目痕凸ナデ
10	5	26	ⅡA	黒色粘土	丸瓦	砂粒を含む	良	明灰色	凹面布目痕，ケズリ，凸ナデ
10	6	26	ⅡB	黒色粘土	丸瓦	砂粒を含む	やや不良	淡茶灰色	凹布目痕凸ナデ
10	7	26	ⅡB	黒色粘土	丸瓦	白色砂粒含	良	青灰色	凹布目痕，ケズリ凸ナデ
11	1	27	Ⅰ	褐色土	丸瓦	砂粒を含む	やや不良	黄褐色	凹面布目ケズリ，凸面ナデ

埴図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	胎土	焼成	色調	調整
11	2	27	Ⅰ	褐色土	丸瓦	砂粒を含む	不良	淡灰色	凹面布目ケズリ，凸ナデ
11	3	27	Ⅰ	褐色土	丸瓦	砂粒を含む	やや不良	明灰色	凹面布目痕凸面ケズリ，玉縁
11	4	27	ⅡB	黒色粘土	丸瓦	砂粒を含む	良	明灰色	凹面布目痕，ケズリ凸面ナデ
11	5	27	Ⅰ	褐色土	平瓦	砂粒を含む	やや不良	黄褐色	凸斜格子タタキ凹布目痕？：摩耗
11	6	27	ⅡB	黒色粘土	のし瓦	1㎜程砂粒含	やや不良	灰白色	凹布目痕，凸斜格子タタキ，ケズリ
11	7	27	Ⅰ	褐色土	平瓦	密	良好	淡褐色	凸無調整，凹布目痕ヘラケズリ
12	1	28	ⅡB	黒色粘土	平瓦	細かい砂粒含	良	明灰色	凹面布目痕，ケズリ凸面縄目タタキ
12	2	28	ⅡB	黒色粘土	平瓦	砂粒多く含む	良好	明灰色	凹糸切り痕，布目痕，凸縄目タタキ
12	3	28	Ⅰ	黒色粘土	平瓦	砂粒を含む	良	青灰色	凸面縄目タタキ，凹面布目痕
12	4	28	ⅡB	黒色粘土	平瓦	砂粒を含む	良	暗灰色	凹糸切り痕，凸縄目タタキ
13	1	29	ⅡB	黒色粘土	平瓦	砂粒を含む	やや不良	淡褐色	凹摩耗，凸格子タタキ
13	2	29	ⅡB	黒色粘土	隅切瓦	砂粒を含む	良好	青灰色	凹ケズリ布目痕，凸縄目タタキ離れ砂
13	3	29	ⅡB	黒色粘土	平瓦	砂粒殆ど無し	やや不良	淡灰色	凹布目痕，凸格子タタキ
13	4	29	ⅡB	黒色粘土	平瓦	密細かい砂粒	やや不良	淡灰色	凹布目痕ケズリ凸格子タタキ
13	5	29	ⅡB	黒色粘土	平瓦	白色砂粒含	やや不良	明白褐色	凹布目痕ケズリ，凸平行タタキ
13	6	29	ⅡB	黒色粘土	平瓦	1㎜程砂粒含	良好	青灰色	凹布目痕，ケズリ，凸平行タタキ
13	7	29	ⅡB	黒色粘土	平瓦	ほぼ密	良好	灰色	凹布目痕ケズリ凸平行タタキ
13	8	29	ⅡC	黒色粘土	平瓦	密	不良	黒灰色	凹ヘラケズリ，布目痕，凸格子タタキ
14	1	30	ⅡB	黒色粘土	平瓦	砂粒多く含む	良	青灰色	凹布目痕ケズリ凸離れ砂，無調整
14	2	30	ⅡB	黒色粘土	平瓦	砂粒多く含む	良好	暗灰色	凹布目痕，糸切り痕，ケズリ凸離れ砂
14	3	30	Ⅰ	褐色土	平瓦	密	良好	白色	凸摩耗(縄目痕)凹糸切り痕，ヘラケズリ
14	4	30	ⅡB	黒色粘土	塼(セン)	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	凹凸面糸切り痕
14	5	30	ⅡA	黒色粘土	平瓦	砂粒多く含む	良好	明灰色	凸離れ砂凹布目痕，糸切り痕，ケズリ
14	6	30	ⅡB	黒色粘土	平瓦	砂粒を含む	やや不良	灰白色	凹布目痕糸キリ凸平行タタキ，ケズリ
14	7	30	ⅡB	黒色粘土	平瓦	砂粒を含む	不良	淡灰色	凹糸切り痕ケズリ，凸平行タタキ
14	8	30	ⅡA	黒色粘土	平瓦	砂粒を含む	良	青灰色	凸面平行タタキ，凹面糸切り痕，ケズリ

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	胎土	焼成	色調	調整
14	9	30	Ⅰ	黒色粘土	平瓦	砂粒を含む	良好	青灰色	凹面布目痕，糸切り痕凸ナデ
33	10	36	Ⅱ	褐色土	丸瓦	密微粒を含む	やや不良	黄褐色	凹布目痕糸切痕凸縄目タタキ，ナデ
44	63	9	Ⅱ	褐色土	平瓦	密少量砂粒含	良好	淡黄褐色	凹布目痕凸縄目タタキ
52	1	40	Ⅱ	褐色土(上)	丸瓦	砂粒を含む	良好	暗灰色	凹布目痕，ケズリ凸ナデ
52	2	40	Ⅱ	褐色土(下)	平瓦	微砂粒を含む	良好	灰色	凹布目痕ナデ凸縄目タタキ，ヘラケズリ
57	1	45	Ⅱ	褐色土	丸瓦	密	不良	橙色	凹布目痕，ヘラケズリ凸ナデ
57	2	45	Ⅱ	赤褐色土	平瓦	微砂粒を含む	やや不良	黄褐色	凹布目痕凸格子タタキ，ケズリ
57	3	45	Ⅱ	赤褐色土	平瓦	大粒砂粒含む	良好	淡灰色	凹布目痕糸切痕凸縄目タタキ
57	4	45	Ⅱ	褐色土	平瓦	砂粒を含む	良好	黒灰色	凹布目痕糸切痕凸縄目タタキ，ケズリ
63	23	46	Ⅱ	褐色土	丸瓦	密	良好	青灰色	凹布目痕凸ナデ，ヘラケズリ

オノ峠遺跡土製品観察表

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	胎土	焼成	色調	調整
9	1	24	Ⅰ	灰褐色土	土錘	5	3.3			褐色	ナデ
9	2	24	ⅡB	黒色粘土	土錘	4	2.9			乳白色	ナデ
9	3	24	Ⅰ	褐色土	土錘	4.5	2.6			乳白色	ナデ
9	4	24	ⅡB	黒色粘土	土錘	4.8	3.1			褐色	ナデ
9	5	24	Ⅰ	黒色粘土	土錘	4.7	3.1			褐色	ナデ
9	6	24	Ⅰ	褐色土	土錘	残 4.2	3			褐色	ナデ
9	7	24	ⅡA	黒褐色土	土錘	3.7	2.9			乳白色淡灰色	ナデ
9	8	24	ⅡB	黒色粘土	土錘	2.4	2.7			乳白色	ナデ
9	9	24	ⅡB	黒色粘土	土錘	3.4	3.0			褐色	ナデ
9	10	24	ⅡB	黒色粘土	土玉	3.0	2.8			乳白色	ナデ
9	11	24	ⅡB	黒色粘土	土錘	2.8	2.9			乳白色，淡灰色	ナデ
9	12	24	ⅡB	黒色粘土	土錘	3.6	3.5			褐色	ナデ

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	胎土	焼成	色調	調整
9	13	24	ⅡB	黒色粘土	土錘	2.3	2.8			褐色	ナデ
9	14	25	Ⅰ	褐色土	土錘	3	1.1			暗赤褐色	ナデ
9	15	25	Ⅰ	黒色粘土	土錘	3.1	1			乳白色	ナデ
9	16	25	Ⅰ	褐色土	土錘	3.2	1.5			褐色	ナデ
9	17	25	Ⅰ	褐色土	土錘	3.3	0.9			赤褐色	ナデ
9	18	25	Ⅰ	褐色土	土錘	3.2	1.1			黄褐色	ナデ
9	19	25	Ⅰ	褐色土	土錘	2.9	0.7			淡赤褐色	ナデ
9	20	25	Ⅰ	褐色土	土錘	3.6	0.8			黒褐色	ナデ
9	21	25	Ⅰ	褐色土	土錘	2.1	1.7			赤褐色	ナデ
9	22	25	ⅡB	黒色粘土	土錘	4.5	1.7			乳白色	ナデ
9	23	25	ⅡB	黒色粘土	土錘	6	1.6			褐色	ナデ
9	24	25	ⅡB	黒色粘土	土錘	6.3	1.8			乳白色	ナデ
9	25	25	Ⅰ	褐色土	土錘	4.2	2			赤褐色	ナデ
9	26	25	ⅡB	黒色粘土	土錘	4.7	1.6			乳白色，黒灰色	ナデ
9	27	25	Ⅰ	褐色土	分銅状土製品	器高 2.4	幅 4.8	砂粒殆ど無し	良	黄褐色	
24	5	35	Ⅱ	SK14	土錘	6.9	2			黒灰色，褐色	ナデ
24	6	35	Ⅱ	SK14	土錘	5.8	1.7			乳白色	摩耗
24	7	35	Ⅱ	SK14	土錘	5.7	2.2			赤褐色	ナデ
24	8	35	Ⅱ	SK14	土錘	6.5	1.7			黒灰，褐色	ナデ
39	27	38	Ⅱ	黒色粘土	土馬	2.7×3.8	残 6.7	砂粒を含む	不良	淡褐色	ナデ
51	6	39	Ⅱ	褐色土(下)	土錘	5.4	2			淡赤褐色	ナデ
51	7	39	Ⅱ	褐色土(下)	土錘	4.8	1.9			淡赤褐色	ナデ
56	8	44	Ⅱ	褐色土	土錘	4.1	3.1			乳白色	ナデ
56	9	44	Ⅱ	褐色土	土錘	3.2	2.8			褐色	ナデ
56	10	44	Ⅱ	赤褐色土	土錘	5.2	1.6			褐色	ナデ
63	20	46	Ⅱ	黒褐色土	土玉	2.6	2.3			褐色	

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	胎土	焼成	色調	調整
63	21	46	Ⅱ	褐色土	土錘	5.8	2.2			褐色	ナデ
63	22	46	Ⅱ	褐色土	土錘	3.4	1.2			乳白色	ナデ

オノ峠石器観察表

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
17	1	32	Ⅰ	褐色土	蛤刃石斧	11.6	5.2	4.3	400.8	
17	2	32	Ⅰ	褐色土	石斧	15.4	3.9	1.3	122.9	
17	3	32	ⅡB	黒色粘土	砥石	残 6.3	6.8	6.6	521.8	
17	4	32	ⅡB	黒色粘土	石斧	6.3	2.6	1.3	27.2	
17	5	32	ⅡB	黒色粘土	石錘	6	6.3	1	52.1	
17	6	32	ⅡB	黒色粘土	石錘	残 5.6	5.3	1.1	37.4	
17	7	32	Ⅰ	褐色土	黒曜石・石鏃	2.1	残 1.5	0.3	0.49	
17	8	32	Ⅰ	褐色土	黒曜石・石鏃	残 1.5	1.3	0.4	0.45	
17	9	32	Ⅰ	灰色土	黒曜石・石鏃	残 1.8	1.3	0.2	0.51	
17	10	32	Ⅰ	褐色粘土	黒曜石・石鏃	3	1.9	0.3	0.91	

オノ峠木製品観察表

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
15	1	31	ⅡB	黒褐色土	木簡	13.8		0.4	
15	2	31	Ⅰ	黒色粘土	丸木弓	残 74.5	径 1.5		ケズリ
15	3	31	Ⅰ	褐色土	木箸	22.4	幅 0.8		6方向に面取り
15	4	31	Ⅰ	灰色粘土	支脚	9.6	上幅 3.2	下幅 2.2	ケズリ
15	5	31	Ⅰ	黒色粘土	用途不明品	残 28.7			

オノ峠金属器観察表

挿図番号	図版番号	写真図版	調査区	土層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
16	1	31	I	黒色粘土	煙管雁首	6.7	0.8	0.1	
16	2	31	IB	黒灰色土	煙管吸口	7	0.4～0.8	0.08	
16	3	31	I	褐色土	刀子	19.1	1.3	0.3	刀身長12.5cm茎部に木質残る。
16	4	31	IB	黒色粘土	鉄釘	7.9	0.5～0.6		頭部L字形に曲がる。
16	5	31	I	褐色土	鉄釘	6.5	0.9		頭部L字形に曲がる。
16	6	31	I	褐色土	鉄釘	15.9	0.5～1		頭部L字形に曲がる。大型
16	7	31	IA	褐色土	鉄鏃	5.5	2.8	茎残存 1.8	
16	8	31	I	黒色粘土	古銭				
16	9	31	I	黒色粘土	古銭				
16	10	31	I	褐色土	古銭				

図　　版

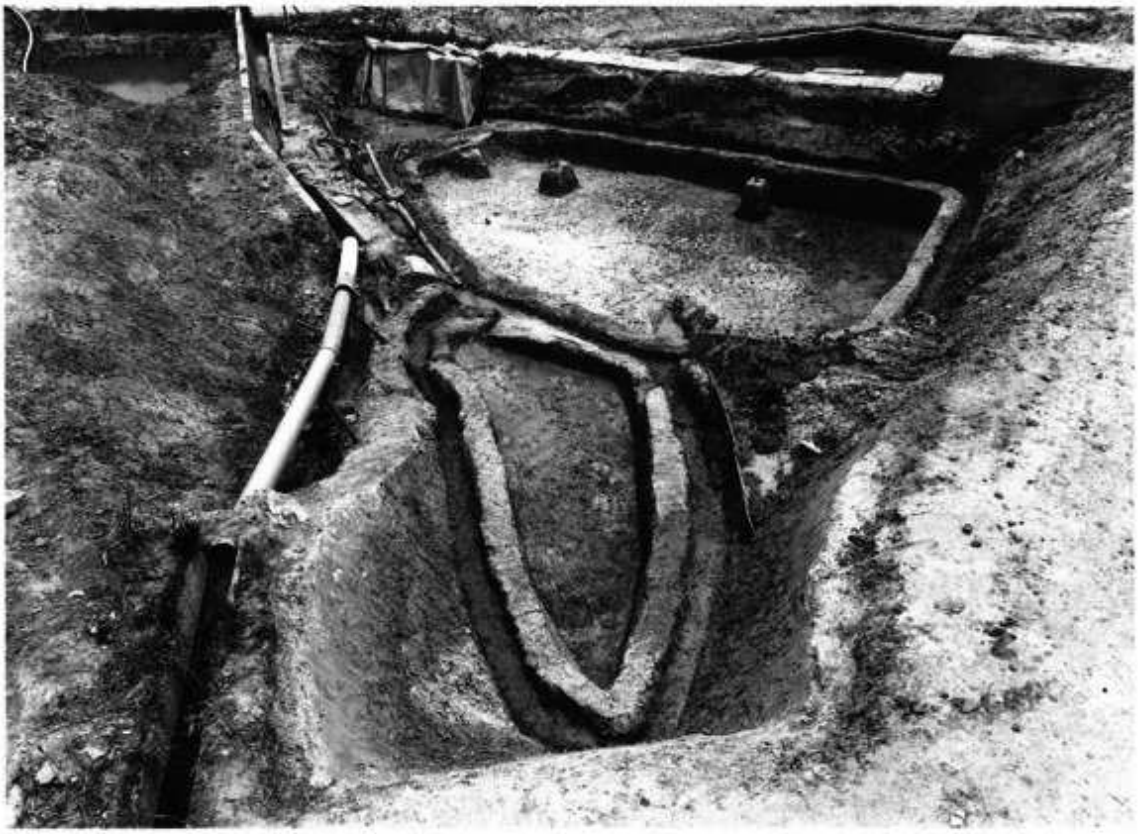
第Ⅰ調査区表土除去後(西より)

第Ⅰ調査区全景(南より)

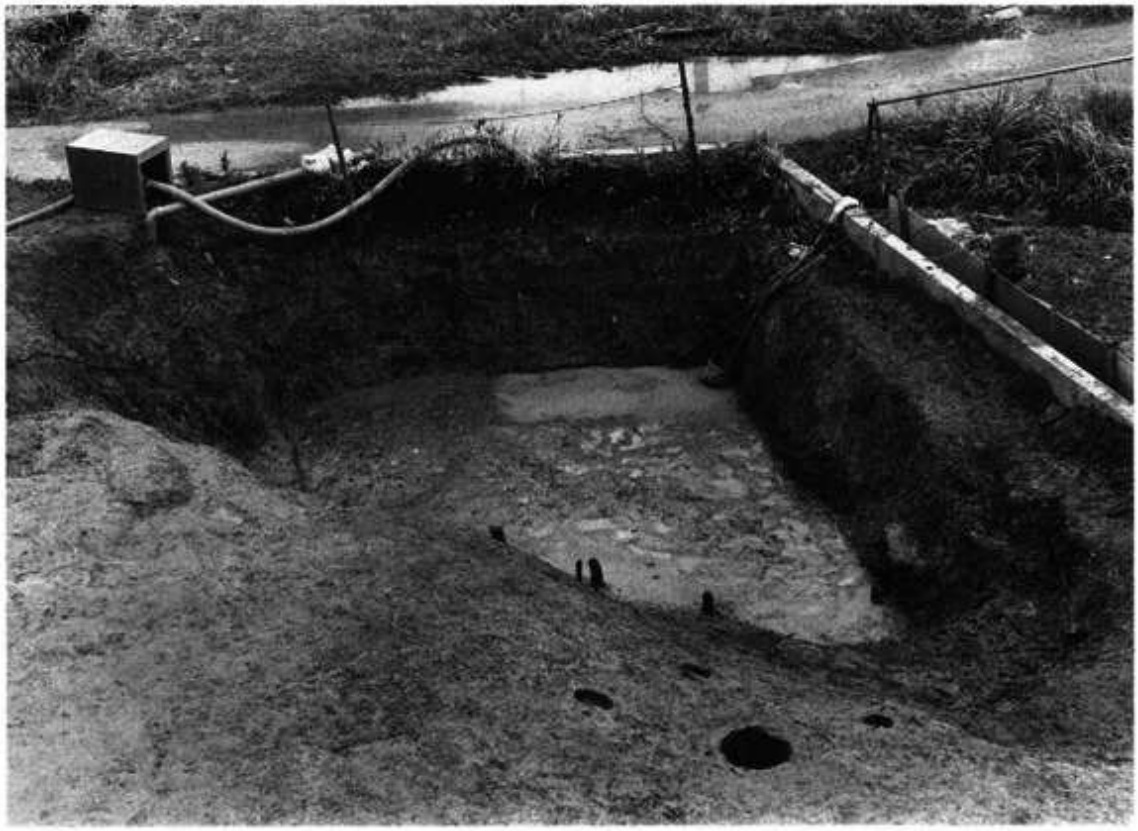
図版 2

第Ⅱ調査区表土除去後(西より)

第Ⅱ-A調査区全景(北より)

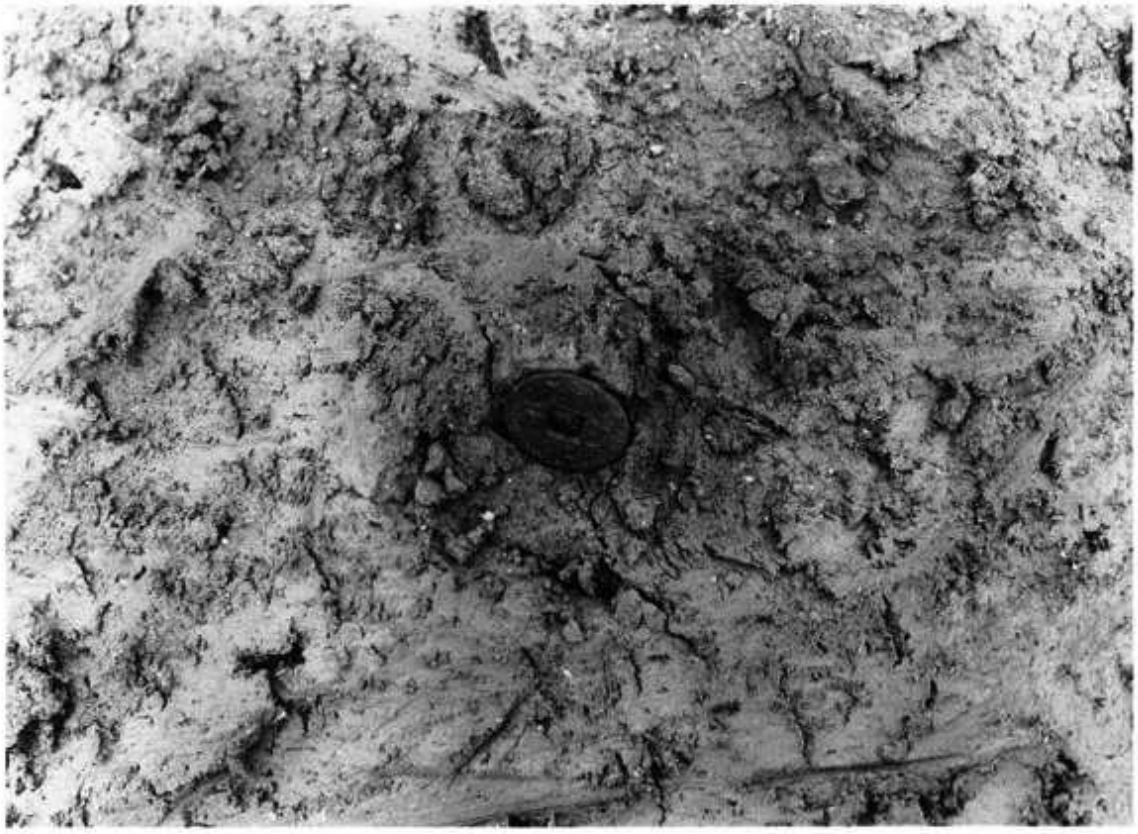


第Ⅱ-B調査区全景(西より)



第Ⅱ-C調査区全景(西より)

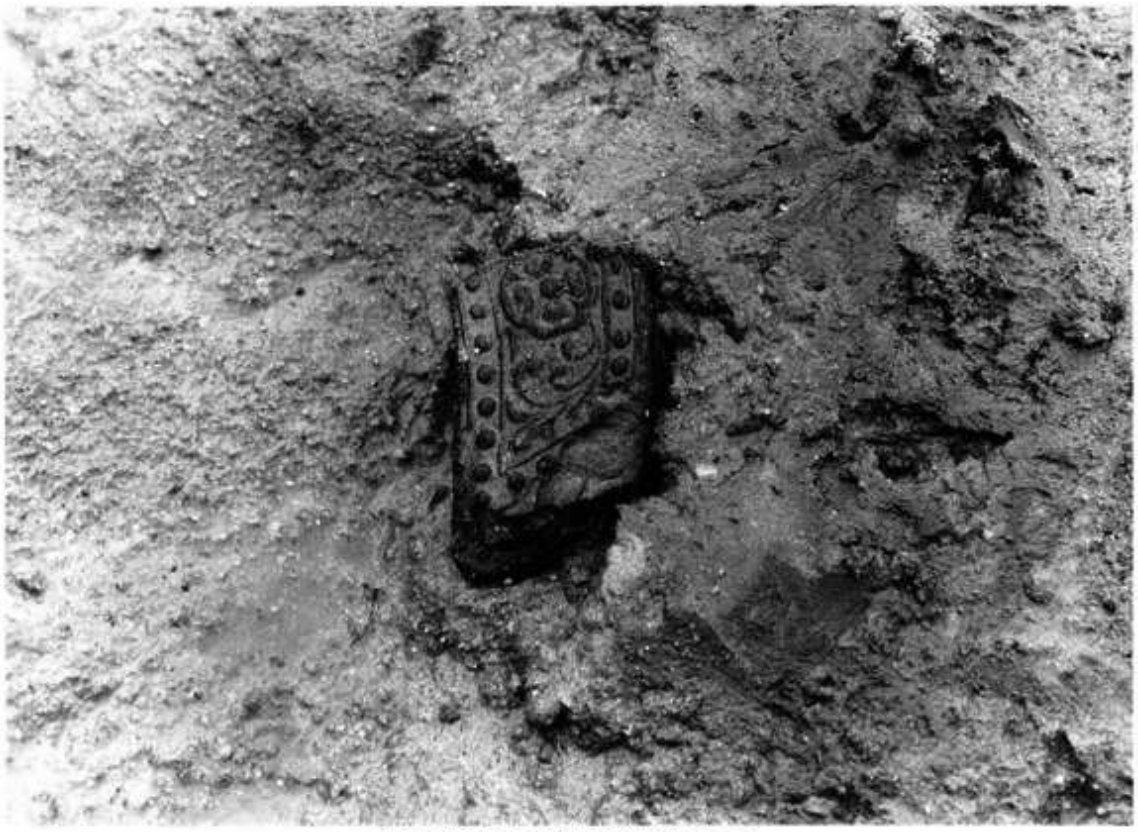
図版 4



第Ⅰ調査区遺物出土状況(褐色土中出土)

第Ⅰ調査区遺物出土状況(褐色土中出土)

第Ⅱ調査区遺物出土状況(黒色粘土)



第Ⅱ調査区遺物出土状況(褐色土)

図版 6

第Ⅲ調査区全景(東より)

第Ⅲ調査区全景(北より)

第Ⅲ調査区第２～第10加工段全景（南より）

第１加工段遺構検出状況（西より）

図版 8

SX01土器溜り（西より）

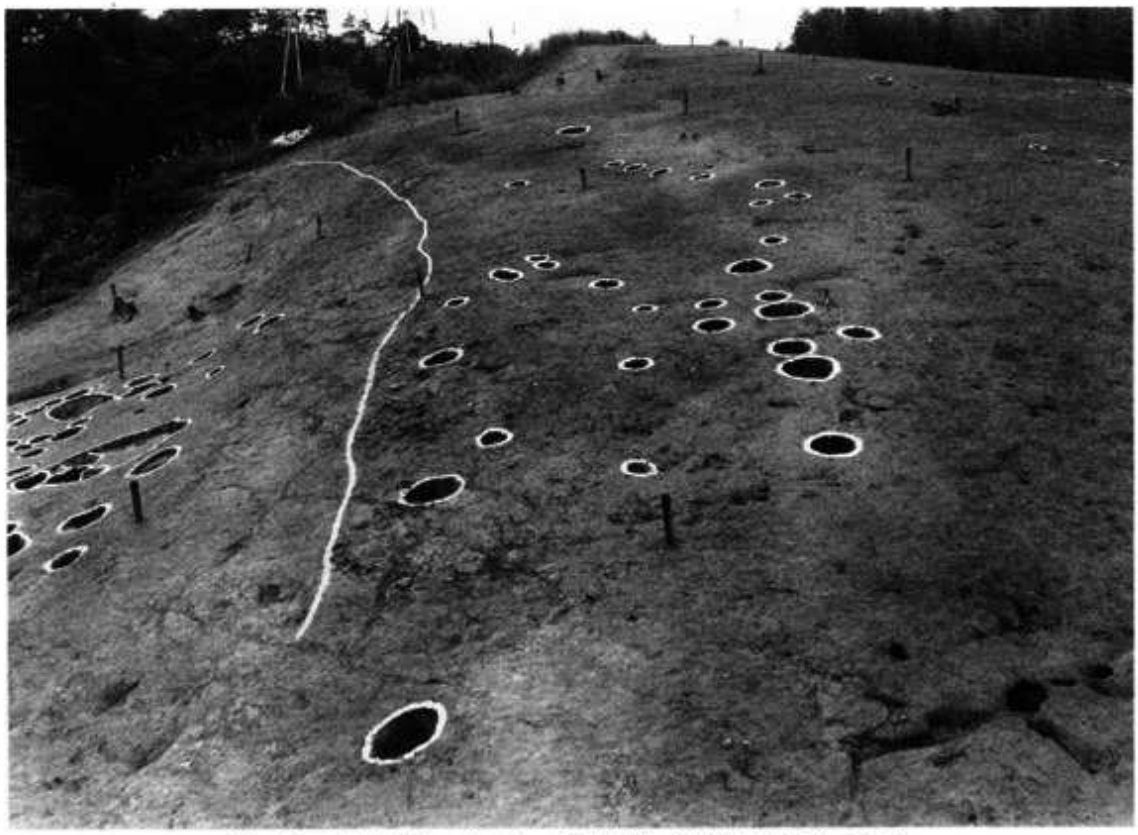
SK03遺物出土状況（北より）

SK03(手前)・SK05(奥)

SK04

図版10

第２、第３（右端）加工段掘下げ前



第２加工段（中央）、第４加工段（左端）遺構検出状況（西より）

第３加工段上面遺構検出状況（西より）

第４、第５加工段遺構検出状況（北より）

図版12

第３加工段下面遺物出土状況
（西より）

同　上（南より）

同　上（南西より）

第２～第５加工段
遺構検出状況（南より）

第５～第７、第９加工段
遺構検出状況（南西より）

図版14

SK10遺物出土状況

SK14遺物出土状況

第7加工段掘下げ前(西より)

第8加工段掘下げ前(北西より)

第７加工段上面遺構検出状況（南より）

第７加工段遺物包含層遺物出土状況

第７加工段下面
遺構検出状況（南より）

第８加工段遺構検出状況
（東より）